

塔柳川

昭和五十八年二月二十五日印刷
昭和五十八年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷六七〇号



日川協加盟

No. 670

三月号

いちご狩吟行

本場大和のいちご狩を楽しみませんか。宮口笛生さんのご好意により丹精のいちご園を解放していただきます。

■昭和58年5月1日(日) 午前10時現地集合

■集合場所 三松禅寺(地図参照)

近鉄奈良線西大寺駅で橿原神宮行
又は天理行に乗り換え「九条」下車。

■兼題

「いちご」

森田カズエ 選

「埴輪」

香川 静々 選

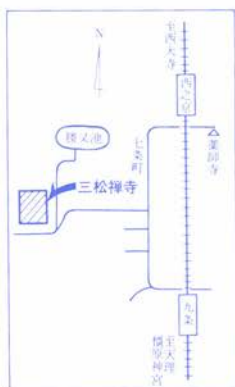
「掘る」

岩本雀師子 選

各題2句・投句締切午後2時

■会費 千五百円(昼食代含む)

★50名で締切らせていただきます。



川柳塔社

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



豚饅・焼餃子
焼売・又焼饅



大阪・なんば



TEL (641) 0551

《支店・出張店》

なんば高島屋 心斎橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋
中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 ドーゾマ地下支店
ミナミ地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア
南海難波駅構内店 近鉄百貨店(アベノ店・上本町店・奈良店・東大阪店)

觚、觚ならず

西尾 栗

尼祿之助氏に

やがてやがてカタカナの国になる

という面白い句がある。自分も全く同感で、共感久しうするものである。街を歩いても、テレビを見ても、人と話しても、一体デメエは何処の人間だと言いたくなる、カタカナの広告であり、名前であり、言葉である。

そこで論語を開けてみる。

子曰く觚 觚ならず。觚ならんや觚ならんやと。

「先生、買って参りました」

そいつて、門人の一人が孔子の前に、十ばかりの觚を箱から出して並べた。觚はその当時の酒器の一種である。

孔子はいちいちそれを手にとつて仔細に眺めていたが、いいとも、悪いともいわないでじつと考えこんだ。門人は手持無沙汰で立っていた。然し何時までたつても孔子は黙りこんでいるので、おじきをして、部屋を出ようとした。すると孔子が言った。

「これが觚というものかな」

門人は不思議そうな顔をして孔子を見た。彼は、孔子が觚を知らないわけではない、と思つたのである。

「觚には稜があるはずじや。もともと觚と

いうのは、稜という意味じやでの」

門人はおかしくなつた。今頃名称なんかにかたわつて、どうするつもりだらう。そんな昔風の觚が、どこの店を探したつてあるものではないと思つた。彼は微笑しながら答えた。

「それが、この頃の觚でございます」

孔子は愈々真面目な顔で言つた。

「そうか、之がこの頃の觚か。……いや、之は觚ではない。觚ではない」

門人は当惑した。彼は一生懸命弁明した。

「でも、どこの家でも、今ではその型のものを使っています。第一、稜のある觚なんか店売っておりませんので」

「ふむ、売っていないのか、然し之は觚ではない、觚ではない、嘆かわしいことじや」

孔子は首を振つた、目を閉じて考え始めた。

門人は愈々わけがわからなくなつた。彼は、おすおす孔子の前に並んでいゝ觚を重ね始めた。すると孔子は急にやさしい声で言つた。

「まあ、おかけ。觚はそのままでいい」

門人が腰をかけると、孔子はしずかに言つた。

「何物でも、その特質を失ふことはよくないことじや。そこに道の紊れるものがある」

門人は孔子が何を考へていたかが、やつと解つて、急にいすまいを正した。

「人間には人間の特質がある。その特質を守るところに、人間の道があるのじや、とりわけ中庸の徳は至高至善のもので、それを忘

れたら、名は人間であつても、人間の実があるとは言えない」

ここで孔子は、再び自分の前に並んでいる觚を、まじまじと見つめた。そして、いかにも思い入つたようにいつた。

「名実相伴わぬ世の中になつて、もつ久しいものじやのう」

門人は唯うなすくよりしかたがなかつた。

「いや、之はつい繰り言になつてしまつた。では、あちらへ行つてお休み、御苦労であつた」

門人はすぐ立ち上つたが、觚をどう始末したものか迷つた。そして、きまり悪そうに孔子に訊ねた。

「ではこの觚は店に戻すことにしましようか」

孔子は急に声をたてて笑いながら門人をふり返つた。

「いや、それはそれでいい。觚は酒を注ぐための道具じや、酒さえ注げれば、稜があろうとなかろうと構うことはない。箱に入れてしまつて置いてくれ」

門人は幾度か首をかしげながら觚を箱に納めて部屋を出た。

觚を、川柳に替へても通じるような話である。

パントマイム砂漠に銀の雨が降る

信号の二ツ目からの都市砂漠

お隣りも向いも内も皆夫婦

建国祭の国旗はためく風さびし

沈鐘の女の髪は長かりき

座右の句

生れし時灯ありき死に行く時灯あらん (薫風)

私の句

えんぴつで書いても消せない章がある 林 はつ 絵

川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

觚、觚ならず……………西尾 栞……………(1)

芸の道……………若柳潮花……………(2)

川柳塔 (同人吟)……………西尾 栞……………(4)

自選集……………東野 大八……………(28)

■川柳太平記 (58)《川柳の群像》田中蛙骨……………(32)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究 (九丁～十丁)……………(34)

水煙抄……………黒川紫香選……………(36)

秀句鑑賞 [同人吟]……………野村太茂津……………(31)

句評リレー [水煙抄]……………河内 天笑……………(49)

句評リレー [両川洋々・林瑞枝・林野甦光・弘津柳慶]……………(50)

愛染帖……………橋高薫風選……………(56)

芸の道

若柳潮花

芸道のきびしさ言わず羨やまれ

立方と言うものは舞い扇を握って立ち上った時がすでに勝負である。其の席が一流の舞台であろうと酒の席であろうと真剣勝負の場所でなくてはならないと私はお弟子さん達に常に言い聞かせていた。立方としては男女共に一番の強味は、いい立役であり、いい女形であると言うこと以外にない。即ち男でも女でも立派に踊りこなせるだけの舞踊家であると言うことである。だがそうなると私の場合どうだろうか、立役と言うよりむしろ女舞を主として仕込まれて来た。その理由は立役には不向きな小柄であり撫肩であるということこの二点が私を女舞に近づけてしまった。と言って舞踊家として立つ以上、男舞は出来ませぬとは言えないので立役も踊りました。二枚目も三枚目も一通りの物は踊りました。水を得た魚のように踊れたのは女舞でした。家元で試験を受けた時は無論女舞で受けました。男性が女舞で受けると点数が良いのです。女性の方が男性を踊る以上に男性が女性を踊ることの方がどれだけむづかしいか、と言

宇治紀行

八木千代 (55)

第六回全日本川柳大会参加と十日の旅(六)

西尾 栞 (60)

アメリカを覗く(6)

山本規不風 (62)

「風 呂」

板尾岳人選 (64)

一路集「箸」

高橋幸代選 (64)

「影」

櫻谷寿馬選 (65)

柳界展望

本田恵二郎 (66)

初歩教室

小出智子 (68)

'83新年おめでとう会

本社二月句会

各地柳壇(佳句地10選/野呂右近選)

一分間の柳論

若宮武雄 (67)

編集後記

薫風・酔々・鬼遊・史好 (83)

座右の句

座右の句

(智子)

私の句

旅馴れて伊達巻き一本入れて行く

鍛原千里

座右の句

座右の句

(智子)

私の句

旅馴れて伊達巻き一本入れて行く

鍛原千里

座右の句

座右の句

(智子)

私の句

旅馴れて伊達巻き一本入れて行く

鍛原千里

座右の句

座右の句

(智子)

私の句

旅馴れて伊達巻き一本入れて行く

鍛原千里

うことは師匠に教えて頂く以外参考になる女性

性が自分の周囲に居ないと言うことです。和

服を着ても外輪で歩く女性の多い時代に、私

達が考えられる参考になる人とは舞台の上の

女形しかないのです。足の運びを習うのに紐

で両足が大きく開かないように縛られ、肩の

動きを直すのに狂言の棒しばりのように両手

をのばして棒に縛られ、一本、一本の指の動

きにもきびしい注意を受けた。なかでも一番

苦労したのは肩先に女の色気を出せと言われて

泣かされたことだった。こうした苦勞を重ね

て二十余年やと一本立の師匠になる舞台

をサンケイホールで踏む日が来た時、一三夫

君がこれからが大変でんなど、ポツンと私に

言われた。プロとしてこの舞台を境に観客の

眼は一つのミスも許してはくれないだろう。

路郎先生から会場へ句と花輪を戴いた。

踊り子へ雲でも降りて来そうなり 路郎

今は亡き鮎美さんが存命中、潮花君の踊り

は女の女や歌舞伎の女形のような男くさが

無いと霞乃先生に言われたとか、それは私も

或る女の方から、潮花さんが男やつたら、一

川柳塔

西尾 栗選

岸和田市 高橋 操子

みほとけと鬼が私と同居する
同居する鬼の勢力強い日よ
初夢をさか夢として気を静め
花時計すみれの様な人が待つ
裏庭は自然のリズム変えず春
例えばの話ジリジリせている

新宮市 川上 溪水

お世辞まで言う気など無いアルバイト
明日があるあしたがあると齡重ね
奉仕する気では済まない役がくる
口裏を合わす視線の落ちつかず
下駄箱にゲタの姿が見つからず
ご近所に言われ幸せなのかなア

兵庫県 遠山 可住

おみくじを結んだままで松が枯れ

冷蔵庫卵がつめてある自炊
戻れない落葉が散ってゆく救い
補聴器にそむかれ眼鏡に裏切られ
心地よいやさしさがある嘘の中
陽が昇り陽が落ち村のくらし橋

米子市 林 瑞枝

ひとり旅わが生い立ちを問い返し
赤坂の美酒があしたの歴史抱く
白い壁無情のカルテひとり読む
雪しんしん過ぎし暦と冬籠り
銀婚の海満ちて来る雪見酒
ひらめきの眉が杜運の明日を行く

八尾市 高杉 鬼遊

ふるさとの電話に雪がふっている
冷蔵庫からおもむろに出すいかの足
鐘の音に今夜の宿を考える

考えて大きい方を人にあげ
買う人がいる勲章の値を上げよ
おのずから不肖の弟子としての恩

島根県

堀江正朗

指先に触れた音にも音を抱き
腹立てて座り直して考える

やればまだやれる気分が邪魔をして
いらだつと足がよろける恥ずかしさ
こだわらぬはずで座ったのを忘れ
すこやかな眠りへ酒が脈を打つ

米子市

八木千代

裸木になつていのちをながらえる

生甲斐を貰う今夜の電話線

妥協して職人の胃がまた痛む

ひそやかになさを放つ月の弦

月の海で死ねたら蟹のひとりごと

太陽を信じてめぐる花暦

大阪市

西出楓楽

暮しのひだをたたみかえてる長電話

褒め言葉よりも眠りを下さいな

ねむられぬわけは自分で播いた種

糸切れた風にも自由などはない

十人が十色の正論持っている

過去形で話せばすべてあたたかし

京都市

山本規不風

成る程と聞いている方が知恵が上

他人様だからやさしさに震うのか
立読みへ古本買えば又たのし

三年目の浮気夫婦苦笑して唄う

新聞のそれから改名ばかり来る

自分のこと自分でするだけで喜ばれ

和歌山市

西山幸

一つとや独り生きゆく数え唄

心機一転今来た道をひきかえす

ライバルに見せてはならぬ楽屋裏

貧しさを隠す笑顔がだるくなる

おんな故おんなで居たい句読点

お雛様すこし冒険しませんか

松江市

小林孤呂二

ひとなみに春花秋燈親しめり

ベストを尽した裏づけとなる直線

退庁の足はグルーブつくるなり

つぎの坂かすんで見えるいくさ道

核・拡・革・角のどれも嫌な文字

左向け左で捗らぬ数ばかり

竹原市

小島蘭幸

妻の実家にお嫁さん来て妻静か

ひねり餅でのひら厚き男たち

米櫃よ少し昇給するそうな

子を膝に妻の実家で酒を飲む

猿に似てくる落花生食べる父

おとうさんおとうさん怒れなくなる子の瞳

桜井市 岩 本 雀踊子

それぞれの家伝競うて日野菜漬
美しく老いたし食を整える

豊中市 安 藤 寿美子

転がったビンの意地が上をむき
故郷の正月ふた親いてくれる
偉そうに言っても貴方に角がない
無精卵ばかりで妻のたまご焼
落武者になる一本の矢を残す
ネギきざむ男の妻が病んでいる

松原市 玉 置 重 人

初詣で夢がふくらむ掌を合わす
お隣りの普請にリズム狂いだす
淋しいことに父さんまるくなってきた
上棟式婿も大工も男前
花時計ゆっくり回る傷を持つ
十人十色みんな持っている定義

唐津市 仁 部 四 郎

嘘二つ用意して行く検診日
くじびきにすれば残らぬ招待券
説明がついた温情うとまれる
駅裏の無番地だった昭和町
教育を責めて大臣交替す
月光の青さを知った謀叛の夜

岸和田市 福 島 せつ子

ふるさとの味で勝負の出店持つ
過去を捨て前向きに生きる灯をとます
教職の過去べんだこがなつかしい
水仙は天使のように咲き誇る

神主が福を授かる初戎
人すべてわが師と思う日の合掌
意地悪の効果計算まちがえる
福飴のこのおたやんは泣いている
口数の減っていたのは三日だけ
買初のは今年八味地黄丸

和歌山市 浦 野 和 子

亥の年にあやかる真実一路かな
直進の亥に逆うている喜劇
やんわりと眉整える初鏡
マリオネットの糸をしつかと持つ妻で
敷いて来たレールへこれからどうつなぐ
この笑顔消せばわたしに負けそうで

堺市 大 道 美乙女

待ち合せはや夕月の花時計
振り向けばついて来ている影法師
潮騒をひとり聞く背が泣いている
孫の言葉に触れてほろりと風邪の床
出稼ぎの帰りの父を指折る子
肩書が落ちると人間らしくなる

米子市 小 西 雄 々

寝言には耳かたむけず管理職
羨望の瞳で見送られフルムーン

花束の贈呈はないフルムーン

本会議よりも強気な車中談

古傷の疼く演歌に雲急ぐ

キャンバスをはみ出るような若づくり

松原市 北野久子

娘の結婚（五句）

嫁入りの話が父を無口にし

待っていた縁だが心に風が吹く

娘の前で淋しい顔は見せるまい

寄り添うた写真しやあしやあ見せにくる

諦めて小さい物から買い始め

案じていたらひよっこり賀状くる

富田林市 岩田美代

帰るとこあるのか小犬ふり向かず

桐炭の餅かたくなを暖める

生活がかかっているらし毛皮はミンク

ふたりしかない話の食いちがい

もうふた昔にもなる男の台詞

正論が大好きネクタイ冴えてない

大阪市 小出智子

肉親をいつも忘れぬ風呂の蓋

和服着るさえも勇気のいることと

いいことがあるではないが化粧する

晩年の夫婦が出している答え

春が来るのを待っているのは老母の下駄

諍いは少し眠ってやりすごす

大阪市 川口弘生

縄文人の働いて居た足の跡

暴走族の卵も居てる幼稚園

島へ来て神も仏も同居する

まん中に育って負けん気が抜けず

仲間意識一人のユダが突き出せぬ

島の娘を娶って島の人となる

松原市 玉置重人

両手では抱えぬ恩を抱いて生き

世渡りが下手で直球ばかり投げ

紳士録修羅場くぐった一家言

ライターをせかせかつける負けいくさ

人間ドック出るとポケットベルが鳴り

三ヶ日こたつの操作覚えたり

八尾市 宮西弥生

ウーロン茶とバナナで歓迎する情

たべ歩きのみ歩き旅の悔いはなし

ゲジゲジの眉すこし濃くする宿酔

中年の真中に立つ恋ごころ

よくしゃべる女にもあるのだ仏

御機嫌の男にすこし甘えよう

今治市 越智一水

福寿草夫婦相和すように咲き

春はたちまぶしいほどのよき日かな

出世より子の親切がありがたい

貧しさをよそにどの子も親思い

雪国の女は肌で勝負する

足袋ぬいで炬燵の恋は美しい

竹原市 森井菁居

根性をとことん試す縄梯子

倅が続くと腿せる数え唄

火あぶりの刑が無いから愚を重ね

叱る気の親を逆手に子が育ち

出生届ただただ平和な世を願う

同情の陽差しが恐い雪だるま

大阪市 清水健司

今年こそ今年こそはと以下余白

メモ用紙へのへのもへじの日が続く

待ち合わせすこし間があるパチンコ屋

運のない男と出会う冬の雲

隣りまで来て帰って行く福の神

職人が鉋を研いだ雨の午後

吹田市 藤村メ女

ひやかした価で買わされたシクラメン

久々の慶事九谷の鉢が出る

遮断機が降りて別れを口ごもり

火の色を臉の裏に抱くわかれ

便り書くペンの先から届く春

主義主張言えない母の白い旗

和歌山市 若宮武雄

本流の度量ながれを騒がせず

帰り道みなそれぞれの会者定離

裸木の意地を見惚れている男

嫁からのカイロは妙に温かい

いとしきはダイヤを知らぬ妻の指

おはようへ応えるからは鬼でない

大阪市 村上田鶴子

兄さんは力持ちだと決めていた

自惚れが少し紅茶の底にある

頼りない文が届いて決心す

風を味方にしてから風が上り出し

心あたりが無いのに鼻が乾き出す

搦手から卑怯な風が吹いてくる

松原市 谷垣史好

表札がゆがむ変事が起らねば

吾とわが臍の形を見て飽かず

世の中の動きは分る豚の鼻

広すぎる本屋に腹が立たないか

良い子悪い子分ける大人のエゴイズム

この白き項を神も責められぬ

宝塚市 傍島静馬

座を外すチャンス女将に抜かりなし

腕利きの職人おべんちゃらが大きらい

怒声張り上げて自分を見失い

寒いばをこらえて舞妓かしこまり

不味いとも言えずあつさりしています

伊丹市 桎谷寿馬

二、三秒神に近づく初詣

今年も闘おうライバルの年賀状
四十年ですねと妻が屠蘇を酌ぐ
みんな揃ってメルヘンとなるわが家
元日や今年は亡父の五十年

倉敷市

野田素身郎

元日も開けたい夫婦だけの店

考えるとこあり年始の順路変え

獄中の友から届く年賀状

ボタン一つでロボット正月でも働く

髭をはやしているが頼りない息子

奈良県

香川酔々

人くさい神が踊っている神話

ふぐに当って命冥加な奴と知り

北風のリズム奏でる城の跡

観音の夢のお告げを待っている

赤鬼と青鬼争っている理由

藤井寺市

児島与呂志

戦友がまだ生きていて春に逢う

春らしい噂は誰にもある噂

良い事はみんなで喜ぶ部屋がある

老いの床本一冊と老眼鏡

凡人の噂はやっぱりゼニの事

八尾市

高橋夕花

自画像の口紅だけは濃ゆくする

リハビリの後のコーヒーとはかなし

人恋し唯人恋しと賀状繰る

淡雪のあとの新芽に期待あり

古の女人を憶うたとう紙

八尾市

大路美幸

ちちははは居ない山河甦る

焼いている餅の匂いに亡母が居る

ポツカリと穴があいてる屠蘇の席

ひとり去り又一人去る指定席

ちちははのぬくみが残る仏の間

八尾市

飯田悦郎

回り道して近くなる我が家

水害を泥絵と思う雨つづき

エリートがコーヒーを飲む冷たい眼

立て綺は好きでないけど背が低い

主張して一番悪いくじを引く

東大阪市

竹中綾珠

子と孫と雑煮祝える幸を謝す

痛快に悪人を切る時代劇

年寄りに席立つ人に手を合わす

姑が逝きあれこれと想うこと

嫁いだ娘他人行儀が出て平和

大阪市

黒田真砂

愛いくつ溜めて女の泣き黒子

予感的中その時冷えた日の女

胃の薬膳にそろえて三ヶ日
絵馬かけて今年へかける夢多し
裸木の意地寒風に身構える

京都市 松川杜的

活けたなら絵になりそうな冬木立
読み返す時間が欲しい日記帳
いつ頃か二食になった余生です
それからは収入の無い出納簿
新春を撮せと社の絵馬の大

堺市 藤井一二三

新春雑感

よい年になりそう初春の酒に酔う
新春祝う旗右翼ではありませぬ
亡母を恋う涙が祝う屠蘇に浮く
母の無い淋しさを抱く仔犬抱く
北風よ吹くな浄土へ亡母の旅

奈良市 村上春巳

星一つ消え赤じゅうたんに明と暗
オッペケベ聞えて来そう世の乱れ
事ここに至ればお抹茶ぐいと飲み
暖冬の蠅までひとを馬鹿にする
暖冬の鹿のんびりと初詣

倉敷市 藤井春日

仕事よりかくし芸で認められ
家計簿は今も昔も赤字です

島育ち母なる海の恋しくて
日本の姿に戻る三ヶ日
まじないの好きな愚妻は京女

大阪市 那須鎮彦

古都有情だらりの帯と晚鐘と
親心いつも浅瀬を渡らせる
初鏡妻の眼尻の品がよい
百姓の子は米つぶを拾い上げ
悪友へ少し疲れた丈夫な胃

羽曳野市 塩満敏

鑑賞に耐える足だけミニをはき
名人の一ト筆人形目を覚ます
成人式親のない子もいるだろう
不景気を破魔矢で散らす神の国
ああ無情昭和一桁死に給う

神戸市 中村ゆきを

知恵おくれママの掟が多過ぎる
つくり話を許す気に変り
あつさりと敗北みとめた乾盃さ
出棺を待つ間の低い話声
距離置いて小さな嘘を考える

京都市 都倉求芽

拝む手で奪い合ってる鈴の綱
二三枚日めくり残る大晦日
肝心のところはばかして酒にする

耳遠の母へ冗談言い直し
紅白の紐が朝日へ照る荷出し

堺市 高橋 千万子

振袖の姉妹家中春の色

興奮をしたなと思う目を閉じる

サヨナラとはつきり言えぬまま訣れ

寒い部屋カベにたくましヌード張る

この辺が本心らしい酒の酔い

大阪市 西森 花村

貯金帳心経に似る空と無と

ボスは又二番煎じの弔辞読み

目障りな長いすね出しすねかじり

チャブ台の広さ老人だけとなり

日本の将来苦にせず健康法

奈良市 宮口 笛生

正月の平和みかんのゴミ作る

正月も苺ハウスの換気する

野良からの手にコーヒーのうまいこと

片意地な男で合った役を持ち

喋らない男が抱いている火薬

大阪市 天正 千梢

デジタル社会雑学のブーム生み

見つむれば六十年の錯誤かも

青臭い悩み枯山水が聞いてくれ

花持つて結局行く所のない私

心の準備「サヨナラ」言うだけに

奈良市 森田 カズエ

幸せは孫の名を書く内祝い

寝すごした朝の信号赤つづく

立ち枯れの松そここに分譲地

いたずらに知恵の芽生えをフトみつけ

受付を鹿の親子がきて覗き

和泉市 西岡 洛醉

五十路坂堅実牛歩橋とする

いさかいのその日の友に冬を見る

蛙の子蛙に成らない日の反抗

定年のそこから折れた違う道

さざん花の赤いみじくも似る女

藤井寺市 吉岡 美房

十二月やのにとばやく留置場

風師走止れば倒れそうな日々

賀状来ぬ正月去年の亡妻を恋う

もがり笛わが慟哭の声ならん

悲しみが風化しているわらべ唄

大阪市 河井 庸佑

気をもたす仕草にうっかりひっかかり

逆に出てそつと内心打診する

心にも無いことうっかり喋って来

野辺の花己の姿見てるよう

かくすればかくなるものと読み切れず

東大阪市

齊藤三十四

意地張り同士家裁は引分ける
なさぬ仲気まま非行に走らせる
置物の亥は床の間にでんと来る
熟年の唄は影をしたいあい
定年の夫が手伝う手内職

大阪市

江城修史

名門という名の家系の渦に
かかる世に生きねばならぬ拍手する
マイホームローンある限り借家です
独立の子の部屋の広さのむなしかり
金策へ皆さんきれいな言葉もち

和歌山市

松原寿子

逢いたい日わたしは春の毬となる
耳もとに胸にゆらゆら誕生日
いのちの限り明日を忘れて紅椿
花便箋春の鼓動を抱いている
ぬくい風会話をまろくまろくする

和歌山市

福本英子

方舟で行きつく島がきつとある
三ヶ日過ぎて体重計狂う
繫糸とれずに風邪の三ヶ日
三代目までは届かぬレール敷く
これからをひとりで渡る橋の数

和歌山市

堀端三男

エリートコース歩いて情に疎くなる
幼稚園同窓だったと詐欺に会う
ほどほどの距離を保って持つ情け
同級会寄れば酒量の落ちたこと
向い風に立てば流れ矢など来ない

和歌山市

内芝登志代

なさけにも限度証印だけはせぬ
年頃へ親の欲目が輪をかける
無造作の仕草へ本音こぼれてる
他人様の笑顔ですくすく育てられ
真心を誰に上げよか寒椿

和歌山市

坂口公子

孤島でも風あがります新春の風
ライバルに新春の笑顔を惜しみなく
いのししを笑顔にさせた新春の酒
角矯めて余命へ賭ける色を撰る
矢面に立つと揺れない夫婦独楽

海南市

牛尾緑良

政治家の死を権力がもてあそぶ
愛情が無いから寒い言葉尻
兄の手をしっかりとにぎる夜店の子
傷口へ男同士の酒をつぐ
妻の手の固さ絆をしめなおす

出雲市

原独仙

東の間に年代移り早や十日

キヤッチボール餅腹は減りサロンパス

盛装に芽出度さ包み初出勤

長女次女三女の中に年おんな

おじいちゃん入歯落して初笑い

島根県

小砂白汀

みね打ちの父の泪か風花は

素通りを広角レンズに捕えられ

接ぎ穂されてからの大輪重たすぎ

笹鳴きがあつて本音が美しい

敵持たぬ男頼りにもならぬ

松江市

恒松町紅

女なり独居の音もリズムカル

熟年へ来て手をつなぐ夫婦箸

猪突ではすまぬ男の社交術

禁酒したとこへ歳暮の日本酒くる

手相など信じぬ男の太い眉

松江市

舟木与根一

立候補します賀状の顔写真

まず鳩のねぐらが起きる初明り

明治には解らぬ箸の上げおろし

湯上りを体重計がまた嗤う

我が家にもロボット太り過ぎる妻

島根県

堀江芳子

のろくても前進だけのかたつむり

苦労などないと嘘でもいい通す

向い合う心に和してくる鏡

気負いたった後から齡が恥ずかしい

言わぬだけ苦勞の沁みている背骨

松江市

柳楽鶴丸

あなたのために逆立ちすると言うう

九官鳥一番先に妻の名を覚え

女の細腕妻にはタブー

前略かしこ追伸が恐しい

本能が鍵穴をのぞく

松江市

梅本登美也

儲かったこともあつたね汽車ポッポ

逢えないでさびしく帰る雪あかり

裁かれる人になつた錦鯉

つながれた範囲で動く犬の貌

夜のしじま父の溜息ふつと聞く

大田市

藤田軒太楼

熟年の配慮口数減つて来る

気の合つた性格なのに右左

生真面目が取柄で妻は物足らず

言外に匂わせ他意のない証

横車押してもみたい気の焦り

島根県

榊原秀子

相性が悪いか言葉もゆき違い

英辞典引く久々の気のはずみ

心機一転書初めにする写経

山の町降り佇つ駅から雪となり
老い二人暮らしいこと悪いこと

島根県

梶 みどり

ほめ言葉一言そえてお年玉

初詣であらたな踏絵胸にだく

晴着かけ初春待つ女まろやかに

素直なる心あずける初鏡

娘の便り待ちわびながら鶴を折る

島根県

錦 織 文 子

その次の言葉が欲しい差し向い

人間性の豊かな止り木に酔うた春

冷たさをこよなく愛す冬の天

つましい奢りよ湯舟をあふれさせ

生き残ることの余生は悲しかり(友逝く)

島根県

大 森 孝 華

倅せは女にもどる薄化粧

逆境へ感謝忘れた日のみじめ

耳底へ触れる一言距離を置く

円満へときにとばけた振りも見せ

ふる里へ遠く育ての乳がはる

倉敷市

稲 田 豊 作

聞き上手話に花道開けて聞く

親切にされて鬼から角が落ち

反省に沈んで深い自己嫌悪

親に似た顔の化粧に手間をかけ

一病と仲良く炬燵で冬を越す

岡山県

嘉 数 兆 代 賀

ソロバンが苦手で金が溜まらない

裏町に住んで人情脆くなる

母の墓温い叱咤が聞こえてくる

だまっておれば距離がだんだん近くなる

ゆっくりと夕陽が落ちていく怖さ

美祿市

安 平 次 弘 道

主義持たぬ男踏絵に躊躇せず

殺し文句へ女単細胞になる

風向きがいつも気になる出世欲

四面楚歌ついて来るのは影と妻

本質を忘れ末節大事がり

香川県

岡 田 拳 法

掴んだら離さんアフガンポーランド

憲法を守って白旗揚げますか

行革へ敵前逃亡前総理

貿易で一億二千万も生き

マスコミの逆が真実かも知れず

松山市

谷 真 風

千羽鶴翔ばそうみんなのいたみ載せ

病院の茶には茶柱など立たぬ

ありがたや日にち葉のしるし見え

生きている亡妻の財布の鈴の音

お互いに傷にはふれぬあたたか味

仙台市 川村映輝

世間の眼うるさく他人の家のぞく

一言が親友の絆さえ切れる

一円貨財布の底で年を越し

停年の第一日はおちつかず

入歯してササニシキもまづく食べ

平田市 久家代仕男

各論になるとメニユーが宙に浮く

十代の春は血に飢え愛に飢え

松喰の矢文に怖る築地松

気短かなお前に長芋は掘れぬ

赤貝の珍味も泥を吐いてから

兵庫県 河原みのる

そもそものバクチ始めの年賀状

カサコソと落ち葉化けそに跟けてくる

野良猫を追う権利がお前にあるか

使うとき電気は只と思うとり

家中を敵にまわしてしまふ癖

兵庫県 辻文平

言い訳は止そうよ母さん泣かすだけ

合格へ母の茶断ちの凍む涙

鳶の輪へ母のない子の子守唄

母を恋う嫁が覚えたかくし味

母が居る安堵へ縁がまとまらぬ

諫早市 原田明春

恐いなと思う女房のうす笑い

ある日ふと過去の女を思い出し

妻だけが信じてくれた足に灸

体重を支えてくれた足に灸

初詣恋を拾って帰つて来

宇部市 平田実男

他人なら八十惜しい齡でなし

姉妹等がほどける糸をもつれさせ

初詣人が行くから僕も行こ

危険物思わす尼僧の美しさ

蓄ではないのも混じるセーラー服

倉敷市 小幡里風

正座して父の抱負を聞くも春

縫い上げた晴着へ光る糸切歯

釘一本打つにも妻を呼んでいる

伴せは番茶で囲む老母が居る

ボタン鍋つつく急に走りたくなる

岡山市 川端柳子

カレンダーの数だけ部屋がほしくなる

縁側を訪う親しさのお裾分け

受験地獄神社仏閣多いこと

子と同じ年頃落度あばくまい

同窓会目立ちがりやの鈴が鳴る

米子市 石垣花子

カラオケの騒ぎも入る電話口

雪雲を僧兵太鼓に刺激させ
年頃も零歳も居る孫の幅

切り捨てるつもり行事繰り返し
日めくりもまとめてめくる物忘れ

米子市 雑賀美世

教会の鐘へ迷いの足が向く

横這いのあせりは見せぬ磯の蟹

続く赴へ区切りつきたい初詣

社長との距離を縮めたかくし芸

職人の瞳で材料を選り分ける

米子市 桑原伊都

仕事場の夫職人の顔となり

終曲へちから一ぱいタクト振る

旅先きでもらった情け土産にし

受験子をかかえ只今冬の陣

老後のプランぐらつきそう那不況風

米子市 青戸田鶴

牙抜けた猪ふえて山は春

からくりを皆ぶちまけて幕下ろす

風向きで変わるプランをもて余す

足跡をたどるに遠い亡父の島

雑草にかえりたい夢花すねて

米子市 田中亚弥

肩車子だけが拝む初詣

責任を負うて猪走り出し

職人の父労働歌知らず古い
腕白の只今家もゆすぶられ
何事も素直に聞いて和を保ち

米子市 菅井とも子

走馬燈くるくる終りの無い定め

橋がついても島は島から抜けられぬ

真実を知らせようかとまだ迷い

まだ父に及ばぬ音で餅を搗く

酒気のまま山門くぐる初詣で

米子市 政岡日枝子

学の無い自分を責めてる重い靴

腹芸を嫌い無官に甘んじる

不言実行父の姿を範とする

猪突する私を影が戒める

ふりむいて足跡がないみじめさよ

岸和田市 植山武助

マネキンへ私の顔を置いて見る

物好きにされて雨の日の散歩

解釈は人に任せた美辞麗句

日曜を妻のお抱え運転手

奥さんを口説きにかかる売り上手

岸和田市 福浦勝晴

人気とは負けても背中さわられる

いのししに生まれてのんびりあかたれ

釣りに出て名もない島で缶ビール

一杯の朝のコーヒーに湧く闘志
持てるだけ持って担いでUターン

岸和田市

島崎 富志子

ペットにも小さいお鏡そえて春
義歯出来るまでのわびしい顔を見る
歯が抜けた鏡の中の百面相
娘の趣味が夫と同じで少し妬く
冗談の好きな女で誤解うむ

岸和田市

古野 ひで

何となく正座していた除夜の鐘
子の背中 of 広さしみじみ十二月
老いてなお恩師はこの子と呼んで呉れ
春を編む毛糸ころころ手もはずむ
がらくたに老母の想いがつめてある

岸和田市

原 さよ子

暖冬へ蠅よたとと飛んでみせ
贅沢な願い神様次から次へ忘れ
母も好き私も好きで藍を着る
酒の量減った減ったと淋しがり
教え子のたった一行胸に抱く

貝塚市

行 天 千 代

初詣で平次の様に銭がとび
日めくりへ心も新たな身がまえる
小春日よ今日は亡夫に会いに行こ
子に託す夢を抱いてパートママ

寄せ鍋の窓へ粉雪さらさらと

鳥取市

小林 由多香

島に橋かかる日職を奪われる
御題島還らぬ島のことならむ
玉碎の島觀光の顔で降り
負け犬がゴロゴロ求人票に群れ
直線が素直に引けぬ日のあせり

鳥取県

川崎 秋 女

運を天に任そう白い答案紙
かなしい夜だからまああるい語をさがす
嘘一つ上手の掌から洩れていた
軍歌口ずさむと地獄が回り出す
引出して上げたい夫の失語症

鳥取県

鈴木 村 諷子

よその灯はみんな幸福そうに見え
販売機やがて鶴匠が吐かせに來
五十年見えていて飽きぬ女房なり
眼科医でむごい言いくさ本読むな
煩冠りの中にほんとの村諷子

倉吉市

奥谷 弘 朗

要領と利巧を買って任せとき
任せたら相槌ばかり男うち
人生の波にもまれて出た丸さ
お年玉やればさつさと帰る孫
引き返す決断山男が光り

鳥取県

清水一保

世の中の狂いは知らず知る暖冬
化粧した仮面へ素顔で立ち向い

作戦の又裏をかく冬將軍

ロボットに唯腕力の無い強み

太陽を呑んで驕らぬ地平線

鳥取県

林露杖

椿煮る湯気が漂う和紙の里

寒澁きの紙に伝統美が冴える

紙を漉く音の調子にある遅速

義理一つ欠いてひとりの山仕事

義理という祝儀袋にある重み

倉吉市

渡辺菩句

寒菊に見る初老という姿

聖人君子が一人いる忘年会

新幹線で土産に噂持つて来る

若水の中で笑っている私

正月になったとたんに眠くなり

倉吉市

渡辺独歩

雪女加賀も越後もおおんな

走らねば暮しに来そう流れ弾

ストレスが溜り貯え目減りする

残り火を女は川へ捨てたがる

倒産の許へはなまはげもう来ない

鳥取県

金川満春

お年玉孫小躍りのVサイン

百薬の長と程よい三ヶ日

猪突猛進余白の老いを急ぎ立てる

小雪舞う大寒お前と二人酒

あのブラン一時凍結老妻ときめ

鳥取市

森田熊生

この辺で折れろと意見もとめられ

雑念がまだすて切れぬ鼓動打つ

一ページめくって自信たしかめる

上げかけた腰を下ろしてから長い

腹立てている靴音が軽すぎる

町田市

竹内紫鏑

早朝のラジオ同級生の声やよし

文武両道トレパンでとるかるた

インスタントで学徒と囲む夜の秋

友の棺老眼鏡も入れ辞書も入れ

落葉散る通学路江戸の坂と知る

島根県

西村早苗

鶴はみな上向いている床に坐す

頼みごと既に冷たい目に出会う

もう一度占うまさかを確かめに

着飾った衣装言いよる人がなし

盲人の目が善人の顔と見る

大阪市

神夏磯道子

歳月は鬼の顔さえ老けてくる

百年後いくら指折りくったとて
磨かれた鍋ははけ口とも知らず

老人ホーム余生の地図へ入れておく
スピードも中くらいにして猪を追う

西宮市

林 はつ絵

隠居部屋馴染むと日々が忙しい
風紋のむなしさ砂丘あるかぎり

干し蛸が道化て旅をはしやがせる
半日の時差の国から初電話

ETで孫とつながる帰り道

大阪市

本 間 満津子

化粧した顔しか知らぬシャンデリア
言いわけをすると惨めになってくる

食べきれぬほど買う癖がまだぬけず
雪化粧つましく咲く寒牡丹

いぶし銀の月は寒夜に磨かれる

桜井市

河 合 茂 雄

どの道を行けば曲らずたどり着く
ロボットに血を通わせばストもする

殿りで先越すことを考える
先頭に立つから敵が多すぎる

裏側の目は泣いている魚拓

寝屋川市

江 口 度

冬眠の蛙のまくら南むき

温室にかける暦に冬がない

はるばると留守を訪ねた寒い風
忠魂碑ふたたびいくさあるなかれ
北風へ夫婦の歩幅合うてくる

寝屋川市

柴 田 英壬子

ますかけの片手へ夢をふくらませ
おみくじの吉展望の楯とする

見えすいている大げさを吞む示談
昼寝など出来ぬハートのチョコレート
福笹に愛の飾りはついてない

羽曳野市

榎 本 吐 来

懐旧の握手に少うし嘘がある
カラオケで夫婦が揉めている平和

白紙には戻せぬ夜を一人酒
停年が直ぐ其処という夫婦著

子に説教された話を持ち歩き

東大阪市

崎 山 美 子

手製のマフラーにたくす恋心
やさしさを愛だと思った不幸也

しぶちんがまだ迷っているポチ袋
しぶちんがしかとささえているのれん
ぎりぎりの家計へ交際費のパンチ

大阪市

藤 田 頂留子

貧乏に嫌気か鼠居なくなり
喝采の半分はマジックショーの効果音

家康のテレビ大阪城は四百年

議員もう二十の顔に胸算用
人の手に渡れば見栄えのする品で

玉野市 小谷 仙山

あの世まで道連れにする欲の皮
真心の通じないのも過去のきず
松の内せめて小言を溜めて居る
雪降って老いと若さの差を見つけ
風少し有って夫婦の風あがる

守口市 野呂 右近

カレンダーの格言僕を叱りそつ
鍵増えて信ずる物が減って行く
保証ない命を抱いて明日の夢
なまじつか書けてみじめさつきまとい
本当の強さは独りになって出る

大阪市 大野 武太

太陽がのぼる生命がもえている
商いがもう始まつて名刺うけ
松の内だけでもにっこりしておこう
口惜しいが仕事の話題しかもてず
仕事せぬ指の白さの三ヶ日

枚方市 稲葉 星斗

年新た先祖敬う年齢になり
おめでたい餅を氣遣う総入歯
初詣でみくじ小吉恙なし
迎春の賀状ダブってお目出度い

熱燗でいい湯に入り牡丹鍋

大阪市 橋元 美恵

いい事が近付く気配梅匂う

柳の木あのサンパツ屋三代目

湯に浸るこんな倅せ忘れてる

姑と居る少し斜めの所を選び

サイレンが走る本当の恋せねば

羽曳野市 佐野 白水

悪夢から覚めた枕を裏返す

或る日ふと女医を女として眺め

ロボットもボーナスほしい年の暮

バイヤーへロボットの手は冷めた過ぎ

今日生きた感謝でフトン敷く夫婦

和泉市 岡井 やすお

風見鶏目白を指して止まつてる

札付きを並べてやつと組閣出来

内閣が変わり約束反古になる

酒の害裁判官にまで及ぶ

屠蘇に酔い合格の夢受験生

西宮市 妹尾 春江

温い手をそえて婿からお年玉

雪しんしん怖いことがある予感

半額を待つて手を出す市場籠

自作自演のドラマに閉じこもる

恵まれし過去繰り言に老いていく

高槻市 田 崎 素 秋
(あき子改め)

アリバイの証拠なかつた日記帳

敗戦を生かし長寿の国作る

退院の妻と聞いて除夜の鐘

貸衣裳五三の桐にして無難

稽古台にされてる方がよく覚え

川西市 氏 林 洋 敏

正月だローンのことは忘れよう

お正月骨董品を見て回り

老嬢が三人妻のお友達

嫁姑の戦さに正月などはない

初詣で日本人にある律儀

大阪市 中 西 兼 治 郎

気の抜けた様な道頓堀の朝

屋台店客の話もきいてやり

あぐらから正座に客の帰るらし

満月と一緒にいる露天風呂

離婚して再出発をすると言ふ

富田林市 中 村 優

傷ついた小鳩を庇う日記帳

故人との再会雨の降るシネマ

オイコラで離別を知らぬ温い友

羨ましドラマの中の正義漢

銀婚で一息入れる夫婦坂

東大阪市 奥 山 弥 山 人

先代の名声かけて初舞台

腰すえて飲む気仲居は帯緩め

つり革に優越感の石光る

地獄巡りバス待ち顔のゆで卵

かくれんぼの環に園長もまきこまれ

大阪市 鈴 木 節 子

へそくりがそろそろ胸で冷えてくる

家計簿は見せてくれない嫁でよし

甘い日も辛い日もある片手鍋

気配りがよくて無口を強いられる

黒豆を炊いてる老母の笑い声

吹田市 西 川 景 子

追慕しきり紙人形の白い顔

容姿より氏より育ちにひかれ春

ともすれば誤解されそな母性愛

島の悲話天草五橋渡り聞く

替女の唄流れみちのく雪模様

寝屋川市 稲 葉 冬 葉

ほんとうのしぶちゃんは妻だと思ふ

長男の恋実らずに年明けける

はぐれ雲どこで私を抱くだろう

置炬燵空耳たてて乱歩読む

意地捨ててぐっすり眠る日がほしい

大東市 土 岐 トク子

亡母の齢になつて亡母に近づきぬ

父母の安否氣遣う松の内

朝日歌壇なつかし台湾斗六駅

勝星の大きく腹で息をする

ふるさとの便りしたためふきのとう

神戸市

仲 どんたく

糸ゆるむ仄に自画像描いている

独り者万年床と年を越し

クラス会報君も逝き彼も逝き

新春を逆さに眺め出初め式

へべれけになるまで飲む交際費

枚方市

栗 林 光 夫

不確定の時代死だけが確かです

作品を残し演技は消えてゆく

中曽根さんいつか来た道行かないで

戎さんの朝寝一月十二日

肩の子が目印となる戎さん

大阪市

鍛 原 千 里

輪を信じ中で阿呆になる私

雑布をしぼる手から春が来る

一拍を置いた夫婦にある歩み

絵馬吊す心の弱さ気の弱さ

福寿草小さな倅せくれそうな

大阪市

杉 本 智 慧 子

数え唄一輪一輪梅開く

猪の鼻は武器だと言う話

元旦は土鳩も綺麗陽の光

寒中に脹らむ蕾愛おしむ

耳澄まし春来る足音じつと聴く

唐津市

浜 本 義 美

出稼ぎのふるさと遠く鐘を聞く

不況風晴らす恵比須の人の波

六十路未だ夢を抱いて髪を染め

ギャンブルに大穴当ててから裸

目覚しが要らなくなった老い二人

唐津市

久 保 正 敏

戦前も戦後も国連役立たず

叱咤する女は妻と限らない

有能な部下に油断はしておれぬ

袖の下くぐった書類に判がふえ

喰い意地をロボットと比べては困る

岡山市

岩 道 博 友

飾られて門を出てから振り向かず

叱られた後で親切賞められる

欲の無い男が平均的に酔い

忠告をたらい回しにして終り

誘致したスーパ―にまで黒い魔手

姫路市

大 原 葉 香

杖つけば蔑みの目が背にささり

趣味の会まで政治家が顔を出し

嫁はんという言葉には角がない

止袖の似合う女のうす化粧
窓明けて病魔を払う風を入れ

高知県

松岡三吉

本年も頼むと妻へ酌いでやり
ご多幸をお祈りします年賀状
仕事始め呑んだ飲んだの話する
目出度いけど涙が出るよお父さん
子は平気親はかなしくなるホーム

高知県

赤川菊野

ロボットも今に赤旗振るだろう
松飾りとると積木がくずれ出し
東大を出して親子に距離が出来
追憶の糸をたどっている孤独
暴言をはいて男を捨てて去に

浜田市

中川幸一

勇気など要らぬ栄螺の堅い殻
地下足袋を脱げば男の白い足
落伍したばかりにある命
タイミングはずす駄洒落が宙に浮く
聖域の中にやっぱり星桜

出雲市

園山多賀子

一行詩女多彩なペンを撰る
罪のない女で無口な貝になる
して得たり男の余芸野心あり
頂点に佇つ時孤独の風に哭く

川濁り泳ぎ疲れた雑魚でいる

島根県

松本文子

泥沼でもいつかは蓮の花咲かす
裸木の影も凍って痴呆症
夢食うた女グラスの常備薬
裸木も人の情にすすり泣く
偽善者の尚美しい花を選ぶ

出雲市

吉岡きみえ

いい人を年が明けたら連れてくる
自問自答すこし財布のゆるみすぎ
ふたりで編むふたり分だけのいのちづな
それっきり話もなくて寝る夫婦
ダンゴ鼻鏡の中でいい笑顔

出雲市

板垣夢酔

売薬に騙され医者の方たたく
刺のある言葉を逃がす窓を開け
俺に似るしつば巻く犬とおしい
口に皺もう灯芯に灯はつかず
泥水を避けたはいいが鼻緒切る

出雲市

石倉英佐子

陽炎になる哀しみを抱く女
雪はらむ風とは知らず逢いにゆく
冬火花忘れられない人のこと
黙ってたら鐘は鳴らない冬の空
喝采の顔触れを見る舞台裏

黙秘権お鍋を磨き鍋磨き

島根県

木村はじめ

黙秘権妻がだんだん恐くなり

一生の不作は妻の方も言う

積み了えし嫁ぐ荷の蔭チチロなく

意見する父にもそんな過去があり

橋本市

森脇善太

本気になれば羅漢さんに似てもくる

添い遂げる偉大なことと改まる

ボールペンついに本音へ転げだし

動くなとそつと金魚がいうてくれ

清算がついて他人の顔になる

和歌山市

杉田周穂

お茶を出せともう許す気になっている

節くれの指で採用すぐ決める

幸せは遠く指輪の数増える

出世してさされてもよい後指

若き日のお茶をにこしたツケが来る

橿原市

岩井本蔭棒

退職金半分お出し切れたげる

どん底を育てた子らに囲まれる

失業の部屋に感状かかつてる

先頭を行くのが僕の霊柩車

勇退を決めた男の言や善し

羽咋市

三宅ろ亭

汁吸った蜜柑の皮は抱き合わせ

惜しい人逝いて賀状のないうつろ

侮った男が見せた放れ業

戸を立てず噂一月我慢する

竹折れる音へ寝返り雪の夜

唐津市

木塚素石

色気より食い気ではずす太鼓帯

今年こそ仕事本位を相言葉

元旦もテレビが足を止めており

妻の尻おせちまかせて重なり

唐津市

浜本久仁於

箸の数揃うた席へ改まり

前に向く男の影は振りむかぬ

傷心の影は落葉を踏んで去り

またひとつ手狭な顔に皺が増え

唐津市

田口虹汀

善い話丈けが聞こえる電話購う

クリスマス僧侶も交るイブの街

賽銭が示す市民の世帯裏

各町のコンテナどれも胃拡張

松江市

吉岡通児

飲めるなら正月であれ盆であれ

むしろ旗国へ楯つく風を籠め

歓喜仏まともに香を嗅ぎ給い

風見鶏右へ猪突の新春譜

寝屋川市

宮尾 あいき

歳女残り火ちよろちよろ燃えはじめ

パパ子守りママは朝から美容院

お正月軒の雀もカップルで

若松に添うてほころぶ梅の花

大阪市

北 勝 美

二重橋年賀の波にある平和

水溜り靴を汚した老いの足

剪ていの鋏にあつた思いやり

白い根が透けてほころぶヒヤシンス

岸和田市

吉 水 照 江

日だまりへ猫も老母の後を追う

恍惚の一人歩きの影響うし

福娘に孫も年頃所望され

バドミントン親と一緒にの三ヶ日

倉吉市

野 中 御 前

ほどほどにほめて上手に妻使う

村時雨町から町を走り抜け

任せられ自販機不粹な音で出し

遠慮する祖母の年玉仏壇へ

笠岡市

松 本 忠 三

元旦というに愛犬無表情

融通の利かぬ男で金庫番

写真屋が顔をひいてとうるさくて

注連飾りつけた車が違反をし

米子市

寺 沢 みど里

一人酌む屠蘇にもなれて陽を仰ぐ

にぎにぎの孫に明日の夢もらう

人並に買うて御籤に裁かれる

只今を褒めて過去へは触れず置く

岸和田市

狭 間 希久志

過疎の町今日で電車が引退か

ボタ山を無人化させた汗涙

口惜しさはなんで選んだこの夫

飼犬に危険の範囲聞いてみる

大阪市

横 地 雅 風

墨染もくらしがかかるミニバイク

スポーツ紙も日銭は就労欄を見る

電話帳女世帯は偽装する

開通式徹夜で待ったミニバイク

下関市

国 弘 半休門

幸せの頂上にいる風当り

マンションの谷間サンマを焼く匂い

お隣に声かけて出る市場簞

アンケート世論を変える下心

神戸市

山 口 美 穂

窓ぎわのシンピジウムと日向ぼこ

こんな字さえ思い出せない原稿紙

ぜいたくに慣れて来る身の五〇キロ

落日へあしたは逢える道曲る

島根県 太田 亀 甲

仕事本位急に韓国へ用が出来

日本にそんなお金がありますか

保釈金庶民驚く億の金

珍しいおもちゃを抱いて寝てしまい

八尾市 山下 みつる

東京へ皆本店が寄って行き

どうしても東を向かす御来光

豆剣士心眼の話聞いている

除夜の鐘地下の職場へとどかない

加賀市 細呂木 魯 木

申告の要らぬ財産友であり

薬呑む瞼に妻子の責を知り

速報もなく平凡な日が暮れる

仙人になるつもりかと松葉酒

和歌山市 坂部 紀久子

ドの音は下の宿命を持っている

風邪薬同じ飲むなら信じよう

同情をひいて女の下心

すばらしい芸術島に受け継がれ

鳥取県 森田 布堂

お年玉孫も予算を組み立てる

賭博機に巡査が手錠かけられる

つまみ食いされる会計任せきり

ふるさとの山夕暮れの灯を抱き

兵庫県 藤後 実 男

終着の駅で彼女は打ち明ける

伝言板愛を消してる駅員さん

餅肌の娘とすれ違う腰の鈴

点滴へ今日一日を生きのびる

大阪府 岡田 ふ み

葬に昏れお産に明けた我が家です

生真面目が一人居たので座が白け

古稀迎え一日大事と決意する

街角に立たせて見たい雪達磨

熊野市 坪田 冬 花

女には一つの業は捨て切れず

酒嫌い酒饅だけは良く食べる

兄嫁という荷が馬鹿になり切れず

浮き浮きと出てゆく妻の背に不安

七尾市 松高 秀 峰

趣味の友こんなに増えた年賀状

年ですと酒も煙草も許す医師

戦前派やっぱりがラクタ捨て切れず

鍬ダコの筆とは思えぬ年賀状

岡山市 井上 柳五郎

これからも生き恥さらす余生かも

新世紀覗く長生き喜寿の夢

老人手帖届き呆けなと妻が出し

老夫婦のことしを飾るフルムーン

河内長野市 井上喜醉

鮭とみかん歳暮の交換海を越え

潮騒へ燈台の淋しい独り言

古時計むかしのまんま故郷の家

欲のない夫婦で静かな旅の宿

岡山県 直原七面山

一日一善どころか癌で御入院

口喧嘩してても夫婦棒の中

妻逝きてその日のままのカレンダー

キラキラとステンドグラスのような女

大阪府 欄蘭

下心そんな歳暮も混ってる

痛いところ突いた女房の勘どころ

ゆずる物なし安心して逝ける

三ヶ日不況はちよつと忘れとく

岸和田市 清野こう

頼まれて猪口を重ねる祝膳

孫九人カメラの前のブイサイン

信号待ち横の地蔵に掌を合わせ

ペン持つ手ちと固くなる初日記

奈良県 宮川古都路

冥福に友人代表は友泣かす

障子紙ベビーギャングの爪の跡

産婦人科憎い男の種をつみ

本心は口へ出かかるといふ

浜田市 佐々木裕

よれよれの家計赤字を締めくくる

日曜日下手に自信のつく大工

この奥に噂で泣かす女棲む

窓際に置かれた肩に手を置かれ

兵庫県 中田白李

今年また賀状が少し減ってくる

マンションの隣りは何をする人ぞ

献血もできぬ身となり生きつづけ

留守番をすれば集金ばかりくる

大阪府 山根いつを

先生も生徒も親も眼が近い

気のつかれですよ枕へ嘘を置き

何くそと気張って越えた無一文

勝負運強い男が借りに来た

交野市 山本テルミ

除夜の鐘聞く倅せにある命

嫁の手通して息子からのお年玉

愛情かもケチつけあって老い二人

忙しい財布となつて年の暮れ

米子市 増田竹馬

白内障手術

神業のメスに開眼初日の出

第三の人生へ猪年の初春一歩

眼帯を除ればお里がそこに居る

自選集

正 本 水 客

庭掃除落葉の媚を見せられる

いささかの自信へ影が従いてくる

幸せな夜景で隣りへ人が来る

ジャンケンで決める知恵さえ持っていない

いろは順にすれば肩身がせまくない

若 柳 潮 花

向き合うて富本節を聞く炬燵

関取がさせば蛇の目も似合います

通夜の夜に除夜の鐘聞く人もあろ

再会を約しハンカチなぞ振らぬ

打水へ宗右衛門町の灯がうつる

尼 緑 之 助

アクセサリーだけでは満たぬ春の午後

反戦の裏で育てる核兵器

三角も育てパートに春が来る

エリートの不覚に甘いおとしあな

雑草の小便くらいじやくたばらぬ

工 藤 甲 吉

日本かなしやF16も「ハイ」

不景気を家康型になっている

ロボットが今に労働歌をうたう

貧乏はしても手があり足があり

霊柩車ああ燦然とクッドバイ

大 矢 十 郎

日本難民さてどの国が受入れる

大正の悪酔軍艦マーチ聞く

子に残す財は積みねど善を積む

体質の似た人が逝くガンと言う
目の下にピンクの乳首つみひとつ

野村太茂津

初日の出つかみどころのない祈り
身を護る睡眠ばかり元旦や

酔うてきた屠蘇にぞくぞく湧く歓喜

大らかとせかせか夫婦の三ヶ日

書き初めや秀吟躍る筆跳ねる

山内静水

戦は二度と御旗ではない国旗
年賀状出したら死んでいた従兄弟

編集を突く筆ペンの誤字当字

案の定紙を貼られていた駐車

相い和してずり落ちそうな膝でよし

藤井明朗

客間にひとり正月も留守居する

新春の街票読みが動き出す

暖冬がつづく燃料費だけ黒字

金運より健康授けられし僕

外から内から波瀾の中の日本

水粉千翁

ふり向かぬ今朝の春風だとおもっ
うなずいて満つれば欠くる涙拭く

そろばんをはじくもう一と押し音

これしきのことのいたみよ負けいくさ

書初めの負けてはならぬ墨をすり

金井文秋

老夫婦の話題とぎれぬ走馬灯

冗談をうっかり聞いておれぬトゲ

生者必滅元旦というのにな

いい給料もらい婚期が逃げて行く

国民年金すこしは足しになっている

市場没食子

耐えて来た忍が稔っている老後

妻も喜寿目出度い春の初詣

長い目で見たりなはれと陰で母

閉会の辞を聞きながら急ぎ飯

御詠歌のすむまで義理の座を温め

新岡回天子

一年の御無沙汰わびる賀状書き

寿と書かれた床の猪おとなしい
勢よく猪かける屏風の絵
二人して笑つてゐる句の川柳展
毎日の紙上世相の川柳展

月原宵明

弾倉に弾を残したまま妥協
無い者の武器に日照権があり
晴耕雨読昼寝のことに触れていず
横になる気持いくさに負けている
廃船とテトラポットのある訣れ

河村日満

古稀いまだ人畜無害でもないぞ
正論を木葉微塵の多数決
老婆の愚痴は聞こえぬ耳にする
神主に負けぬ柏手振り向かせ
猪の容姿わたしに似てるとか

大坂形水

解体を喰う派閥に暴力団
ゴルフアールが見ても鼻持ちならぬゴルフアール
アイアンの名手小太刀の冴え見せる

合鍵を持ち合い晩年楽しむなる
月給が右から左へ消えた頃

本田恵二朗

師の癖を一つ盗んだ日の凱歌
顔ばかり売れてふところ空っぽです
雑踏で妻といつとき生き別れ
小言にも上手と下手がありまして
勲章より生きてかえって欲しかった

黒川紫香

春や春仁王にお辞儀して帰り
生け花の師匠が洗濯物を干す
窓開けて車掌何やらひとり言
風紋よ明日は早立ちして帰ろ
退け時の銀行にある視線

橘高薫風

来し方を溶かせば淡いむらさきか
梅よりも桃に魅かれる少し老い
ああ祖国不沈空母にする大臣(おとど)

浜田久米雄氏を悼む

閻王に朝酒の徳説く君か

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

野村 太茂津

朴訥のそんなに先を取るでない

鈴木 村颯子

良寛師の戒めの言葉に『ことばお、き△か
しましくものいう△とわずがたり△さしでぐ
ち△むだごと△人のものいいきらぬ中にも△
云う△よしなき長ばなし△人のねてからの大
ばなし△知らぬこと知ったげにも△云う△し
めやかなる座にて心なくもの云う』鑑賞者も
又ことは多く、よしなき長ばなしは控えよう
海に貌埋めて夕陽は泣いている

藤井 一二三

広島のスームくぐって来る夕日

田崎 あき子

第二句は、余程悲しい訣れを体験したので
あろうか、筆者も海の夕風ぎに魅せられ、特
に水平線に沈む瞬間の真赤な太陽に出遇うと
き、身ぶるいするほどジーンと胸を打たれる
感動が走る。作者は別れの悲しみを、母なる
海に沈むこの夕陽に想いを托したのであろう
か。第二句の夕陽は、被爆スームの残骸をシ

ルエットにした深い感慨であろう。

枯葉舞う怨みつらみの女文字

谷垣 史好

落葉散るかさこそ泣いているように

清野 こう

風に舞い散る枯葉の情景は、たしかに女文
字、しかも毛筆。落ちるかと思れば、上に横
に舞う、怨みつらみを書いてるように、心
憎い表現だ。『水茎の跡うるわしく断われ
(弘生)』があった。第二句は、地に落ちた枯
葉、泣き声のように音たてて風に散っている
という。情緒の深い句であるが、訴えるもの
が弱く若干もの足りないが……。

意地張ったぶんだけきつい風になる

津守 柳伸

主義主張すると温い風がくる

大野 武太

おんなの意地張った少々息つまるような思
いと、主義主張を捨てたというが、吐の底に
ずしりと抱えているおとことの対照。

淋しくてやりきれなくて浪費癖

西山 幸

あまりにも淋し過ぎて堪えられない時は、
男なら酒場に向くが、この『浪費癖』という
のは、金銭を浪費するのではなく、周囲に気
を遣い過ぎ、自己を責め苛み傷め過ぎるとい
う自己嫌悪であろう。

素敵な人と淡い訣れをしつしまう

杉本 智恵子

逢うて来た余韻の残る紅サンゴ

赤川 菊野

何でもない人と何でもなく別れ

村上 田鶴子

淡い訣れでよかったのだ、再会の時はきつ
と熱い出会いになるだろう。サンゴの色に余
韻が残る訣れも、又逢えるときめきがある。

何でもなく別れたくなかったのであろう、本
音を内側にひそめているアバンチュールか。

帰したくない人へ時計の針動く

榎本 吐来

この人も別れにくいのであろう。もって居
てはいいのだ。『帰したくないので喋りつつ
けている(智子)』という佳吟があった。

叩かれるほどに木魚の音が冴え

天満 三千代

読経三昧に入ると無我の境になる。心も澄
みきつて、誦している経文に合わせて木魚の
リズムも無心に冴えてくる。羨ましく境地
神前で殺し文句を考える

慳 谷 寿馬

相手は誰なのか、殺し文句をぶつつけられ
る人を連想すると、考えている場所が神前な
ので尚迫るものがあり、却って苦笑も。

沢庵を刻むたしかな朝がある

森脇 善太

日常茶飯事の情景と言ってしまったえばそれま
でだが、リズムカルな包丁の音で、さあこれ
からという朝の意欲がひそんで、一字一字が
息づいている僅か十七音、省略され尽した
余韻が、この刻む音に集約されていて、その
日のたたかいが、どのように展開されるのだろ
うか、そんな余韻がある。

川柳 太平記 (58)

川柳の群像

田中蛙骨

東野 大八

私は目下岐阜県に住んでいるが、その身ビイキをタナ上げにして川柳史を眺めた場合、岐阜県は柳界切つての名門なのである。

そもそも岐阜県における川柳の発芽は、嘉永三年（一八五〇）で五世川柳が高山を訪れ高山日吉山王会で奉納句会を催したのがそれである。その翌年の嘉永四年には高山八幡宮で奉納狂句会を催したことが「濃飛郷土志料目録」に記されている。更に元治元年（一八六四）五月には五世川柳追善会が高山城山保寿寺で催されている。参加者八十一人で、その県外からの参加者は六世川柳はじめ二十余名、何さま往時は乗物といえは駕籠だけでその開催費用は莫大なものだったらしい。

さて、明治に入ってからだが、明治三十六

年の久良伎・剣花坊の新川柳振興運動に呼応し、地方柳界では初の柳誌「青柳」が創刊された。その創刊記念句会は同年五月二十三日で「青柳会」そのもののスタートでもあった。その「青柳会」の会長格であり、柳誌発行人こそが田中蛙骨であった。

柳誌「青柳」は四六判ながら72ページという堂々たる誌容で県下に七支部を設け、関東関西の往時一流の川柳人を網羅している。柳史上名著の筆頭にあげられている今井卯木著の「川柳江戸砂子」（明治四十三年刊）は、蛙骨の独力出版であった。この発刊について東西の一流紙が筆を揃えて絶讃したものである（「青柳」第四卷第二号に特集掲載）

もっとも「青柳」発刊についての推進力の

役割を果たしたのは地元の新開柳壇で「岐阜日報」「新愛知新聞岐阜版」「濃飛新聞」が競ってその川柳欄を掲げたことによる。

蛙骨の本名は田中守躬。明治十五年八月十四日岐阜県稲葉郡常盤村（現岐阜市城田町）で河田熊碩（医師）の二男として生れた。彼は医師修業のため上京中、親戚の田中丈右衛門（医師）の養子となった。時に二十一歳。

彼が養家先で医師として一本立ちになったのは大正七年で岐阜県安八郡大藪町で田中医院を経営。一男十女の子福者となり、趣味として川柳に全力投球を試み、昭和十七年一月一日死去した。享年六十一歳。

彼の柳熱もただならぬ川柳愛の心証を吐露したものに「青柳」第二号（明治42年10月発行）の巻頭につきのように記している。

「我会員に敬す。予に一度でも面談した人は御承知であらう。予は川柳には一身を犠牲に供するものである。川柳で命を捨てるのならば少しも厭わぬ。川柳で斃れるまでやるの決心がある。川柳のためなら喜んで逝くのである。（略）我会員たるもの、また、たらんとするものは、希くば予と均しき決心を持って貰いたい。川柳と討死するの覚悟なきものは宜しく去ってくれ給え。一時のお慰み半分に

川柳をやってみようなどという意志の薄弱なる輩は、断じて会員をお断りする。頃日某なる人物が余を訪問し、『川柳を投吟するに、懸賞でないと気の張合いがない』といった。予はこれをきくや、その男に会員となることを直ちに謝絶した一略」

『青柳』第四号における社告として

「懸賞を撤廃して川柳書を頒つ——大懸賞募集を撤廃し、それに代うる有益なる川柳書籍を出版し、ひろく天下に頒つことに改めたり。(略) ます今井卯木氏の「江戸砂子と古川柳」を出版せんとす。いささかなりとも柳界に貢献せんとの微意より出たるものなるを諒とせられたい」

青柳会主催で岐阜県第一回川柳大会(明治42年7月4日長良川畔)、同第二回川柳大会(同年9月26日忠節橋詰・橋徳)などを催しまことに意気旺んであった。「青柳」第二号から小冊子から菊判に改め月刊としたが、同時に課題吟選者に「明治時代の第一級選者」とめい打ち久良岐・剣花坊・卯木・当百・百樹・幻怪坊・文象の七人を迎えたと社告しているのが注目される。

蛙骨は顔が蛙に似ていることを自ら認め、その号としたが、現在もその蛙のコレクショ

ンが百余個、大蔵の同家に残っている由。年中ハカマを着用し、篤実にして性らい落、豪快直情の人として知られていたが、蛙骨には恵那岐川(本名梅溪光)と山田耶那岐(本名正明)の両腕がいた。特に岐川は、明治四十五年一月、蛙骨の病気で休刊に瀕した「青柳」をよく支えたが、「青柳」は大正元年一月、蛙骨の病臥と岐川の家庭の事情でついに廃刊のやむなきに至った。

しかし蛙骨の川柳熱は、病中にあつてもいささか衰えず、身体も持ち直したので、大正十一年五月、蛙骨を主幹に、岐川、爪人、暮郎、占魚、黒ん坊、正明の旧青柳会幹部と力を合せて柳誌「よのころ」を発刊する。かたわら久良岐の川柳風俗誌「五月鯉」の流れをくんで季刊誌「川柳社会風俗誌」も発刊した。

この後者の季刊誌が柳界に著名な古川柳研究誌「やなぎ樽研究」(大正14年5月創刊)と改まる。この発刊に当り、全国川柳結社九十余社、その関連の柳人千八百余人に挨拶と協力を依頼した。その費用は当時の金で三百円を要したという。

このためか水府・雀郎・夜叉郎・溪花坊・当百・飴ン坊・紋太・角恋坊・卯木・百樹に剣・久岡大御所が賛助会員に加った。

「やなぎ樽研究」は、四六約80頁の堂々たるもので、その第一頁に「英訳川柳名句選」一頁が連載されたのは、全国柳誌中本誌をもってこう矢とする。発行所は岐阜市金屋町柳書刊行会で大売捌所は東京の文武堂書店。

この柳書は蛙骨と岐川が私財を投じたものだが、昭和六年その経営に休刊の危機が迫った。このとき三面子、柳面、虹衣、東魚、直弓、省二、山椒らの古川柳の著名な研究家二十四人が発起人となり「やなぎ樽研究」後援会をつくり、月刊誌として経営維持に協力した。しかし本誌も大黒柱の岐川の死去によって昭和九年一月をもって廃刊。「柳界にとつて一大損失(三面子)」と嘆かれたものである。

ともあれ卯木の「川柳江戸砂子」を独力で出した蛙骨と岐川は同誌の特別付録号として「川柳吉原」を発刊すべく印刷に着手、四十八頁を刷り上げた時、ある事情で中止したのは惜しい。蛙骨の片腕として活躍した岐川は「木卯尊」の柳号で「青柳」「やなぎ樽」で活躍したが、職業は新聞記者ともいい印刷業ともいい、その素性はさだかではない。

★次回は西原柳雨。

俳風柳多留廿六篇研究 (九丁～十丁)

158 松の葉へ早蕨一本書てやり

八木 〓 「松の葉」は寸志の意を表す語。俗に「志は松の葉」とある。

句意は、志は松の葉という語がある。心ばかりの贈り物。上に紙をかけて、のしとサワラビのように書いて贈る。「松の葉」と「早蕨」と植物でまとめた句作。

『江戸語大辞典』に「松葉のし」ということばあり、

松葉の形に書いたのし。女郎からの初春の文にはこれを書く習わしであったという。文化八浮世風呂三上「松葉のしの付いた初文が来たらう」

南 〓 賛。ごくごくつまらぬ贈りものに手書で

八木 敬一・鈴木 黄・石田 晋一
南 得二・小野 真孝・本多 正範
石田 成佳・大屋 六郎・多田 光

故岡田 甫

のしと書いてやったというのでしょうか。早蕨の如きのしを書いたというのですから「松葉のし」には関係ないと思います。

石田 成 〓 南氏説賛。現代でものし袋を使わないでごく簡単な心付け等は半紙にお金を包みのしと墨書しているようです。

多田 〓 同。「ごろさしハ松の葉と云俗語あり」(『俚言集覧』)。

岡田 〓 諸説に尽く。

159 松根ニ上戸の供ハ大あくひ

八木 〓 『和漢朗詠集』に、

倚松根而摩腰 千年之翠満手
折指花而挿頭 二月之雪落衣

句意は、主人は呑ん平で長尻。新年の礼の供

門松の根によりかかり大あくびをしていると。
石田 成 〓 賛。

礼の供松葉でくさりこしらへる

明二義 4

多田 〓 賛。

岡田 〓 同。



160 神国へ寺の言葉ハ過言なり

鈴木 〓 「寺の言葉」は言偏に寺で詩。本句は白楽天の故事を詠んだもの。

白楽天の詩は「青苔衣を帯びて巖に懸り、白雲帯に似て山の腰をめぐる。これに対し、

漁夫(住吉明神)は、「苔衣著たる巖はさも

なくて衣着ぬ山の帯をするかな」と和歌を詠じ、「速かに浦の浪たち帰り給へ、楽天」と言い放ち、多くの神々も姿を現わし、「青海楽」を舞ひ、唐舟は神風に吹きもどされて唐土に引返してゐた。

らくてんハ日本一のはじをかき

一五・33

神風にもうこりはててうせぬなり

三〇・30

南Ⅱ賛。

言へんに寺神国でたつとます

三三・22

神国で寺の言葉を吹もどし

四八・20

神詠で寺の言葉を御笑イ

六一・37

多田Ⅱ賛。

岡田Ⅱ同。

161 稲妻をぐたくにする師の御坊

鈴木Ⅱ謡曲「雷電」の故事を詠んだ句。「師の御坊」は、比叡山延暦寺の座主、法性坊の律師僧正。内裏に現われた雷電（前の菅公）が法性坊に祈り伏せられる。

謡曲に「思ひ知らせん人々よ。く」とて。

小竜を引き連れて。黒雲にうち乗りて。内裏の四方を鳴りまはれば。……不思議と僧正のおはする所を雷恐れて鳴らざりけるこそ奇特

なれ。……嬉しや生きての怨死しての悦これまでなりやこれまでとて。黒雲にうち乗って虚空にあがらせ給ひけり」と言うことで菅丞相の故事である。

筑紫から一度師匠へ御通ひ

二七・14

おそろしひちん客の来ルひえい山

安五松Ⅰ

かみなりとはく学の僧こんいなり

安四天Ⅰ

石田晋Ⅱ賛。ぐたくたは力を弱らせること。

多田Ⅱ賛。

岡田Ⅱ同。

162 浜荻を他国の名にて伊勢ハよみ

鈴木Ⅱ「伊勢」は、伊勢の守藤原継蔭の女。彼女は藤原仲平と親しみ、後に七条后に仕えたが、更に宇多天皇の寵を受け、伊勢の御と称せられた。この彼女の歌に、

難波湯みじかき声のふしのまも

あはてこの世をすぐしてよとや

彼女が詠むなら当然「浜荻」と言うべきなのに「あし」と言ったので一寸ばかりユーモラスを感じる。位の解釈でよいか。

はま荻と伊勢よみそふな所也

三七・34

南Ⅱ賛。

浜荻を詠そふな伊勢声を詠

六〇・23

本多Ⅱ賛。「伊勢の浜荻、浪花の芦」の俚諺に就いて、折口信夫博士は、「万葉集卷四にある『かむかぜの伊勢の浜荻折り伏せて旅寝やすらむ荒き浜辺に』から出たもの」と述べておられる。蛇足まで。

大屋Ⅱ賛。

芦刈によし有妻かめくり合

六三・9

多田Ⅱ賛。

岡田Ⅱ同。

163 御立身紅白棟にひるかへし

鈴木Ⅱ『風俗志』によると、第三節大小名の項にこの句が記載されている。上段の解説には「棟上に紅白の旗を立てる」となっている。大筋ではこの通りと思う。だんだんと官位もあがつてくれば邸宅も大きく立派になければなるまい。新築の邸の棟上げ式の豪華な様子を十七文字の川柳であらわしたもの。

なまかへ御使者を通す御立身

五・7

石田晋Ⅱ賛。但し、紅白の旗立てる資料見つかず。

多田Ⅱ賛。

岡田Ⅱ石田晋氏の質問、有礙。例証を探さしたし。



黒川紫香選

八尾市 高杉千歩

名古屋市長井高子

かくし芸一つも持たず口喧嘩
早春の旅道連れを振り好み
口下手な妻だからすぐお茶を煎れ
白き画布醒めた心で花を切る
どう置いたとてレモン三つに变りなく

尼崎市 田中晴子

月あかり洗髪から犯される
失語症日にち薬はまだ効かぬ
旅みやげ雪国からは塗りの箸
こわいものみたさに謎を先に解く
信楽の煉炭火鉢で小豆煮る

西宮市 紀市郁栄

めでたさがいっぱい仏間に積んである
たわいない女が怖いはなしする
讃美歌に静かな雪が降ってくる
酒タバコやめた呆れた男いる
酒で晴らせる憂さならいつも抱いている

イニシアルで少年一人裁かれる
再会へ君の合鍵ピタリ合う
玉手箱に言うてはならぬ語を詰める
レタスバリバリ昨日を消した朝の卓
影武者の企みじつと聞く鳥

羽曳野市 麻野幽玄

フルコースとてもこなせぬ老いを知る
明日攻める磯波音が眠らせず
値引きせぬ分は嫌味を言うて買い
孫たたくピアノは騒音とは言わず
掃除機が拾て呉れてた探し物

尼崎市 奥山美智子

思ひ出が甘く漂う沈丁花
大腿で歩けば夢が逃げてゆく
宝石の値段に酔っている女
寒椿凍てる言葉に耐えている
おしゃべりを雀も聞きに日向ぼこ

尼崎市 春城年代

忘れっぽいはいはなしで久闊温める
かくし立てなかつた夫婦で温い冬
忘れっぽくなつて余生もおもしろい
世の中をトンボ眼鏡で広く見る
それとなく賀状にさがす人がある

和歌山市 中尾 まゆみ

夢ゆめ夢ひととき空を飛んで見る
一枚の朱の花びらにある涙
美しい嘘を溶かして雪の舞い
白紙のまま閉じる日記は淋しいね
指切りの先からきつと春がくる

岐阜市 市川 鱗 魚

一行詩恋の綴りは彩になる
木もれ陽の風からもう唄はない
花時計少しゆるんでいる出逢い
葱刻む妻に女は燃えて来ぬ
寡婦の鈴ふる日一途な物思い

尼崎市 角 野 かず子

雑踏を横目に雀飛んで行き
雲のない日も雲描いて絵を仕上げ
バーゲンの雑踏好きなお母さん
踏切りがあつて疎遠な仲になる
下車をしてさて地図を見るセールスマン

名古屋 越 村 枯 梢

父の夢みた夜は父のなつかしき

臨終の母にやさしく紅をひく

着飾った女の黒い足袋の裏

横に這う蟹の謀反を見てしまふ

止り木におんな一人の憂さ晴らし

松原市 佐藤 藤子

ささやいた小道の鹿は人ぎらい
エプロンのポケは童謡忘れない
人形に洩らした言葉にうろたえる
よく見える眼鏡をかけて多忙なり

藤井寺市 赤木 和子

雪しんしん慕う心へ降り積もる
覗かせた二葉に春が眼を覚ます
抱きしめてほしい涙を見せに来る
かすがいになるはずだった子が背く

尼崎市 関口 幸子

鬼だつて行く家選ぶ権利有る
沸きすぎの風呂でお先にはいらされ
抵抗のできない皿に八つ当たり
ニューラルク国防色のモンペ穿く

尼崎市 丹下 玉子

夢を追う少女はガラスの靴をはく
孫達の笑いが満つる春の部屋
音無しの構えで猫が炬燵入り
落ちてゆく女の眉に似たやなぎの葉

寝屋川市 平松 かすみ

豆食べて齢を取り度くない話

自転車で帰って来ました日本髪
リモコンチャネルならこまめな夫
えさをやる二百羽の鳩が恐くなり

尼崎市 西村 かすみ

内裏雛夜更けて何かものを言い
二科展を出れば風にも色がある
立ったまま夫に嘘つく夜の冷え
したたかに生きた女の綿ボコリ

青森市 工藤 路子

家中が受験のリズムでまわり出し
毛皮着た妻にいささかうろたえる
後戻りさせてウインド春の柄
南国の旅のプランも吹雪の夜

鳥取県 中原 諷人

じゃが芋ゴロゴロ水子の貌がまだ浮かぶ
子宝へ紙人形が腰を振る
鳩一羽平和な郷は知っている
蕎麦殻の枕で亡父と語り合う

富山市 舟渡 杏花

白いもの髭にも混じる二度の職
ラストダンス妻のリードへ湧く拍手
みせたい人ができて撰つて髪かざり
角度変えてみればなんでもない話

尼崎市 伊藤 春子

解釈の違いが起こす隙間風
落ち込んだ日は裏道へ足が向く

刻み煙草キセルの音と父の貌
時雨くる菊の終りの私語を聞く

京都市 松川 芳子

八十の母にも似合う白い足袋
孫が来て正月気分にして呉れる
京都弁聞き返される孫に距離
吹きだまり枯葉の私語が聞こえそう

高槻市 竹内 花代子

顔見世のように雀が庭へ来る
バスクリンの匂いで湯から上つて来
目が入るまでダルマは祈られる
白百合の匂いに負けぬ松を活け

東千市 小山 悠泉

掌を合す時善人の貌になり
一杯が呼び水となるはしご酒
結局は夫私の色で染め
染替えて娘に着せる形見分け

西条市 片上 明水

ジャンパーの襟立てて来る借用証
商人の知恵空箱を高く積み
北風にかわり犬小屋向きを替え
地下道を出ると余分な目を使い

大阪市 藤森 小雅子

如月の月が冷たいひとにする
それからのドラマを風が消してゆく
夜の蝶音痴が哀しいタクト振る

しめ飾り古いのれんを守りぬく

豊中市

満仲 きく子

お年玉貰いにきたとあけすけに

故 古方先生を偲ぶ

雑踏に恩師みたいなベレー帽

毒舌へとことんアホになつてみる

君がため七草炊いている平和

今治市

矢野 佳雲

掘り下げた質問をして座がしらく

苦勞みな皺にたたんでよく笑い

山茶花の色に染っている時雨

孝行のしすぎが嫁の氣に入らず

熊本市

大川 幸子

印相を変えても生活変わらない

知らぬよな振りして見てるこわい人

急ぐからなおファスナーにすねられる

焦げついて見たい日もあろ炊飯器

熊本市

有働 芳仙

矢印がここで消えてた人生論

裏切りへ地球自転をゆるめない

早咲きの花にお色気ちと足らず

雑巾の数ほど母はよく動き

竹原市

岩本 笑子

小さくとも小さくとも吾子の手が温し

冬の旅北風と握手して別れ

横向いた影が演出するドラマ

にぎりつぶして女の瞳のうつろ

西宮市

奥田 みつ子

姉嫁ぐシャッターを切る一途な眼

娘の結婚に

ヴェール映えパイプオルガン厳かに

帰省子に家中の灯あかあかと

子離れの食卓に椅子多過ぎて

島根県

松本 はるみ

藤色の靴を買い来て華やぎぬ

若き日の酒量が消えた夫の背な

亡き母の日記に今日も暮れとあり

品物が溢れすぎてる倦怠感

弘前市

田中 叶

再軍備今は宛名のないハガキ

灯のなかに貧しき国の厚化粧

息白く悪女も朝のバスを待ち

バス降りて病室までの胃の重さ

大阪市

清水 康恵

ひとり旅なべやきうどんが欲しくなる

置きごたつ昔話の好きな母

回覧板まわす隣も共稼ぎ

風のない街で出逢った影ふたつ

岡山県

土居 耕花

家計簿でみれば餓える事になる

冬眠の蛙柳の句をひねり

瓢たんを播いて奇人の内に入る

悪筆の遺書は残さぬ事にする

今治市

渡辺南奉

戎橋ただ揉まれるだけで用はなし
病妻へ水を足しつつ粥が煮え
旅へ来てすぐ土産買う女ども

竹原市

古田比呂子

子の未来父の軌道はおしつけず
転ぶ前に支えてくれる友が居る
馬鹿がつく程の素直が長所です
一言が過ぎると溝が深くなる

熊本市

北川一進

CMの薬どれでも効きそう
一本の川の流れにある歴史

喋りたい方がマイクの近くに居
花いじり日曜らしい顔になり

大阪市

吐田公一

しめくくりしたい心がガラス拭く
雑煮餅一つへらして胃をかばい
進学へ親のあせりをうるさがり

大阪市

山田松太朗

お世辞の言えぬ男で平社員
静けさを残して最後の娘が嫁ぐ
傷口をなめて野良犬路地に消え
気の弱い夫は夢で浮気する

熊本市

宇野昭代

達者かと訣れた女とふと出会い
漠然と描いた自画に酔うている
打ち終えた花火の後のような恋

富田林市

藤田泰子

娘のセーター借りて散歩の足はずむ
何時からか一人ぼっちが好きと言う
待っていたように辞表を受理される
燃え尽きてみようか胸のさわぐまま

鳴門市

八木芳水

客席で観れば笑える家庭劇
生い立ちを静かに語る貝の紋
逆回りは許されてない風車

島根県

藤原秀穂

機嫌よく押したハンコに悔やまれる
透き通る嘘へだまって聞いてやり
丁寧な言葉の裏にひそむ棘

芦屋市

上田佳秋

老いらくの恋してみたいと風が呼ぶ
教え子の便り心に灯を点す
猫年は毎年来ると猫が言う

富田林市

植松慶子

胃検診胃の存在が重くなり

「ザアマス」で切った電話が汗をかく
上役の醜聞握って栄転する

旭川市 朝倉大柏

訂正印そこを二三度読み返し
晴着着た客へ娘も着替えさせ
電卓のキイが知ってる社の疲れ

兵庫県 森脇和子

狂わないタクト振ってるお人よし
香煙のただよう居間で小さな愚痴
洋ランの一鉢買った老いの贅

大阪市 津山刀水

激しさを抱いて女が逢いに来る
老いたなと見られたくない色のシャツ
別々の記憶を慕情あたためる

尼崎市 中辻千子

元旦に最高の顔で孫が来る
ままことのそっくり真似され恐くなる
メモをする意欲があつて老いみせず

竹原市 石原淑子

おみくじをひいて自分に暗示かけ
蘭の持つ魅力に財布をはたかされ
新家庭おせちも両家のミックスで

宝塚市 丸山よし津

嫁ほめる言葉の裏で針を研ぐ
悔いのない暮し二人の豆腐鍋
試みに黄色い歩道踏む痛さ

落穂拾い絵になる里の夕まぐれ 諫早市 江副二牛
新婚のままごとめいた台所
長話する世話好きをもてあまし

大晦日何だかせわしい僕でさえ 尼崎市 山田保蔵
菰着ても乞食じやないぞ寒椿
よく飲むネ孫の瞳がやわらかい

本能のように我が家の灯に帰る 鳥取県 森山盛桜
小春日が女の足を街に向け
コンパスの軌跡の中で吠え続け

信心の帰り屋台で精進明け 尼崎市 吉永伊三郎
ペンと辞書机に置いて舟を漕ぐ
足の爪切ってる妻の丸い背な

喪が明けて女哀しい城に入る 岡山県 吉末謹太郎
小走りに消えた女のひとり言
猫抱いて寝る老妻に少し嫉け

傷口が疼いて雪の道になる 鳥取県 和井観洋
大根の暖簾をくぐり年暮れる
蟹すきを囲んで鬼に成り切れる

雨の日はインターフォンで話すだけ 西宮市 藤村宏子

初恋の人が住んでる城下町
半分は自分のためのボランティア

熊本市 高野宵草

オヤ今年選挙かいなの年賀状
長電話猫が四匹産んだそな
カタカナに出逢い辞典を探して来

松原市 本多洋子

九輪にはうす陽さしつづ古都時雨る
おおらかな大和の春に救われる
山深く鹿の親子の優しき背

豊中市 田中正三

近頃は見舞う人なく花飾る
面接に親父のネクタイ借りられる
示談金日が経つほどに出ししぶり

豊中市 田中淑子

再入院いたわりの目で迎えられ
病氣して病人の辛さよくわかり
旅予定ずらし見舞ってくれた友

鳥取県 石井雅水

小吉のおみくじ大事に屠蘇交わし
懐しいくせ字そのまま師の賀状
年賀状書き終え除夜の鐘を聴く

高槻市 芦田静江

外国の人が譲って呉れる席
河川敷風も見ている茜空
街の角ピエロ平和な節まわし

寝屋川市 堀江光子
清張を途中で置いてしまい風呂
ふるさとの言葉で祝う雑煮餅

百人一首よむ母の声若がえる

島根県 石飛水煙

気の抜けたように昼寝の三ヶ日

黒梓の中で伸介福々し

千両が春を迎えて色を増し 西宮市 朝山千世子

百号記念句会盛會に咽ぶ感無量

諸師のお蔭句座満員に瞳がうるむ

卒都姿小町百年生きて哀れなり

岡山県 松本元江

明日は雪カサコソ枯葉しやべり出す

温かい里には帰れぬ雪女

桜咲く頃の約束温める

八尾市 宮崎シマ子

かごめかごめの鬼さんいつも小さい児

スクールバス泣いている子も泣かぬ子も

冷蔵庫に玉子が満ちた小さい幸

河内長野市 井上伸子

足跡をつけて夫婦で旅をする

隠退の花道飾る美辞麗句

気やすめの言葉聞いてる日のあせり

兵庫県 仲井素水

年金の梓はみ出したローン攻め

石橋を叩いて見るが渡らない
嘘混せてクルクル回る口車

大阪市

日 阪 秋 子

褒め言葉添えて見合写真返される
年金がありましようとな妬いている
お祈りもごく簡単な独り者

八尾市

葛 幸 子

風邪の床なかなか効かぬ卯酒
目玉焼今朝は目玉が片寄って
看病に帯も解かない母の夜

島根県

東 原 福 子

死の誘い青空を見て立止まる
旅ばなし老いのこたつ華やいで
無事という二字が凡ての事足りる

水戸市

上 鈴 木 春 枝

夕焼けに明日があるぞと励まされ
包丁を置いて一句を書き留める
添い寝して子と同じだけ眠りこけ

高知市

北 川 竹 萌

粗品出すときは見掛けぬ客が来る
妻と一緒に食膳につく新春三日
テレビドラマ先よむ妻の感のよさ

枚方市

二 宮 山 久

表紙まできわどく見せて週刊誌

ふる里の達者な母の電話ベル
前進へ足跡なんか振りむかず

孫昼寝こたつの裾に顔がある

尼崎市

矢 萩 貞 子

赤ちゃんの沐浴カメラが待っている
大阪城梅園歩く盲導犬

唐津市

浜 本 ち よ

つたかずら枯れても松を離さない
入歯した笑顔も何処か他人めき
影ぼうしお前はシャンとして歩け

唐津市

神 崎 紫 泉

花時計も衣替えして暮近し
コスモスの乱れ潜って猫の恋
こたつ舟盃を重ねつ川下り

唐津市

福 島 フユ子

老後をみてくれるロボットがいても良し
目覚しのベルと一緒に又夢を
省エネにせめて布団をまめに乾し

島根県

岩 佐 富 子

すばらしい夕やけ宍道湖の暮情
窓越しに松も鏡に覗きこみ
赤貝がうまいと孫のお正月

西宮市

松 尾 志 保

湯煙りにみちのく旅情労いやす
湯舟から妻のハミング洩れる宵
面影が妻に似かよう家の嫁

弘前市

真 喜 内 實

いつ見ても花束だいてるような人

尼さんのほほえみ似合う雪の街
ねむるのは神からミルクイただくのです

東大阪市 三宅 旭

牛のよう食べおきたいいうまいもの
そよ風に蕾ふくらみ恋芽生え
霜柱碎ける音の爽やかさ

吹田市 井上 照子

サンタ来る靴下吊す換気扇
美容院髪はもう春年の暮

元旦も平日もない子だくさん

寝屋川市 立床 晴風

いい返事したくも理想でないお方
動かずに人の世話やく辻地蔵
事故が無いとて道標置く安堵

和歌山県 山田 久子

フルムーン夢ですポスター横目でみ
初霜をふんで配達子が帰る
柱時計何十年ものときざみ

大阪市 今西 静子

義理の子を叱る言葉は控え目で
父と子の酌む盃も春のいろ
正論を吐けば貧しさつきまとい

大阪市 松本 ただし

妻の名も賀状に添えて達者です
悪いとこ治れば他が又傷み
適量を越えてはしやぐ旅の宿

八尾市 松下 蕉露

こつこつと美人になる金溜めてます
Uターン村の芝居の監督し
魔女一人ホテルのロビーに坐ってる

米子市 沢田 千春

只今と今にも亡夫が帰りそう
旅終り人を信じる事を知り
幼児の足跡にみる可能性

鳥取市 武田 帆雀

時たまにみやげを提げる間柄
セドリック入庫したまま主臥し
十訓を背なに老舗の長火鉢

泉佐野市 真崎 浪速子

思惑を孕み海峡黄昏れる
反応を確かめにくる炬燵の手
お得意に若いネクタイひやかされ

熊本市 紅葉山 巨足

真面目すぎる人で慢性胃炎とか
母乳大切乳房大きな嫁さがす
女から年賀がきたと冷やかされ

大阪市 北山 悟郎

女文字の手紙から先に読み
チラシ見て今日の日課を組立てる
市井の声ふんだんに出る立飲屋

大阪市 平井 露芳

ショッピング杖も兼ねてる押し車

病院が近く花屋も一つ出来
家康が電波で大阪城を攻め

兵庫県

脇田米朝

何もすなこれ程むごい言葉ない

一心に祈っているが慾ばかり

助言する人があるらし電話口

守口市

岸野キミ

こけし人形楽に寝せてとささやいた

外は雨カルタで孫の餌になり

野良猫の目が気に入らぬと猫も言う

東大阪市

金本不二夫

特攻機おくった基地でジャンボとぶ

さみしさは娘のくれたチョコレート

祖父いまだ赤ネクタイがよく似合う

尼崎市

佐藤美代子

外に出て伸び行く影に冬を知る

大風呂敷拡げて信用失った

しばれる日鋭く空突く杉木立

河内長野市

糸谷春草

コンタクトレンズ探している楽屋

補聴器でつまらんことも聞いており

千葉県

中村有人

掃除機におさつ一枚吸い取られ

婆さんが話相手になる齢で

青森県

波ただお

年に二度来る薬屋と世間話

北国の証拠一夜で積る雪

大阪市

堀口欣一

お薬をのんで今年もおめでとう

十二月八日顔見世四等席

大和高田市

岸本豊平次

引金を知らない女にも戦記

マイカーの有る便利さを子が主張

大阪市

板東倫子

酒呑みに帰っただけの帰省の子

お年玉出せば世辞言う孫娘

大阪市

小野風童

空っぱの財布が道におちている

物語り島の悲しいことばかり

東大阪市

高木コハギ

それぞれに数を言ってる雑煮餅

雨男行きも帰りも雨の旅

竹原市

佐藤令子

作業着が温いカラカラ笑う道

小羊に心地好い風亡母の里

愛媛県

宮尾みのり

スケールのでかい社名で雑居ビル

落石注意石が裸で突き出てる

高知県

曾我部佳風

無器用な男をさらす鉋くず

珍しく社長が居った社長室

東大阪市

坂本喜洗

混浴に左右に分れる露天風呂
お早ようさん朝の機嫌は声で知る

益田市

里本 たちし

今治市
寄せ書きの温みを抱いて読む賀状
心の灯点す余生の日記帖

新居田 胡頼子

決断が出来ない露路が行き止まる
工場の屋根の煙りに耐える鳩

大阪市

服部 頼一

新潟県
般若心経口ずさんで心平和なり
正月休みからつかれて出勤し

高野 不二

ぼやきつつ飽きたおせちを食べ終り
善人の顔で拝んだ初日の出

境港市

細木 歳栄

島根県
年始客来ぬのが二人いて不安
食通の息子吾が家の味乱し

福岡 芳枝

青空に風は糸まで吸いとられ
良き友を持つ幸せを年賀状

山口県

高崎 雀声

唐津市
しんしんと降り積む雪を風呂でみる
盃を交わしながらの湯舟かな

山口 忠温

脱ぐだけで女優になれる顔をもち
バレードに吾が子を探してゆくカメラ

姫路市

人見 翠記

今治市
往年のスターの皺を追うビデオ
悪妻の日記がつづく倦怠期

萬本 昌道

何に効く説明もなく薬漬け
暖冬のはや花をつけている垣根

鳥取県

灘 尾民子

兵庫県
いざといや歯車がつちり合う家族
うぶ声に早や親馬鹿の顔になり

円増 貞子

失恋を丸い月には語れない
栄転も左遷も同じ駅を発ち

島根県

北川 民子

大阪府
一枚のはがきに乗せた春の幸
しきたりのトソを回して年の順

野田 君枝

寄り添うて家族の如く福寿草
初詣お願いごとの多いこと

八戸市

島田 昭治

泉佐野市
寝た切りへ黙礼ウイロ差上げる
高台の風寛やかに暮暮参

大工 静子

死亡欄先に見ている僕も齡
デパートで妻はたのしく迷ってる

大阪市

塩田 新一郎

孫の風とり上げ本気で上げている

大型がほしい晦日の冷蔵庫

鳥取県

福田 あや子

せい一杯生きてあしたを明るくす
豊漁はサンマのすだれ熊野浦

鳥取県

福田 あや子

せい一杯生きてあしたを明るくす
豊漁はサンマのすだれ熊野浦

なずな打つ音しんしんと老夫婦
役付の名刺を養子そつとくれ

守口市

中原 好恵

ウインドに写る老醜にちとあわて
老醜に気づいてからは臆病に

守口市

中原 好恵

ウインドに写る老醜にちとあわて
老醜に気づいてからは臆病に

何十年おんなじ鍋がある実家
親になるくせに親に頼りきり

鳥取県

羽津川 公乃

どん底で見上げた空が青く澄み
學歷を威張る賀状へ誤字ばかり

鳥取県

羽津川 公乃

どん底で見上げた空が青く澄み
學歷を威張る賀状へ誤字ばかり

本日終了スナック今朝もねむってる
一芸におぼれ偏屈者で生き

大阪市

田中 節子

孫が来て帰ったあとは大掃除
雪降ってやっと正月らしくなり

大阪市

田中 節子

孫が来て帰ったあとは大掃除
雪降ってやっと正月らしくなり

湯上りをすぐに寝られる幸せさ
地球の影に入り行く月の冴えざえと

大阪市

松尾 柳右子

欠航もあって淋しい隠岐の島
交替の総理アメリカに行くコース

大阪市

松尾 柳右子

欠航もあって淋しい隠岐の島
交替の総理アメリカに行くコース

どの部屋もにらみかせてカレンダー
家康の出番のような年となり

大阪市

権安 達一郎

おしゃべりはさんまの煙路地をぬけ
六十路きて打込む趣味のありがたさ

大阪市

権安 達一郎

おしゃべりはさんまの煙路地をぬけ
六十路きて打込む趣味のありがたさ

ロボットも組合造ると言い出した
そうだった難問とける風呂の中

唐津市

前田 廣幸

アメリカの評価気にする予算案
石油を浪費しながら平和祭

唐津市

前田 廣幸

アメリカの評価気にする予算案
石油を浪費しながら平和祭

不景気でグラフも蟹の這える幅
経営者でなくて良かった年の暮れ

和歌山県

寺田 裕美

孫揃い騒いで食べて三ヶ日
貧でよし家内に溝のない生活

和歌山県

寺田 裕美

孫揃い騒いで食べて三ヶ日
貧でよし家内に溝のない生活

停年のない鯀がある有難さ
ひとりぼっちの島が汽笛を待っている

和歌山県

北浜 二郎

花等は知らずに季節教えられ
八十の恋路をはばむ孫がいる

大阪市

白石 潔

鳥取市

湯邨 色舞

鳥取市

湯邨 色舞

鳥取市

湯邨 色舞

鳥根県

堀江 百代

鳥根県

堀江 百代

倉吉市

今村 夕路

倉吉市

今村 夕路

八尾市

椎尾 公子

八尾市

椎尾 公子

鳥根県

岩田 三和

鳥根県

岩田 三和

岡山県

石黒 若恵

岡山県

石黒 若恵

高知県

山下 登舟

高知県

山下 登舟

高知県

山下 登舟

高知県

山下 登舟

高知県

山下 登舟

高知県

山下 登舟

高知県

山下 登舟

高知県

山下 登舟

高知県

山下 登舟

高知県

山下 登舟

岡山県 池田 半仙
大胆な子には期待と不安抱き
ゲートボール老いもズツクの靴になる

島根県 田中 ヒデ子
都合のいい時だけ若く見てくれる
日蝕は細まる程に見上げられ

吹田市 西岡 豊
宴会も個性が咲いて盛り上がる
異動時期うわさを胸におどてる

島根県 藤原 鈴江
苦の果てに夫に合せる琴を弾く
親子孫唄って踊って年忘れ

今治市 八塚 三五島
アル中になって社長が会長に
鬘まで剥がれマネキン丸裸

島根県 大浦 ふみ
雪中の千両一本目にしみる
暖冬を一夜の吹雪塗り変える

尾鷲市 渡辺 伊津志
虚栄心くすぐっているコマシヤル
追いついた敵に愛想振りまかれ

岡山市 原田 凡太郎
妻がまた安全主義の旗を振り
気にはせぬ苦の噂へ吐の虫

大阪市 山脇 正之
二言目面倒臭いが彼の癖

月仰ぐ心のゆとり取戻し
大阪府 朝倉 利義
すれ違う年寄り互いに齢のぞく
戦争の影が離れず義手うずく

大和郡山市 岡田 すみれ
みちのくに雪の訪れ夢運び
時節柄葱も空飛び送られる

大阪市 山本 炉齊
師の影は老後の今も忘れない
新年の祝詞は毎年同じ事

米子市 宮本 佳女男
去年の悔い抱いて新春奮起する
道楽に花を咲かせている余生

守口市 長谷川 司
セコ蟹の味に釣られて雪かぶる
味素朴矢がすり櫛のわんこそば

橿原市 西本 保夫
ここからはひとりになりたいもう定年
このあとはまかしておきますもう定年

藤井寺市 赤木 奈々(7歳)
オルガンのおとにあわせてドレミファソ
クレヨンでじょうずにかけたママのかお

作者 不詳
ポスターが気に入りましたもやって来た

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

河内 天笑

仲のいい夫婦ばかりの動物園

藤田 泰子

動物園へ行ったらチンパンジー、オランウータン、象、サイ、ライオン、パンダなどなどみな仲のよさそうなカップルばかりだ。作者の目にもそう写つたに違いない。アフリカのオアシス界隈だと選ぶ権利もあつたらうに……。好かんと別れて暮したいと考えているカバが居るかも知れません。もし或る日動物たちの意志が分るような道具が出来たらびつくりするかも知れませんぞ。

出墨の夫へ妻のバント紙

矢野 佳雲

念願の係長に昇進したか当世流の脱サラで小さなブティックを開店したのか。わが夫は陽の当たるところに出た。じつとして居れないほど奥さんはうれしけれど、ここで余りはしやぐとろくな事はない。然しこの奥さんは違つ。必ずこのチャンスをもノにする心構え

が出来ている。絶妙のバントをしてください。酔っている妻がリードをするダンス

清水 康恵

いやいややと言いながらも妻のリードするダンスにけなげにもついて行つて夫君の姿が何ともほえましい。でも踊っているとちよつと上気した今夜の妻がとても可愛いくなつてきた。「もう一曲踊ろか」などといった間にか夫君がリードをしている。幸せいはいのカップルに拍手を。

あきかんが一つころがり町静か

山田 久子

お寺の鐘の音がきこえてきたのでも、遠い汽笛がボーと風にのつて来たのでもない。あき缶のころがって来たあの音に作者はしずけさを感じて詩が生まれた。同じ静けさの詩でも小道具ひとつ違つと何か肌寒さすら感じさせる。あき缶の威力である。やがて町は人と車でざわめく事だろうが風の前の静けさとも言うか、この句にはフラックユーモア的な含みもあつて興味深い。

ドレミファソどれが甘いかつるし柿

西岡 豊

お正月に家で食べるほどのつるし柿を軒先につるしてある。そのむこうには初冬の澄んだ青空がひろがっている。かすかに揺れるつるし柿をみているとそれは五線譜にひっかかったオタマジャクシに見えて来た。ドレミファの「ドレ」とどれが甘いかの「どれ」がうまい具合にいいリズムをつくり出している。軽快なる佳句。

この人が電話の声の主でした

武田 照子

電話局で聞いたらいま日本全国にざつと四千万台強の電話があるそうです。相手がどんな人が判らなくても電話だけで済む事が多い。この句の場合もこれまで電話で済んでいたものが会わねばならない用事が出来た。電話の声から推していただきたいイメージは持っていたもののさてご対面という事になってこの句が出来た。現代生活のワンカットとして共感出来る。

同じ音聞いて平和な日が暮れる

角野かず子

ベランダで家族構成見分けれ

佐藤美代子

秋晴れににくにくもきりん草

葛 幸子

守れない規則作つてもめている

寺田 裕美

欺された話ばかりをするマダム

片上 明水

蛍光灯一つ点滅店はひま

丸山よし津

母キトク新幹線のおせい事

岩田 三和

善人の足の裏から春がくる

松本はるみ

こめかみをともに抜けるからつ風

奥山美智子

母のやさしさ父のきびしさ海が好き

伊藤 春子

句評リレー

両川 洋々 〈鳥取市〉

林 瑞枝 〈米子市〉

林 野甦光 〈呉市〉

弘津 柳慶 〈柳井市〉

磨いたら昔が光る銀の匙

川口 弘生

洋々―メルヘンチックな句仕立てなので、作者が弘生さんと言うのがアンバランスな感じさえしました（ゴメンナサイ）。この句の生命は「昔が光る」にあつて、過去の栄光のすべてがここに凝縮されていると見た。

瑞枝―句の「昔が光る」は同感です。マンネリ化した家庭生活も襖や畳をとり替へたりすると感じが変つて来ますね。新鮮な光を取り戻そうと銀の茶卓を磨いて見ましたが元の艶は戻りませんでした。だが人は生理的に下り坂になる頃から精神的に上り坂になると言

うから、もう振り返ることは止めて前向きに歩きましょうとは私の新春の所感です。

甦光―この句の生命はやはり「昔が光る」です。成功して裕福になった人の過去を探れば、そこは苦勞に耐えて来た道、その素晴らしい光が浮んで来る。そんな句ではないでしようか、でも一寸考え過ぎですか。

柳慶―銀製品は、しまつておくだけでも、銀独特の変色をしますが、手入れをすればきれいに変色はとれるそうです。御三方の言われたとおり「昔が光る」がこの句の生命で、過去の業績が、磨き上げるたびに光つて来ると、銀の匙に持つて来た処に、この句が生きてきたと見るべきでしょう。

洋々―四者四様に「昔が光る」の中七が、この句の命であると断定された事により、ト

ツバッターである私の眼に狂いはなかったと喜んでます。瑞枝さんの多様な解釈と所感へ拍手を送りたい。

瑞枝―皆様の句評を聞き成程とよく解り佳句と思います。川柳は巡る季節と共に夢は眠らんで年毎に若くなり、そして既成の句が年々色あせて見えるから不思議だ。御年齢にかかわらず新鮮な句の魅力に私はひかれる。

甦光―先ず皆様の御指摘通りに「昔が光る」でこの句が生かされてるようです。それに何か底光りのする麗わしさ上品さがこの句からうかがえるようです。

柳慶―毎日使っている銀の匙も、使えばなしでは銀の光は変色のままです。ここで、皆さんが指摘されたように、「昔が光る」でこの句が生かされ、そこに、人の過去にむすびつけた。何んでもないような句ですが、共感をえた句となっている。

単身赴任料理番組なども見る

野田 素身郎

洋々―男のベソソスが漂う、なんともわびしい句ではないか。単身赴任など一度も経験のない私には、その淋しさや孤独感は想像も

つかないが、逆に妻の目の届かぬ赴任地で、郷土料理のテレビでも見ながら地酒をチビリチビリとやっているとも解釈できる。やっぱり作者の狙いは前者か？

瑞枝―最近「男の料理」の本も出回って多彩ですが、子供の進学事情などで已むを得ず単身赴任を強いられるエリート社員、遠いわが家の灯を恋いながら、そんな番組を眺めて外食をなさっている御姿と、ひとり暮らしの気楽さも感じられ素敵です。

魅光―他の批評者と全く同感です。全部前者の方々が言い尽くされていて別に差入れる余地はありません。単身赴任者の手持ち無沙汰が目に見えるようで、軽くまとまりのいい句になったと思います。

柳慶―単身赴任者の無聊さからテレビの劇物、ニュースを見ながら、家族と一緒に時は見もしない料理番組も見ると言う。実感句。

洋々―句評が一巡したら魅光さんがおっしゃるように「前者が言い尽したので、差入る余地が全くない」となると、この句の底の意外と浅いと言いつける。同じ素材でも、もつと素身郎さんなら広がりのある句ができるはずだと確信しています。

瑞枝―川柳とはこんなものですネとよう解った惻巧そんな事を言って大言壮語して見て

も、じゃああなた作句して御覧と言われても作れないもので、人間は言葉を持っている。文字を持つている。言葉や文字に依る表現をどちらが真実かと受けとるか、説明に終らないよう想いこそ川柳です。せっかちで功をあせり過ぎないようになりたいものである。

魅光―料理番組なども見る、だから勿論他の番組も見。つまり会社から帰るともうテレビだけに頼り自分の時間をつぶすと言うふうにもとれる。何か洋々さんの言われるそのわびしさ孤独さ、その様子を作者はうまく穿ちの効いた句にまとめてあると思いたい。

柳慶―この句「なども」で生きた。単身赴任者の手持ち無沙汰の、寂しさが沁々とつたわって来る。「前者が言い尽したので、差入る余地がない」となると、この句は浅いと洋々さんは評されていますが、「余地がない」ほど皆さんの共感を得た実感句となつて、いいのではないでしようか。

人様の苦手な職で金儲け

奥谷弘朗

洋々―金儲けの秘訣はこれだと教えれば、皆が皆、なーんだと言うに違いない。儲ける

奴はそれを迷わず実行に移せる人なのだ。難解句だ、やれ消化不良の句だとかが多い近頃、一切の説明抜きでも笑えるこんな川柳があつても良いのではなからうか。

瑞枝―オーソドックスな古川柳の感じで全く同感ですが、句評は難しい。職業に貴賤はございませんし、猪が豚より勝れていることもなく、商いはまさに戦いで人並では儲かりませんね。撲たれても「私を撲って心が暗れるならいくらでも」と言う位に胸を張り。米子でも鶴の目、鷹の目で大型店の進出が鎬をけすり、新しいアイデアで猪に乗って堂々と天翔けろと叫びたい……。

魅光―弘朗さんの句にしてはやや物足りなさを感じる。昔から金儲けは人のやれない事又は人の嫌がる事などよく言われている事です、そのまますを句に纏めたような気がしてならない。それに少し句の古さも気にかかる。

柳慶―魅光さんが、句の古さが気にかかると言われているが、人様の苦手とした処に、この句が生きて来た。最近表現の新しい句を見て、はて何をうったえているのか？と首をかしげることがあるが、この句はすんなり意味がとける処がいいのではないでしようか。

洋々―魅光さんご指摘の句の古さと物足りなさは、きつと下五の使い方のまずさからで

しょう。中七を生かしての下五に一考の余地ありと思うのだが……。

瑞枝―年季のサビが光っているような句とも思いますが、日進月歩の時代なら尚更に俳句も川柳も、思想も百年経ったら橋もパイパスも変わるように、昨日の考えはもう古いと、どんだん作り替えて別に新たに考えなければいけないと思う私です。

甦光―中七の苦手がこの句の生命と思われるが、柳慶さんと洋々さんに指摘されてみて成程と思われる点があり勉強になりました。句全体から見ても多少ユーモアも感じられるようです。

柳慶―瑞枝さんの言われるように、昨日の考えはもう古い、どんだん作り替えて、別に新たに考えなければ、ごもつともです。しかしこの句は、古いとは私は思いません。洋々さんの言われるように、下五に一考の余地があったかも知れませんね。

一度目はとてもやさしく起こされる

江口 度

洋々―川柳で日常分かり切った行為や行動を説明する必要はさらに無く、日記川柳、報

告川柳ではないこの句から、詩性もドラマ性も新しい発見や驚きも全々感じませんが、皆さんはいかがでしょうか。

瑞枝―ごもつとも。「ねえ一寸起きて下さいな」「七時になりますよ」「遅れるわよ」その内、遂には蒲団まで……情景が連想され楽しくなる句。「一度だけですかねえ、恐い奥様」とは甘ったれ亭主の独り言。

洋々さんはもしかしたら奥様を起こす方じやないでしょうね。失礼。川柳は日常の身近なものから始まると思うのですが如何でしょう。

甦光―一度目はとても「とても」が女心の特にやさしさが出ていると思うが、そのあと二度目からとてもきつく厳しく叩き起こされるような不安な気がする。然し愉快な句だと思えますが如何。

柳慶―瑞枝さん、甦光さんの言われる通りで、とてもやさしく、がきいているが、ありふれた実想句。

洋々―この句は今も私が毎日進行型で体験中の句なので、その句意は痛いほど分かるのだが、句としての鮮度はかなり落ちるし、この着想は過去の作家達があまりにも多く詠んでおり、手垢にまみれ過ぎた作品だと思えます。

瑞枝―要は作品の作者の想いの深さこそ大切なもので決してお説教や格言めいたものはありません。本当の生きた言葉とは何か、より人間らしい人間と言うことを信条として句評は句主の気持を大切に解釈して差し上げねばと思いますが、もう少しの詩性ある抒情が欲しいですね。

甦光―前に私が書いたように「とても」がよく効いていて二度目は叩き起こされるような不安な句ですが、私は面白い句だと思いました。ただ洋々さんの言われるようにこれに似た句が過去において多く作られていた事も事実で、残念な気がします。

柳慶―「とてもやさしく」がきいている。どこにでもある日常茶番劇を、すなおに句にされていて好感のもてる句。

弔問は寿限無寿限無と言うに似て

西森 花村

洋々―私が落語の寿限無を丸暗記したのが小学五年の時、まさかその寿限無と川柳の中で出逢おうとは夢にも思わなかった。弔問あいさつと寿限無がどうしても私の中で結びつかなくて、頭を悩ませているところなのです。

今すこし皆さんの寸評拝見と致します。

瑞枝―弔問の悲しい時は、生前の想い出が胸につかえて、ありきたりのご挨拶は出来なくて、涙と共に「ごも」と言っちゃう。落語には威張った人は出て来ないし庶民性があり好きで聞いています。この句には漂うペーソスと穿ちが効いていてびつたりの佳句と思う。「どうもどうも」とか、「まあまあ」「やあやあ」で片付ける日本人の曖昧な世渡りは嫌です。

魁光―弔問である以上楽しいとは言えないが然し面白い句である。寿限無とは落語では聞いた事はあるが川柳に取入れられたのを見たのは私も初めてです。経文から取入れた句の様だが所謂言葉を誇張しただけのようで、瑞枝さんの言われる「まあまあ」とか「どうもどうも」と言う事ではないでしようか。

柳慶―寿限無寿限無、ごころのすり切れ、うんぎよ松の、ふうらい松と、長たらしい名前をつけた落語から取った句で、瑞枝さん、魁光さんの言われるように、弔問者の口の中で「このたびは」うやむやと、後がわからないあいさつをひにくった句。

洋々―一巡した皆さんの寸評を拝見して、私なりのこの句に対するアウトラインは描けましたが、言葉の突飛さに比べて今一つ内容

が乏しいのはどうした訳だろうか。単に寿限無と言う言葉に振り回されている気がして仕方がない。

瑞枝―独自のセンスで近頃見当らないユーモアが嬉しい佳句と鑑賞しました。「喪服の女性は何故美しいか」とある男性曰く、ぐつとこみ上げる涙腺を刺戟させて「こは涙して泣くべきところだわ」とばかりほろほろと頬の辺りを濡らし頭の下げっこのくり返し、相手の反応を確めて心の底から悲劇のヒロインを演ずる女優の美しさを意識すると言うのですが如何。

魁光―内容の乏しさは否めないようですがこんな突飛さや笑いの句もたまにはあっていいような気もします。寂しい悲しい句はいやですから。

柳慶―再読して、弔問者の長たらしい、つけたしの挨拶を、落語の寿限無をもって来た、ひにくな句と受け取め、寿限無が生きて来たと思います。

歌ひとつ知ってるだけの自信だよ

那 須 鎮 彦

洋々―音痴の私にとって、うらやましい限

りの句だが、上五の「歌ひとつ」を他の言葉たとえば「恋ひとつ」や「逃げ道を」に置き替えてもけっこう通用する、いわば「流れる句」となった分だけ句意は弱くなったと思う。

瑞枝―何か私に似てるような。今年の新年会はこれだよ、唄をひとつだけ娘に習い、やつと指名に答えて唄ったら「奥さんはお唄がお上手で羨ましいわね」とのお世辞に穴に入りたい思い。歌のひとつでも自信さえて持たたらこ立派ではないでしょうか。世の中は度胸を大きく持ちましようね。

魁光―私も歌が好きで或る程度の自信のようなものもあるが、と言っては可笑しいが、宴会などでよく歌われるのでこの句の意も通じる所があるが洋々さんの言われるように句の弱さも否定出来ないようです。ただ下五の「自信だよ」と言う所にすくいがあるようです。

柳慶―カラオケブームで、歌の一つ位は知っておらねば恥をかく、自慢の歌が一つあるいつでも指名しろと言う自信があると云う句ですが、洋々さんの言われるように弱々しい。むしろ「カラオケへ自信の歌が一つあり」位にした方が。

洋々―確かに下五がこの句の救いではあるが、上五の弱さと相殺されて、句評リレーの

鑑賞に耐えうる秀句とならなかったと言え、すこし言い過ぎだろうか。

瑞枝―肩が凝らずに鑑賞出来る作品です。

この頃の新しい型の難解句をケシカラン派とばかりに青筋をたてて警鐘を打ち鳴らす御仁がいっぱいいますが、それは解らない迄も解ろうとする努力は大切と思います。ただどんなでたらめを言っても絶対に人を傷つける言葉は使わないことです。

甦光―動く句と言うか流れる句と言うか、私にはあまり強くは感じませんが、やはり弱い句には成ってるようです。確かに近頃の句のように、これでも川柳だろうかと思われる一人よがりの難解句もどうかと思われすが、

柳慶―瑞枝さんの言われるように、難解句はケシカランと青筋をたてて解ろうとしない、と御指摘ごもっともです。難解句はケシカランとは思っていませんが、甦光さんの言われるように、一人よがりの句はどうかと思えます。さてこの句、初めに言ったように何かわかりにくいのでは。

暦にはない祝日を一人抱く

寺 沢 みどり

洋々―暦にはない作者一人だけの祝日だから、余計うれしさがあふれているのが分かる。

しかし、下五の「一人抱く」がすこしばかり気掛りで、ご主人にも内緒の祝日とはどんな祝日なのかと、他人事ながら気もめることにもめること。今回拝見させていただいた七句の中で、いちばん胸にくだる作品でした。

瑞枝―洋々様はみど里さんのご主人のお亡くなりをご存じないらしい。ご主人とのご追憶でしょうか、わが子の知らない二人だけの思い出の世界があった。さらりとした佳句です。私は、亡父の生前の言葉をよく憶えていて、想い出としては老母へお話をすると「お父様はそんな事言うてたの」と喜んでくれます。人は誰も胸に心の世界があり、いい思い出だけを温めましょう。

甦光―祝日とあるから何かの記念日でしよう。他人に報告するまでもないような結婚記念日か、又はお子さんの誕生日か、瑞枝さんの句評によるとおそらく前者でしょう。女らしさのしみじみとした佳句だと思います。

柳慶―自分達だけの記念日で、「一人抱く」は御主人のいない、寂しい大切な記念日で、仏壇へ線香でも上げてお祈りをしながら、心寂しい思い出の記念日を迎えられた事でしよう。

洋々―瑞枝さん、そして作者のみど里さん、すみませんでした。みど里さんのご主人がお亡くなりになった由。この事実を頭に置いてこの句を読むと、ますますこの句が重厚さと輝きを増して来ました。前回は何気なく味わった「一人抱く」に、残された妻の淋しき悲しさがあふれています。

瑞枝―川柳は誰かや何かを指して詠うのではなく、貴女自身の哀しみは哀しみのままに、喜びは喜びのままに、本音は決して残酷ではありません。それを自覚しているところに美があると信じています。みど里さん、一緒にそんな事を考えて作りましょう。人生の残り時間はそう多くはない、悔いなく枯れる為に精一杯言い尽くせるものがあるならば句にして置きたいと私は考えています。

甦光―中七の「祝日を」で句としての寂しさをあまり感じませんが、ご本人の思い出の日として感無量のいい作品に成ったと思います。

柳慶―みなさんの句評につきます。御主人をなくされたみど里さんの感情がよくわかります。

■「句評リレー」、ご好評を頂いておりますが、一応本号を以て終らせて頂きます。ご執筆をお願いした皆様ありがとうございました。



行・紀・治・宇

代 千 木 八

風花の舞う奈良駅ホームで栗先生と出逢えたことを序幕とするならばその次、黄檗山万福寺へ着き、ここは中国か?と総門を見上げカメラを向けているとき、さわやかな声を掛けながら、まっすぐに門内からの登場は、東野大八、橘高薫風の両先生。このところのタイミングは仕組まれた舞台よりも狂いがなくまさに名優の吐吸そのものであった。一月十四日、川柳塔主幹披露の会の前日のことである。

直原玉青画伯の紹介状を持たれた薫風先生のおかげで、鉄筋コンクリート三階建ての宝蔵は開けて頂くことが出来た。いよいよ鉄眼禅師の悲願に成った一切経の板木との対面が始まった。

花びらのモザイクに見ゆ経の文字 薫風
六万枚の裏表にびっしり彫りこまれた仏教

の經典のすべては美しくおそろしかった。

ひたに刷る経木一枚 五十年 大八

万巻の版木刷り師の寒帯 大八

この寒中に火鉢ひとつ置かずに五十年間、刷りつづけてきた井田さんと大八先生の対話そのやりとりの気魄に、私はその場に蹲まつてしまった。一切経刊行を独力でしとげた鉄眼禅師は、今もこの黒い森のような収蔵棚にひそんで在すのではなからうか。

のしかかる黒き版木の底の虫 大八

過去も現在もない刻が過ぎていった。

さすがは黄檗禅の総本山、説明して下さった役僧に経のこころは如何、靴の紐の所以はと矢継ぎ早に問答をしかけられて去りもならず、ここでも大八先生、あの太い眉を若々しく上げて禅問答の一こま。神経、心、動く、など、今までなにげなく使っていた語のみなもとを教示しただけなのは取獲だった。すべて中国式の万福寺の伽藍を廻るころのうららかさは、浄土とは今のこのことかと。しかも、栗・大八・薫風、三先生に従いて歩く、勿体ない仏縁を享けたものである。有難や。

有縁のまん中に椿が咲いている 千代

普茶とは、茶におもむくという意味だそう。蘭の花の浮んだ澄子（スメ）からはじまる白雲庵の普茶料理、般若湯も少々。

普茶料理 大言壮語出来かねる 薫風

またしても話題は版木の感銘と禅問答に戻りたがる。隠元禅師により明から伝えられた精進料理は、それは結構な風味だった。それとお庭の乙女椿。こうしてこの椿は私の眼の

の中にいつまでも咲きつづけることになる。

宇治川の左岸にある平等院。源融の別荘を

宇多天皇、六条家と伝領。藤原道長が買い、

その子頼通が極楽浄土をこの世に現出ししうと寺に造営した、その名も平等院。

だいこくの春藩の筆の集印帖 栗

集印帖にも「栗土」と書かれてあった。

以仁王を奉じて平氏に立向った老将源頼政が軍扇を敷いて自害した扇の芝、阿字池に影を落す鳳凰堂、その中には、蓮華八重座に坐す丈六の阿弥陀如来像、四面の壁の長押には五十一体の雲中供養菩薩、すべて国宝。十円硬貨で知られる鳳凰堂の翼をひろげたような善美な姿。今日の浄土はなお続いて、鐘楼で順に鐘を撞く。宇治の川風にどこまでも流れて行くようだった。

鐘鳴らすいつも一つの祈りごと 千代

日本の三名鐘は三井寺、神護寺、平等院（このあたり、薫風先生の受売り）

埋れ木の花咲くこともなかりしに

身のなる果はあわれなりけり

頼政の墓にはいつぱいの黄菊白菊。老武者の心情へ跡を弔う人が絶えぬのであろうか。

こうして再度詣でたことも他生の縁だろう。境内をめぐる終えるころは、陽も弱々と冷から冷えてきて、そのことがなんともふさわしい大気の移り工合であった。

紅一点千代という名のめでたけれ 栗

身に余りある即吟を頂いたのさえ、夢の世の中であつた。神さま、ほとけさま。ありがとう。ほんとに有難う。

愛染帖

橘高薫風選

島根県 木村 はじめ
 元日の朝元日の音がする
 妻がいる子がいる今日の向い風
 汚職など無縁女房は大根煮る
 空岡市 木山 遠二
 隣席の客と親しく富士を見る
 賀状来ず或いはと齡繰ってみる
 大阪市 小出 智子
 失敗でふくらんでゆく雪だるま
 言い残すことを毎日いうている
 吹田市 横山 青果
 今年も平和杜頭の梅が咲き
 落石に注意ここらも大阪府
 大阪市 江城 修史
 網膜に貧しき島古里よ
 猪突猛進首相いくさの過去を持つ
 島根県 堀江 正朗
 嫁さんの声ころころと受話器から
 うまそうに湯豆腐煮える音がして
 島根県 小砂 白汀
 春闘へ旗をふるふる桃さくら

半円を描いたところで芯が折れ
 兵庫県 野々口 悠也
 老いらくの炎に似てる夕の映え
 わが庭の狸と話す老いが閑
 栗市 高橋 千万子
 孝行の話を寄席できいて来る
 思い出は語らずナツメロ聞く夫婦
 今治市 月原 宵明
 正月の丸ビル昼の月遊ぶ
 喋ちてゆく女が耐えるコップ酒
 伊丹市 榎谷 寿馬
 緋の袴あかく映して神の池
 七草や徒然草を読みましたえり
 寝屋川市 宮尾 あいき
 福笹の鯛も小判へ媚ている
 壺の梅咲いて老いの城匂う
 豊中市 田中正三
 カルテ書くペンの動きをじつと見る
 藤膳のように病食置かれてる
 和歌山市 中尾 まゆみ
 水平線のむこうにきつと春の道
 意地すこしゆるめてからの涙かな
 名古屋市 藤井 高子
 劇的な春など持たず野の草で
 洒落一つ命をかけて吐く時も
 富田林市 中村 優
 梅一輪一輪ごとに窓の絵馬
 月光へ甘い言葉を呉れる易
 浜田市 佐々木 裕
 旅の湯の女髪まで浸したり
 朝寝妻金儲けする顔がある

来子市 寺沢 みど里
 冬海それでも島の灯が誘う
 満ち足りた日々只今へ掌を合わす
 京都市 松川 杜的
 元旦や孫の君が代聞いてやる
 ゆっくりと歩いてみるもよし大晦日
 貝塚市 行天 千代
 小春日よ今日はお墓へ会いに行こ
 お湯割りの外は粉雪降りしきる
 松原市 佐藤 藤子
 眩しくも娘は十八の春にいる
 西宮市 林 はつ絵
 ひとひらの欲も持たない春の雪
 ぼろ市で根掛けの玉の昼のゆめ
 毒舌の半分の血は淋しがる
 奈良県 村上 春巳
 捨て台詞一夜が明けた阿呆らしさ
 酔いざめのコーヒーひとりで聞くタンゴ
 岡山市 川端 柳子
 パン一枚何時もの通りがよい朝餉
 三人の老婆に共通点探す
 岡山県 土居 耕花
 冬の天ぼろぼろ涙こぼしそ
 よう咳をする男だと散髪屋
 唐津市 久保 正敏
 国難をひょうきん族に委されぬ
 ほつといてとほつておけないように言う
 岸和田市 福島 せつ子
 満ち足りて餅の始末に四苦八苦
 ポケットの小銭みな入れ慈善鍋
 大阪府 坂口 公子

尻尾振ることを知らない猪の湯
人間が牙をむいてるばたん鍋

吹田市 西岡

豊

屋台からからっぽの顔めつと出た
灰皿に己の鬱をねじりつぶす

鳥取県 清水

保

酒という味方も僕を問い詰める

島根県 堀

江

貧しさのおかげ倒産せすに済み

鳥取県 鈴木

村

食うものに非ずザボン是想うもの

鳥取県 堀

江

ていねいに眼鏡拭くとき風を聴く

鳥取市 武田

帆

初詣唯今無冠と言うお辞儀

仙台市 川村

映

廃船を労わるようによせる波

旭川市 朝倉

大

定退を言わず妻盛る飯茶碗

熊本市 紅葉山

巨

一円のつり銭もらうあったかさ

岡山市 原田

凡

落ちぶれて言うことみんな嘘にされ

倉吉市 奥谷

弘

どん底に居ても一と味違う奴

米子市 小西

雄

片腕の左膳身障者と言わず

東大阪市 市場

没

老害という親しめる字に出逢う

寝屋川市 柴田

英

福笹の擦れ合う音で福を呼ぶ

叱ってはいてもつきつき肩車

鳥取市 河村

満

雪の中亡びゆくものみな光る

高知市 西川

富

大砲はとしよりなどを吹っ飛ばし

青森市 工藤

甲

鐘を撞くたつたひとつの祈りごと

米子市 八木

千

春ですよかけ声かけて芽も伸びる

和歌山市 西山

幸

飢えつのるひとりよがりの絵を描いて

大阪市 朝倉

利

往年のスターも老いて安堵する

出雲市 園山

多

罪一つ捨てるためらい曲り角

八戸市 島田

昭

彼も人僕も人だと思っても

名古屋市 越村

枯

満身創痍終着駅は霧の中

和歌山市 浦野

和

裸身に失うもののない強さ

唐津市 神崎

紫

大いなる水車憩えり飛驒の里

唐津市 浜本

久

辞世でも書いて置こうか八十二

平田市 久家

代

機械化になろうと鉄は錆させぬ

水戸市 上鈴木

春

暮の腕を父に誉めらるる里帰り

米子市 宮本

佳

人生の主治医は糟糠の妻だった

大阪市 中野

忠

通信簿係が正座で見せにくる

高知県 曽我部

佳

防衛費何か大きく叫びたい

高知県 竹内

紫

グレープフルーツ水平もよし酒垂らす

町田市 矢野

佳

スリ硝子の向うで何かしているよ

高槻市 田崎

素

新生児足裏の名の母と逢う

鳥取県 石井

雅

マイカーのライトが照らす立小便

大阪市 清水

康

よろい坂般若心経風に消え

橋本市 森脇

善

罪を抱き雪の白さが目に凍みる

高知県 赤川

菊

友の計の続く二月の冷えた街

宝塚市 吉田

笑

マスクして孫のお守りを命じられ

堺市 大道

美

絵本手に眠り童話の国へゆく

弘前市 真喜内

實

あのかたにあの花はころぶ気配する

松山市 谷

真

初光り白い四角な部屋ながら

富田林市 岩田

美

冬にひろげる私なりの大風呂敷

大阪市 神夏磯

道

沈丁花ことしの思いで待っている

西宮市 藤村 宏子
ストレスが溜ると海がみたくなる

島根県 榊原 秀子
呼びおこす記憶とこ薄れてる

豊中市 田中 淑子
川柳を理不尽を斬る剣とし

岸和田市 原 さよ子
腰据えて飲む気か上着脱いでいる

岡山県 直原 七面山
生くも血みどろ死ぬも血みどろ

西宮市 松本 一郎
孫達と八百長もあるカルタ取り

和泉市 岡井 やすお
伊勢詣りよりアメリカへ新総理

益田市 里本 たかし
女房が里本さんと追う街角

島根県 福岡 芳枝
極楽の正月喪中の台所

唐津市 仁部 四郎
廃品をまとめて気付く無駄づかい

富田林市 植松 慶子
黒髪の夫姑まし同い齡

唐津市 福島 フユ子
日めくりの最後をめぐり新春を待つ

奈良県 宮川 古都路
裸木に夕映えを撮る冬の山

倉敷市 藤井 春日
夜化粧の下に哀しい顔がある

唐津市 浜本 義美
一息を入れてラジオは又歌い

吹田市 井上 照子

譲られた席で鏡をそつと出し

唐津市 浜本 ちよ
叱られる孫をかばえぬやるせなさ

藤井寺市 赤木 和子
まだ蕾だからみんなが期待する

熊本市 有働 芳仙
シャンデリアアローンの暗い影を引き

鳥取県 林 露杖
左義長を囲む会話に刺がない

大阪市 藤森 小雅子
如月の月が冷たいひとにする

寝屋川市 平松 かすみ
メーカーヤップ講習受けて御卒業

鳥取県 福田 あや子
百態の亥突進する賀状

和歌山市 若宮 武雄
ジャンパーが俺の野性によく似合う

高知県 小沢 幸泉
子の病氣特效薬は夫婦愛

尼崎市 伊藤 春子
秋空の雲なつかしいプロフィール

尼崎市 田中 晴子
落日物戻って禍福がまだ続く

島根県 松本文子
どんな人だろう同姓同名よ

東大阪市 三宅 旭
物騒なもの飛ぶよ落ちるよご用心

西宮市 朝山 千世子
馬鹿陽気寒気に替わる泣き笑い

大阪市 松尾 柳石子
カニ囲む湯宿さける雪女

東大阪市 竹中 綾珠
タクシーに怒鳴られている千鳥足

豊中市 満仲 きく子
見守ってたずなゆるめて引締めて

高知県 松岡 三吉
仁王さま一度笑ってほしい新春

西宮市 津山 冬子
無学だが温い笑顔の母が好き

和泉市 西岡 洛醉
雑魚一匹俺は地球をかつ歩する

羽曳野市 吉川 寿美
喜劇とは人を罰する手で汚職

米子市 雑賀 美世
端役でも芸一すじに世を終える

★ 豊中市中桜塚三丁目13-15
投句先 千560 橘高薫風(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題「真似」 選者 橘高薫風

締切 3月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43 NHK

発表 大阪放送局 老後をたのしく係
3月27日(日) ラジオ第一放送

午前10時から

柳界展覧

(原稿締切毎月末)

集録・香川酔々

藤島 茶六氏(日川協)

菅原 一宇氏(宮城野)

宮本 紗光氏(青森)

越郷 黙朗氏(札幌)

賀波沢黙六氏(柳友会)

投句料千円(何組でも可)

20等まで賞あり。投句用紙

は原稿半載に住所氏名推号

明記。締切5月末。発表

「柳友」58年9月号。投句

先112東京都文京区小石川

5-30-1鈴木甘平全国誌

上大会係宛。

■第25周年川柳たましま川

柳大会

日時 5月22日(日)9時30分

会場 倉敷市玉島阿賀崎

玉島文化センター

兼題 叩く・幕・指紋・招

る・執念、各二句

会費 千五百円

■川柳高知春季川柳大会

日時 3月6日(日)10時30分

会場 高知市ハリマヤ町

兼題 すし柳本店

油・甘い・兄弟・丸

い・外出・風・日の

丸、席題1題各3句

会費 五百円

■名古屋川柳社50周年川柳

大会

日時 3月20日(日)午前10時

会場 葵会館(名古屋市内西

区那古野2・18那古

野小学校東)

兼題と選者 半世紀(鮮山)

減らず口(文彦)時効(幸

広)呼び捨て(麦舟)紅白

(初枝)希望(恵美子)知

らん顔(柳葉女)台詞(涼

史)アンコール(巨城)一

区切り(茶六)各二句

会費 千円

■前田美巳代句集へしづく

花/発刊記念川柳句会

日時 4月10日(日)10時30分

会場 姫路市民会館3F

(NHK鉄塔前)

兼題と選者 夜(智子)実

(千津子)婦(良子)打(秋

栄)餌(見也子)魔(新子)

各2句

会費 二千五百円

主催 川柳へ一枚の会

▽同人・柳友消息△

▼尼録之助氏の句碑建立十

句集も今秋発刊されとの

ことである。誠に嬉しいこ

とである。(堀江正朗氏・

芳子さん報)

▼57年松江藩傘年間優秀作

品に、堀江正朗氏作品

少しすつ耳から秋が濃ゆく

なり 園山多賀子さん作品

ロボットが人間くさいミス

をする が大賞に、竹内寿

美子さん作品

子に遺す血白きまま秋とな

る が大賞に選ばれた。

おめでとうございました。

▽書信拝受△

武雄、満津子、道子、明朗

酔夢、苔句、静水、登志代

ゆきを、松風、綾珠、洋子

日満、秀子、英子、みどり

あいき、静馬、竹馬、文衛

のみなさん方。なお1月12

日朝日新聞文化欄の川柳記

事について、宮尾みのりさ

んから、編集部宛はげまし

のお便りをいただいた。

▼浜田久米雄氏が、二月十

五日午前十時五十八分、心

筋梗塞のため死去、十六日

が営まれた。謹悼。

▽句会案内△

■菜の花句会

時・3月10日(木)夕6時

所・八尾神社境内西郷会館

題・葱、首、パチンコ、吹

く、こんにやく。

■南海電鉄川柳部

時・3月17日(木)夕6時

所・南海会館ビル電鉄本社

地下食堂

題・ワンマンカー、予約、

新空港。

■南大阪川柳会

時・3月19日(土)夕6時

所・寺田町高松会館

題・軽い、記憶、口紅、決

心。

■駒つなぎ川柳会

時・3月25日(月)夕6時

所・寺田町高松会館

題・待つ、盲点、奇抜、新

聞。

■東大阪川柳同好会

時・3月26日(土)夕6時

所・東大阪中央公民館2F

題・体重、電線、心臓、人

事。

第六回 全日本川柳大会参加と

十日の旅（八）

西尾 栞

人間万事塞翁が馬という故事がある。バスのストライキに遭つて、タクシーに已むを得ず乗ったのが今日の観光の最高の福の方であつた。

タクシーは先ず高館の前に止まって、ガラ坂を義経堂へと登った。ここは観光バスから除外されているところで、特別に車が回つてくれたのである。高館は、たかだて、はながんだて、又ほうがんだてとも呼ばれ、九郎判官義経の居城の跡であり、義経最後の地と伝えられている。義経堂には義経の木像が安置されていた。この台地より北上川の長流を眼下にして衣川を合せて南に流れていた。遙かに衣川の古戦場が一望に出来る高館であつた。高館案内のしおりの中に、ああ平泉という題で

花の都のおもかげ慕い

こころみちのく平泉
九郎義経安宅の関に

しのぶ静の舞扇

という一節があつて五番まで載つていた。義経堂の裏へ回つて、懐古に耽つていると、松林の中で、はや松蟬が淋しい声で鳴いていた。

そこを出発して平泉の中尊寺へと走る。曾て家内は、或るツアーで中尊寺へ来たことがあり、駐車場から金色堂までの往復のきついことを車の中で、しきりに話をしたが、車は心得たもので、横道の裏山をグングンと上つて金色堂の横へ着けてくれた。ここらが、タクシーに乗ったラッキーなところであつた。

五月雨の降り残してや光堂

有名な芭蕉の句のイメージで暗い金色堂を想像していたが、梅雨とは申せ、よく晴れた

今日の覆堂の中の金色堂は流石、国宝の貫禄を示して極楽浄土の善美を表わしていた。もっとも、芭蕉の時代は金色堂は覆堂もなく雨ざらしの光堂だったのかも知れない。

平泉の中尊寺は東北一の観光地であるだけに、参詣者は踵を接して旧覆堂、讃衡蔵、中尊寺本堂と、上ってくる人、下って行く人、団体さんと流石賑やかなものであつた。

良い具合に左右の土産物を眺め、ガラガラ坂を下つて、最後の石段を下りると、先刻のタクシーがチャーンと待つていてくれた。

それより毛越寺へと車が走る。この寺の呼名を、自分は最初、けごし寺と読み、次に、もつてつ寺と読んで、運転手に、もつてつ寺と訂正された時は、地名、人名の読み方の如何にむずかしいかを悟つた。

この寺は、かの有名な人口に膾炙されている、芭蕉の

夏草やつわものどもが夢の跡

の句碑のある寺で、本碑と副碑が二つ並んで建つていて、左の低い碑が芭蕉の真筆を刻んだものであるが既に風化も甚しく判読に止まり、それで、右の方へ、読み易く彫刻されて、文化三年に建てられたものである。毛越寺も仲々立派なお寺で、舞鶴ヶ池に今を盛りの、あやめが咲き揃う庭園もあつた。

毛越寺を發つて、巖美溪に着いた。沢山な団体が來ていて、溪谷の岩に老若男女が散らばっていた。メガホンを持った老人が、岩の上にある小屋の中から大きな声で人々に注意を与えていた。年々何十人かの人が、岩に足を滑らせて下の谿へ落ちて命を落すとのこと、この爺さんが見張番に立っているという。ここで大変喜ばせてくれたのは、この巖美なる谿をはさんで向うの茶店と一筋の綱で商売をしていることであつた。

即ち茶店と小屋との間に綱が一本渡されてその先に篋をつけて、その篋の中へ三〇〇円を入れて合図をすると、その篋はすると向う岸の茶店へ届いて、間もなく篋の中へ鉛や黄な粉の五本の串団子が紙函の中に入つて、

かえつてくる仕掛になつてゐた。それが珍らしくて、面白くて、自分も皆にならつて、三〇〇円を篋の中に入れた。

串団子谿を渡つた味となり

駐馬場に歸つて車に乗ろうとすると、良い案配に郵便局が見つかった。之は天の助けと早速とびこんだが、ここは宮城県のか、局員氏はニコニコとして判を押してくれた。先程の巖美溪という名が、貌鼻溪という名と間違え易く、はつきり憶えていなかったもので、件の郵便局で押してもらつた貯金帳を出してたしかめると、巖美郵便局という判があつたので、巖美溪ということを確認した。

タクシーを北仙台で別れて仙山線に乗り、今夜の宿泊地天童に出た。天童市は天童温泉のある所で、期待して下りたが、そんな氣配のない八階建の滝の湯ホテルという名の六階におさまつた。宿は団体客で遅くまで喧かましく、全く旅情も何もない阿呆みたいな泊りであつた。

団体と泊り合せた

老夫婦

ここに泊ることにした

川柳塔（追加）

大阪市 津守 柳伸

眼覚めればひとり電話の無表情
しあわせに酔うと戸惑うことばかり
御来光無念生駒の午前二時
白足袋を六足干して宵えびす
エプロンが似合うわたしのお元日
肩の荷を降ろす神苑初ポーズ

のは、この天童市に曾ての取引先の米屋さんがあつて、一度会つて久闊を温めたかつたからである。

宿から電話をすると、早速やつて來て、何かと昔話に花を咲かせた。

ここは有名な将棋の駒の産地であつたが、昼の市内見物をしなかつたので、そんな店を見ることが出来なかつたのは誠に残念であつた。それで出発間際になつて、宿の売店で、記念に黄楊の彫り駒を二箱買つて鞆の中に入れた。

売店で買うおみやげは時間ぎれ

（続く）

アメリカを覗く

< 6 >

山本規不風

サンフランシスコまでの刻

ホテルニューオタニに帰ったのが早かったので、今夜は故郷の味をと、ヤング達と共にリトル東京をブラつくことにした。寿司処「武久」の漢字が目映る。こんには、と入ると「イラッシャイ」と江戸前の歯切れのよい日本語だ。ゆつくりとした席に、純日本式にネタを並べて「うにがいいですか」等と早や日本に帰ったような気にさせる。美味しいものをみつろつて、次ぎ次ぎと気の効いた板さんだ。堂々たる体格と年頃も人柄もびつたりなので、貴方はマスターですか？ 彼ノウーと言う。武久とは繁昌する良名だから忙しいでしょう、と私。お蔭で、と彼。店名はボスが付けたのですが、繁昌する事が判るのですか？ 私イエース。彼 此処で店が持てるというのですが、日本人の多いリトル東京でも、殆んどオーナーは米国人です、日本人の資本で日本人がやっているのは30%位な

んですよ、数人の従業員共々に私達の事も鑑て下さい。私OKと言う訳で、幸運への希望と夢に花の咲く話で賑やかだ。

すると隣席のお客が私に話しかける。六月に東京から十人余りの易者が来て50ドルから三千六百ドルの高額をとって大変悪い評判でしたよ。私 易者でも悪いのばかりではありません許して上げて下さい、それなりの理由があったのだと思います。と名刺を出す。彼いや失礼を致しました貴方も易者でしたか、と名刺を頂く。「オリエント旅行社社長・赤嶺篤三」とある。彼 名刺だけで鑑定できますか？ 私OKです、と早速に彼の幼児の事からの過去、性格、病氣、事業の消長そして現在の体調、夫婦縁と女運全般の事を二分間て述べる。あまりの適中率に忽ち大先生扱いである。

その夜、赤嶺社長以下数名がホテルに來られてリトル東京に、色々の悩みを持つ人の為、一日を鑑定に奉仕して頂けないかとの依

頼であった。大変な熱意の懇願を心よくお受けする事にした。翌日はオリエント旅行社事務所に於て朝九時半より終日鑑定を奉仕して多くの人から喜びの声と感謝を受け思わぬ有意義の日を創る事が出来た。因みに赤嶺氏は当易学会のロスアンゼルス支部長を目ざして勉強と準備の最中であります。

覗く穴が横道に一寸外れましたが、サンフランシスコを覗きましよう。シスコ行きの朝コルは五時半と早いホテルでの朝食もそこそこロビーに集合六時半。抜けるような青空にご機嫌である。七時過ぎ空港到着。機が飛びたつたのは八時過ぎだ。シスコ迄は約一時間の予定。大平洋岸に添っての空の旅は上天氣に恵まれて快適そのもの。空から見る西海岸は大陸と大海をつなぐ陸線の変化が一つの線の中に様ざまの彩を見せているが日本の上空からの美しさの方が遙かに楽しい。

南シスコ九時半着。シスコの空港は総ての点にゆつたりとしたスペースが心を和ませる。どの国も画一化されている設計中に、シスコには面積の豊かさに南国ムードのニュアンスを程よくマッチさせているのが印象に残る。シスコのガイドは服部さん。今迄の中では一番若くて美しい女性で美声も楽しい。バスの座席が前から上中下と三段になっていて三列目の席まで前方がよく見えるようになってある。観光用サービスカーで心地よい。10号フリーウエーが活気ある工業地帯を抜けると30分ば

かりでシスコの街に入る。左手が太平洋で三
方海に囲まれていて昔のままの地形が残され
ていると言う。ロース市に比べると大変小さな
街で、東京都の山手線の内側位の広さでしょ
うと言う。人口も約65万と聞いて一寸意外で
あった。

シスコには今フットボールが一番盛んで野
球からのイメージが移りつつあるらしい。今
まで一番だったジャイアンツの6万人収容の
球場からアメリカンフットボールへと観客が
移動しているらしいとガイドの話である。キ
ヤンデルの丘を遠目に見てシビックセンタ
ーの広場を抜ける。ワシントンの国会議事堂と
同じような白い大きなドームの建物が「シテ
イホール」で、ひととき目を惹く高さは約100
メートル。シスコの行政の中心地で色々なイ
ベントが催される市民憩いの広場で公会堂は
八千人収容できる外、全米で最も古いオペラ
ハウスや図書館美術館等が集り、中央には美

しい芝生の広場があつてその地下には大きな
催し場が設備されている。ガイドの美声に耳
の休まる間がないが、少しもつるさいことが
ないのは不思議である。

シスコの街は意外に坂道が多い。日本では
坂の長崎と言うがシスコの方が坂が多い気が
する。又坂道だと思ふ間もなく美声が高くな
つて「サア皆さん来ましたよツインピーク
スです」これは又素晴らしい眺めである。シ
スコの街が一望出来る。180度の視界の中にス
ッポリとシスコを入れて時を忘れる飽きない
眺めである。「ツインピークス」は数ある丘
のうちでテレグラフヒルと共に自然が創作し
た展望台の双壁と言われ、276mの北丘と277m
の南丘がラクダの背のように、ふたつ並んで
いることから「ツインピークス」の名が付け
られたと言う。

絶景を左から順に見回すと、シスコで最も
高い52Fのビルを中心に、林立する高層ビル
が真ん中で左右に広がるカラフルな色彩がシスコ独特の落ち着
いた華やかさを表現している。

銀色に輝くベイ・ブリッジから
対岸のオークランドや、パーク
レイまで一望出来るのです。特
に夜景は、山、海、街の灯りの
バランスがとても美しく百万ド
ルのどこかの夜景とは別な素晴
らしさが旅情に艶を増しますよ、

新同人紹介 (三月から)

奥山美智子

— 紫香・水客・潮花・柳宏子推薦 —

是非私と一しよに如何でしょう。と奨められ
る。他に誰もいなかったらこの意味シンのお
誘いは、スグOKというところなんですがね。
シスコの観光はまだ金門橋、ゴールデンゲ
ートパーク、ケールブルカーのフランシスコ通り
「フィッシャーマンズウォーク」誇り高きマー
メード号の訪問。サンフランシスコのチャイ
ナタウン、異国に於ける異国情緒。他国に活
躍される日本の平和戦士の巣である日本人町
への訪れ等の予定で残念ながら許される時間
が足りない等と思ひながらゴールデンゲート
パークに向ふ。

(つづく)

尼崎・春の川柳大会

日時 3月20日(日) 12時30分

会場 尼崎市中央公民館

兼題

「絆」 紀市 郁栄選

「噂」 黒川 紫香選

「裁く」 北浦 牧郎選

「なまけ」 奥田 白虎選

「コロッケ」 伊東 静夢選

席題 二題・×切2時

会費 五百円(賞及び会報呈)

風 呂

板尾岳人選

お風呂屋で昨日の続きの話する
茶を出したばかりに長居風呂が冷め
女湯の方から政治けなす声
タオルから人情こぼれる露天風呂
名月をひとりじめして露天風呂
朝風呂に夫婦ではいる戸を閉める
はつとした風呂であくびをうつされる
銭湯に孤独の影を洗われる
女湯でいつもの顔ぶれよくしゃべり
ぬるいとは言えず湯冷めの貰い風呂
男だけだったと混浴から帰えり
香水を少し滴して仕舞風呂
露天風呂で月も一諸に湯につかり
惜しげなく見せて娘の湯がはねる
息とめて首までつかる朝の風呂
のんびりと約手落してしまひ風呂
一日の愚痴が一ぱい浮いた風呂
血圧を気にする長湯のぞかれる
湯加減がほくしてくれた胸の底
サウナ風呂有閑マダムになりました
長い風呂女の時間がそこにある
浮くもみ揺らしてつかる露天風呂
ドラム缶けっこう楽しい風呂でした

新妻の見るだけにする露天風呂
哀しみを流しとうせぬ仕舞風呂
商売にする人も居る風呂わかつ
仕舞風呂肩にとどかぬ湯に浸る
ぜい沢な汗はサウナに捨てて来る
この町に銭湯のない豊かさよ
入浴と知らず電話が呼んでいる
霧が来て妖精になる露天風呂
熱湯好きカンシヤク玉を持つ男
臆病な男で熱い風呂を逃げ
儲からぬ話が合うて風呂に酔い
仕舞風呂明日はどの手の垢流す
手をたたきや大阪の風呂水が出る
カラフルな風呂で次の手考える
風呂加減きかれ欠伸で返事する
初風呂に爪の先までほつとして
小さな嘘泡に包んで風呂に捨て
月影を千々に砕いて野天風呂
建て替えた一番風呂にほりこまれ
十二月十二日ああい湯だな
軸

箸

高橋幸代選

健康はなんでも美味しい箸になり
今年から孫も加えた祝箸
箸箱も添えて夫のランチジャー
京の旅一寸法師は箸のカイ
おみやげの南天箸が手頃な値
吉野杉箸へ変身したかおり
片ちびも捨てきれなくて夫婦箸
箸三本コッテさんへ願うごと
割箸は口で割つてる駅うどん
めし粒を器用にまいた握り箸
箸つけぬ病人食に気が疲れ
箸どうしけぬ箸興の安木箸
火を捉むことを忘れた金火箸
青い眼の在日五年箸さばき
その土地の民謡のせた箸袋
箸紙で唄を覚えて旅の宿
人間の末路は箸でつまれる
顔いてそれから箸はよく動き
外人にしてはと思う箸使い
箸おいて社長の唄へかしこまり
カラオケへ箸タクトにし酔っている
割箸で崩すが惜しい生造り
うどんやの割箸素直には割れぬ
割箸でつかむうどん逃げられぬ
宴席の乱れ空瓶叩く箸
寄せ鍋へ女の箸のしたたかさ
汽車弁の箸賑やかな女旅
二三日無言のままの夫婦箸
栄養価妻にまかせて動く箸

芳子 佳生 康恵 喜醉 与呂志 秀子 多賀子 規不風 やすお 里風 甲子郎 春日 泰子 どんたく 御前 悠泉 浪速子 佳雲 凡太郎 兼治郎 三吉 枯梢 敏 軒太楼 代仕男 花子 かすみ 雄々

影

櫻谷寿馬選

故郷に帰れば残してあった箸 博友
しあわせをつき合つて鍋の箸 はじめ
食いぞめの箸に花咲く奥座敷 木魚
また来ると箸を取らずに帰る母 天彦
骨拾う箸の軽さに消える夢 文平
夫婦 箸六十年の浮き沈み ちよ
人柄が箸の上げ下げにも解り 弘朗
箸袋集め旅路の夢たどる 美乙女
スマートへ腹七分目の箸を置き 米朝
通園の箸はこカチャカチャ楽しそう 比呂子
伸び盛り家計は知らぬ箸でよし 本蔭棒
俵は三度三度の箸が持て ひで
人
祝宴の箸のタクトに乗る校歌 大柏
地
蟹料理夫の箸は動かない 道子
天
左ぎつちよ幼い箸の自己主張 景子

制服の影も四角な歩きよう 重人
叱られている影までがしぼんでる 大柏
彩のない影絵演技にふれず置く 多賀子
忠実な影が私について来る 静歩
影法師の謀叛を見てる冬の月 たず子
密謀に影の恐怖が連鎖する 代仕男
スタスタの影にやさしい昼の月 景子
かげろうの影を見つめている孤独 道子
進学の灯りへ影もお付き合い 喜醉
宝石へ女の影が吸込まれ 花子
さすらいのガンマン長い影で去く 慶子
影法師だけは私を見捨てない テルミ
山焼きに浮く塔影が美しい 静子
影にまで問いかけている気の焦り 美乙女
傷心の影うなだれてついでくる 正敏
成人の暗着は影も嬉々として 右近
春の足影がだんだん温くうなり 与呂志
女はいつも許して影を泣いている 三吉
小犬にも弱気な影を見抜かれる 雄々
逆光の裸婦を上手に影写す 甲子郎
陽あたりの裏に素直な春の影 早苗
わが影にさみしい未来問うてみる 美穂
俯向いて歩けば影も肩落す 満津子
十字路で不安な影が折れて行き 佳生
雪辱へ耐える男の燃える影 胡頹子
幸せな影に満月明るすぎ だし
決断へ男の影はうごかない 久仁於
突つ走る男は影を置いてゆき 本蔭棒
影法師本人に似ぬ芸をみせ 四郎

影のある女が似合うカウンター 好恵
僕の影直下に踏んでいた真昼 里風
なぞの影さつと走った事故現場 保夫
善悪の影が心を奪い合う 悟郎
吾が心後より覗く影法師 優
影法師白髪見せずに老いてゆき 武水

影法師 同士は別な口を利く 佳
伸びきった冬至の影にうろたえる 武水
決断が影を大きいものにする 勝美
影絵はそばそ不遇の年を締めくくる 文平
ホラ吹きホラの影法師 枯梢
弘朗
人
車椅子やっぱり影も車椅子 利義
地
影武者に徹して自己の中に住み どんたく
天
影だからだまつてついて来てくれる 和子
軸
眼帯の奥で聴いてる梅の影

西尾榮主幹・理事長より

就任を記念して

運営基金

を拝受致しました

川柳塔社

初歩教室

題——心眼——

本田恵二朗

愛すれば心眼あかねの彩の雲
 (愛の心眼に茜の雲流れ)
 写経する筆に心眼湧えて来る
 (写経の筆先へ心眼湧えに湧え)
 老師目を閉じ心眼を開いてる
 (目を閉じて老師は心眼開いてる)
 沈思黙考心眼湧えてくる
 (沈思黙考心眼静かに湧えてくる)
 心眼のするとさ凡人近寄れず
 心眼で交叉を渡る白い杖
 心眼は人の心をまで見抜き
 (心眼に黒い心を見抜かれる)
 心眼に迷い生じて来た夜明け
 (心眼に迷いの影がふとよぎり)
 たしかなる心眼妻はもっていた
 (またしても妻の心眼に見抜かれる)
 心眼に適った婿だ安泰だ
 (心眼に適った婿で平和です)
 欲のため心眼曇り踏みはずす

實 武水 やすお ふみ 同 勝美 同 山久 同 ちよ 同

(ふと湧いた欲に心眼曇らされ)
 自分へはすりガラスの心眼で
 新総理心眼持ってと期待する
 (新総理よ心眼もてと期待する)
 心眼の若さで家族丸裸
 (心眼が狂って一家丸裸)
 親友に心眼など要らぬ今
 (心眼など要らぬ心友持つ強味)
 父の前隠し通せぬ心眼力
 (父の心眼力へ隠し通せない)
 父の心眼力へ隠して心眼湧え
 (父の心眼力へ隠して心眼湧え)
 本ケ顔で刑事の心眼湧えている
 (本ケ顔で刑事の心眼湧えている)
 見積りの棟梁心の眼で計り
 開眼に叩き叩かれ寒稽古
 (寒稽古師の心眼に叩かれて)
 心眼で覗けば仮面すけて見え
 心の眼見たい振りして射る
 (心の眼が見たい振りして射る)
 心眼を開いて夢が消えてゆく
 (心眼を開けば夢がさつと消え)
 心眼が顔での笑いを見逃さず
 (心眼が顔での笑いを見逃さず)
 心眼がお世辞笑いを見逃さず
 (心眼の狂いのなさを誇る祖父)
 心眼を狂わせてしまふ色と慾
 (心眼を色と慾とが狂わせる)
 前衛書に心眼までも迷わされ
 心眼と肉眼共にぼけ始め
 (心眼と肉眼とつちもボケ始め)
 核心だけ見える心眼磨いとか

柳右子 同 廣幸 同 キミ 同 兼治郎 同 胡頹子 同 佐代子 同 千子 同 英子 同 久子

「夜市川柳」募集

題

「踊り」 選者 森中恵美子

(句箋に一句ずつ、三句以内)

締切 3月15日

投句先 千593堺市堀上緑町二一九—二

河内天笑方 堺川柳会

(核心だけ見える心眼かくし持ち)
 心眼は贗作やつぱり許さない
 (心眼に贗作あつさり見破られ)
 心眼を開けば紙背に徹すかも
 心眼に接し過去を懺悔する
 (心の温さへ懺悔すると決め)
 心眼で見れば身近にある平和
 心眼で見る仏像に笑みがある
 (心眼にうつる仏像笑み給う)
 百忍は心眼磨いて日日新た
 心眼が宿っているよな母の背
 (母の背で母の心眼が光つてる)
 心眼のにぶい夫婦にある平和
 (心の芽えた女の薄笑い)
 心眼の湧えた女の薄笑い
 心眼で胎児は外界を見つめる
 凡人の心眼曇ってばかりいる
 心眼を迷わせる色多すぎ

同 三男 同 保夫 同 雅水 同 忠広 同 みつる 同

(心眼を迷わす彩が多過ぎて)

性格不一致心眼開けぬまま別れ
心眼でうしろの敵を斬り捨てる

心眼が遠き雪崩の音を聞き
恋人の心眼片方閉じたまま

深い仲心眼どっかへ置き忘れ
心眼に掛ける眼鏡の度を計る

心眼が開いたか運が付き始め
心眼にうつる世相の裏表

心眼は開けず俗臭掌に余り
心眼を開けば苦楽同居も可

心眼を開いて善を身につける
心眼にうつる情けの裏表

心眼を清める朝のお題目
心眼へメスを入れた日の焦り

あや子

三五島

桂子

公乃

寿美

同

芳水

同

元江

同

紀久子

一分間の柳論

U町の川柳仲間が四年前から約十名ほど
句会を始めたが、彼等は「落ちこぼれの集り」

と自嘲する。地域の文化人や有識者は、みん
な伝統的に短歌か俳句だからである。ある人

が川柳に興味をもつようになっても、山と海
に囲まれた地域社会での人間関係に縛られて

転向しにくい事情もあって、当分は仲間がふ
える望みは持てないようである。

二年前から毎月の句会へゲストとして出席
して、この現況を見て知り「現在の短歌、俳

五十路ゆく心眼いまだ開かれず
傷つてから心眼で人を見る

八起してやつと心の眼を開き
心眼に叶った嫁が見つからず

陶工の心眼佗びの彩に住み
非行の芽母の心眼におびえ

心眼でしっかと握った綱さばき
心眼を閉じて老眼円く生き

ホステスの心眼財布の中を読み
心眼に射られ黙秘が泥を吐き

心眼と猜疑のまなこ似て非なり
心眼へきのうの敵が消えてゆく

心眼を開けば霧の海晴れる
心眼へ生きるあしたが見えて来る

心眼の一途と壁を突き破る

同

幸子

同

芳枝

同

一止

同

同

若宮武雄

句に対する川柳の格差の縮図」として、やり
きれない思いである。

彼等には「どうか、周辺の人間関係を慎し
んで、みんなが、さすが川柳人と言われるよ

うになろう。これが、この町で川柳を伸ばす
唯一の道」と励ましている。

都会での大会の盛大さに馴れている川柳人
や中央の方々も、末端の、この哀れな現状を

見すこしては、川柳の速やかな地位進展は難
しい、と思えてならない。

心眼に尋ねて白い旗を振り

心眼へ素直になれぬ性を持ち
心眼のレンズを磨く本を読み

心眼へつべこべ遂に恐れ入り

(惠二朗短信)
川柳は文芸であると共に個人の趣味の一種
である。川柳は個人の趣味の一種であると共に

に文芸である。かく申すと賛否両論が湧くか
も知れぬが、それはご自由である。

題譲る 3月20日締切(5月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井一九一三四

(七一一) 本田恵二朗

川柳塔社常任理事会(2月1日)

出席者 栗・薫風・形水・紫香・潮花・文
秋・与呂志・太茂津・笛生・重人・ゆきを・

鬼遊・柳宏子・岳人
(議事並に報告事項)

★西尾栗主幹・理事長より寄贈いただいた川
柳塔社基金の運用方法につき協議。

★宮口笛生氏所有のいちご畑を開放してい
だきいちご狩行を五月一日に行うこととな

り、具体案を協議決定(詳細は本誌表紙裏に
発表)。

■3月の常任理事会は1日(火)

中島生々庵名誉会長・西尾栗主幹理事長就任披露

'83新年おめでとう会

1月15日
大成閣

小出智子

一月十五日はまだ松の内、演壇脇の松の緑が鮮やかに金色の屏風と調和して、この日はかりはお正月気分、あちこちで新春の挨拶を交し合う風景もあり、おめでとう会ならではの賑わいのうちに、予定の出席を上回りテーブルを急遽増やすなど係の者も嬉しい悲鳴をあげる。

今年の中島生々庵名誉会長、西尾栗主幹・理事長就任披露と重ねてのおめでとう会であるが、生々庵名誉会長には目下リハビリにご専念とのことで、お姿の見えないのがなんとも淋しく、昨年は小石奥様と一緒ににお出ましになり、情熱の籠ったご挨拶をされたのが今も忘れることが出来ない。

栗主幹が、川柳塔は一つのファミリー、その中で私はおじいちゃんとしてこれからの仕事をさせていたきたいと、いつもの和やかなお人柄の滲み出たご挨拶をされ、十二日の朝日新聞夕刊に掲載された『最近の柳誌・柳句集から』を、読んでいない方のためにと読みあげられた。高杉鬼遊さん、村上田鶴子さ

んの句評に、季語の使われ方が俳句の場合より鋭くて単刀直入であり、柳人によって切り開かれる季語の将来については真剣に注目する価値があるう、と川柳塔とその作品を評価されたことは非常に喜ばしい、これからの川柳への道を、お互いに励むようにとのお言葉であった。遠来のお客様が紹介され、シャッターを切る音があちこちでして、雰囲気の高まる中で、東野大八先生は、ものやわらかな中に厳しさのあるお話振りでテレビの『峠の群像』ならぬ『川柳の群像』を書くに情熱的に語られ、二十一世紀の川柳を創ってほしいと力説されて感銘を深くした。

句会部の段取りも良く、薫風副主幹の「玄」栗主幹の「島」の兼題の披露が笑いも混じるうちに終る。

会場のムードも一変して、大坂形水氏の乾杯の音頭で和やかな祝宴に移り、昨年九月に亡くなられた瓢太さんの後を引き継いで、柳宏子さんの鮮やかな手捌きで『川柳塔万歳、新年おめでとう会をたのしくやろう』のマジ

ックが披露され、宴は愈々盛り上がる。遠来の方々の唄や、デュエット、軍歌、鈴の鳴る隠し芸とたのしく果てしもないが、演芸のトりに知る人ぞ知る天笑さんの唄う「お前に」をもつて終宴となり、栗主幹の音頭で大成閣の天井も破れんばかりの万歳三唱で散会となった。

黄昏の心齋橋筋は成人の日とあって若者で溢れ、その中へ三々五々と帰路についた。遠路ご出席いただきました東野大八（美濃加茂市）奥谷弘朗（倉吉市）柳葉鶴丸（松江市）小西雄々（鳥取県）石垣花子（米子市）八木千代（米子市）林瑞枝（米子市）政岡日枝子（米子市）の皆さん、ありがとうございました。

兼題「玄」

橋高薫風選

三角に手足いのしし出来上り
いのししに一番星がまだ見えぬ
玄に七福神が乗って来る
はたん鍋昔話しの好きな母
だまされぬ舌を持つてボタン鍋
いのししも峠でチョット思案顔
猪突猛進のかけから見えぬ年男
亥年の妻と娘のいる怖さ
猪の牙は案外もおまんこ通ってんねん
ライバルも亥年と聞いて闘志湧く
亥一匹手の鳴る方へは歩まない
文秋
柳伸
みつる
健司
鶴丸
鶴丸
鶴丸
鶴丸
雀踊子
与呂志
幸生
英千子
寿子

本社 二月旬会

会場 なにわ会館

七日 午後六時

「流転」の選者、阿部柳太氏が披露の前に亡き父上の生き方に触れ、流転と流浪の違いについて話された。面白くてタメになるミニ柳話でした。

笠原吸江氏が風邪でお休み、「やっぱり」は児島与呂志氏が代選。

二月の月間賞は北勝美氏が獲得された。

(史好記)

(受付—与呂志・敏)

(進行—天笑・鎮彦・射月芳)

香港A型とかいう流感がはやり、電車に乗っても会社に行ってもゴホンゴホン。人混みに出て行かぬのが一番の予防と分つていてもそうは参らぬのが浮世の義理とサラリーマンの辛さ。ここ数年、風邪を引いたことがない筆者がダウンしたくらいで、今月は少いのは、と心配していたが、一月以上の盛会、まことに嬉しいことでした。

おはなしは今月も西田柳宏子氏にお願いする。

『他社の句会に顔を出していて最近、感じたこと、それは課題吟の選者が、与えられた題について何冊も本を買ってきて勉強させている。柳歴も古く私から見れば大先輩とも言える方にして、この熱意と努力には心打たれた。自分の持つ知識だけで選をすることに忸怩たるものがある昨今、ぜひ見習ってきたい』

出席者—与呂志・敏・紫香・美智子・狸村寿美・薫風・春江・はつ絵・英子・潮花・カズエ・喜風・鬼遊・悦郎・古都路・春蘭・三十四・山久・みつ子・幸・恒明・規不風・以兆・度・天笑・柳宏子・蕉露・岳人・智子・栗・冬葉・翠光・雀踊子・二三・萬的・勝晴・洋敏・信治・月子・美幸・射月芳・英王子・湖風・寿子・柳伸・鎮彦・浩一郎・頂留子・凡九郎・吐来・重人・儀一・千代三・律子・勝美・白水・兼治郎・水客・あいき・雅風・文秋・白鬼・綾珠・酔々・柳太・楓楽・景子・トメ子・泰子・太茂津・恭太・風童・健司・武太・史好・幸生・和子

席題「ラスト」 亀山恭太 選

ラストから走るひよこがこけそうで 紫香
どん尻でいつそ気楽な落ちこぼれ 潮花
ラストダンス切ない胸を賭けてみる 二三

ラストまで欲をすてない安楽死
ラストダンスカンカンノウでも踊ろうか
ラストシーンに橋山節が鳴り響く
人生のラストチャンスへ靴磨く
お見合へこらがラストかも知れぬ
ラストまで従いて来る気の笛
ラストダンス企み通り足を踏む
ラストまで賞品の出た幼稚園
ロボットのラストは油切れてくる
蛍の光もう勉強はせんでよい
ラストまで粘って体をかわされる
ラストダンスを踊る一人は決めてある
ラストまで堪忍袋切らずいる
熟年の弱気ラストを考える
絵にもなる男九回裏締める
ラスト飾る豪華で哀し祭壇よ
ラストまで知っているのは黒田節
裏方が息をひそめているラスト
この余韻抱いてワルツをラストまで
ラストチャンスへ薄紅をさし髪を結う
意気地なしラストチャンスをふて寝する
ラストへヒーを苦しませれという他人
ラストまでねばり車で送られ
ラストダンスの相手は妻と決めてある
私小説のラストシーンは決めてある
瞳を伏せてラストチャンスを待つ女
ラストダンス君の瞳の中にいる
ハイヒール砂漠に脱いでおくラスト
ラストシーン涙を見られないように
あいき
柳宏子
楓楽
天笑
山久
悦郎
景子
儀一
太茂津
千代三
三十四
鬼遊
恒明
信治
千代三
はつ絵
健司
重人
寿美
幸
はつ絵
太茂津
月子
楓楽
智子
湖風
酔々
鬼遊

ラストスパートかけたいとこで息が切れ
 まだまだと思つてゐる間に来たラスト
 忍従やせめてラストは華やかに
 停年間近ラストを飾る席もあり
 不沈空母ラストシーンが見えてくる
 ラストシーンの余韻に酔つてゐるしま
 ラストスパートへライバルの息を読む
 ラストまでトイレを我慢して見てる
 ラストダンスまでは小さな意地を持つ
 ラストシーン男の背が写される
 エンドレスベルトの寿司が売れ残り
 花道を歩いてラストだと思つ
 自信ないのでラストから名を捜す
 針のない時計がほしいラストです
 ラストまで鶴を折つてゐるバーの隅
 遺言を書く心配もないラスト
 愛憎のラスト女は米洗つ
 家康の心でラストチャンス待つ

席題「表」

久保田 以兆 選

英子 射月芳 美幸 萬的 景子 柳宏子 律子 重人 水客 萬的 幸生 射月芳 律子 蕉露 英子 信治 悦郎 恭太 鎮彦 天笑 泰子 千代三 武太 千代三 風童 凡九郎 勝晴

裏表無い人だから頼られる
 表から見れば刑務所温かし
 表面から見れば弱い女です
 表門犬が寝る位置があり
 表から来る吉報を待ちつづけ
 内職に表も裏も無い帳簿
 表向きは派手にかざつた門構え
 表向きは優しい妻であつて
 メッキした偽の表はすぐばれる
 さりげない表情男をときめかせ
 表向き仲良い顔で里帰り
 表には出てない儲け出す税吏
 表向きはしきりと言ふ事にする
 表面は他人装つてゐる二人
 表からいくからあつさりことわれ
 庶民です裏も表もない暮し
 雑巾の表おんなの彩をみる
 祝宴の表に出ないなみだ壺
 表だけ格好つける映画村
 表面の嘘に欺かれてはならぬ
 表向きだけは夫をたてておく
 表には出さぬ男の胸の内
 表から舞い込む夜の請求書
 表面に出ない男に敵がない
 年令の差があり表を避けたがり
 表には聞こえぬように喧嘩する
 表向きの話で酒が進まない
 表向き男は涙見せられぬ
 表から入ると誰もあやします

与呂志 岳人 雀踊子 萬的 柳伸 幸美 寿美 和子 幸 洋敏 射月芳 文秋 水客 月子 度 重人 白兎 はつ絵 武太 柳宏子 楓楽 山久 寿子 雀踊子 与呂志 和子 律子 湖風 洋敏

表から逃げて裏から鬼が来る
 表にはしない約束金を積む
 表には出ぬが人形の糸を持ち
 あたたかい方が表と限らない
 パトロンに当分しておく表向き

兼題「並ぶ」

小出智子 選

鬼遊 武太 泰子 美幸 以兆 曲ん手 凡太郎 凡太郎 凡太郎 女 どんたく どんたく 重人 潮花 恒明 天笑 以兆 鎮彦 寿美 吐来 度 規不風 太茂津 二三 英子 文秋 勝美 三十四

並ぶつて言葉が劣等感抱かず
老人医療世間ばなしの顔並ぶ
三人官女並べて心覗きたし
忍耐の笑顔が並ぶ尉と姥
白旗を出すとうしろへ並びに米
難民が並ぶわずかな糧がある
まん丸い輪を作るかに並ぼうよ
並んだらもうライバルをいしきする
肩書を並べて揺れる父の塔
少女歌劇の足が並んでいる平和
春のベンチにアダムとイブが並んでる
家並みに昔が残る宿場町
列の中ほどに並んでいる安堵
立飲みに並ぶ上下のない顔で
羅漢寺仏の並ぶあたかき
幼稚園おもちゃのように並べられ
正直に並んで売り切れてしまふ
過去帳に並ぶやさしい仏たち
並んだら息子に負けたなと思ふ
一列に並んで連帯感がない
並んでは疾うに引立て役になる

兼題「余り」

香川 醉々 選

凡九郎 一二三 幸生 美幸 水客 湖風 凡九郎 鎮彦 悦郎 醉々 幸 雀踊子 楓楽 月子 信治 勝晴 浩一郎 湖風 健司 水客 智子

両の手に余る幸せ抱いて寝る
余生いくばくわかないから夢がある
お役所の浪費ホトホト眼に余り
あり余る米と餓死待つ子の写真
世話人が余りの酒でくたを巻き
余りめしピラフの旨い共稼ぎ
人生のお余りベレー帽似合う
数え唄夢が十指にこぼれ出る
これ以上生むと余分な部屋がない
フルムーン豪華な余生だと思ふ
爪に火をともして家計余らせる
あり余る墨お祝いと書いただけ
余りものにしては豪儀なお裾わけ
E・Tが帰ると余る夏ふとん
飲み残したボトルへ朝がふてくされ
八男に生れ余分な育て方
余りにも身近な奴が振る反旗
公園の隅で余った太陽を貰う
身に余る光榮などとうそを言う
不況風吹くと人間余りだす
後始末するの困るほど余り
弁当を開けたら昨日の余りもの
余りにもひどい仕打ちに化けてやる
絵具皿の彩を余して冬景色
勲章をもたぬ余生を大切に
ワイングラスに少し余した深情け
余りものだらうよあいつが呉れたんだ
そこから知りたい膳本以下余白
少し余して犬のみやげにしておこう

和子 あいき みつ子 みつ子 勝晴 冬葉 萬的 美智子 千代三 度 射月芳 鬼遊 柳宏子 岳人 水客 千代三 潮花 紫香 兼治郎 文秋 浩一郎 律子 景子 智子 湖風 凡九郎 兼治郎 智子

▼各地柳壇(追加)

堺川柳会

河内

天笑報

灰色の男を飾る金バッジ
度胸ある男溜息ついてます
仏像を磨く仏師も磨かれる
ひっぱたく度胸あんたにありますが
定年のまだバッジあり趣味に生き
芸人がく鞭は親子を越えてうつつ
まごころが届かぬ寒い向う岸
つぶやいて磨くわたしの欠け茶碗
度胸ある男で鉢巻などはせぬ
くそ度胸だけは女にかなわない
金のいる女であつさり諦める
強敵へ度胸を決める控室
度胸が出来てニューファッションを着る
濃いルーージュ度胸を決めて引いている
世を拗ねて変な度胸をつけてくる
腹を切る真似であつさり引き受ける
まごころを信じ合つてるやしろべえ
まごころが通じなかった冬の海
玄関を磨いて噂寄せつけず
河内弁同士であつさりケリがつき
本当のまごころ持っていた阿呆
バッジにお辞儀しているとは知らず
胸のバッジと討ち死にをするまでだ
あつさり紙の兜を脱げますか
あつさりと花屋の花へ負けておく

たつお 山久 寿馬 鬼遊 茂美 美乙女 紀美女 笑痴 千万子 天笑 喜醉 金太 鈴代 一三三 柳伸 浩一郎 月子 草春 鶴丸 薫風 智子 藻介 夢成

嬉しさの余りに酔った下戸の面
割勘が余ると飲みに行く珈琲
ぶどう酒が余ったユタに飲ませよう

兼題「やっぱり」

児島与呂志報

やっぱりをつけて噂の後妻くる
そこまではやっぱり言えず語尾濁す
捨てた大やっぱり先に帰ってた
やっぱりそうやっぱりたんですか立候補
先ず一歩やっぱり一歩長い道
お父さんやっぱり威張っていて欲しい
雑兵の列にやっぱり居る一人
父としてやっぱり残したい言葉
迷いにまよいやっぱり元の柄にきめ
おせっかいやっぱり黙って居れなんだ
電話口やっぱりあんたも風邪かいな
直感はやっぱり二人出来ていた
強いこと言ってやっぱりせわになり
鳥鳴くやっぱり誰か死にました
やっぱりと皆がうなずく食欲で
雨女やっぱり雨が降ってくる
やっぱりと言いたくはない或る予感
ポックリ寺やっぱり寿命はまなならぬ
景気ええ話やっぱり倒産す
思案した揚句やっぱり断わる気
ここだけの話にやっぱりかたがれる
やっぱりねえ金が無くては駄目ですか
ライバルもやはり持ってた虎の巻
貫禄がおますとやっぱり担ぎあげ

景子
健司
酔々

幸一
枯梢
規不風
天笑
みつ子
みつ子
幸
雀踊子
英子
文秋
以兆
メ女
文秋
岳人
泰子
智子
楓楽
滋雀
天笑
浩一郎
静馬
幸生
智子
柳太

仕来たりにやっぱり負けた祝い膳
やっぱりの噂どおりは味気ない
やっぱりの中に私がきつと居る
手のひらを返しやっぱり敵だった
傷ついた過去をやっぱり持つ女将
そのうちに矢つ張り背く眼と思う
二人目もやっぱり女の子が生まれ
とどのつまりはやっぱり夫婦です
小さいのもやっぱり天向く葱坊主
私の事やっぱり親は気にしてた
予定外ですがやっぱり産むと決め

兼題「流転」

阿部柳太選

温顔が流転知らずと誤解され
花名刺の裏に流転の詩がある
潮騒が流転の過去をかきたてる
糸吐いて吐いて流転の女郎蜘蛛
組のくぼみに流転の過去をもつ
さかだちの下手な流転もあってよい
わたくしは笹舟流転の風に合っ
て能面の彫りの深さにある流転
りんどうの露は流転の涙色
くされ縁と君も思っている流転
ああ流転ヒモになり切る女下駄
我が流転楽しく見せる走馬灯
人生流転お金はたと持ってはる
果てしなき業を重ねてゆく流転
雪に死ぬ流転の果の譬女の三味
生々流転戒名だけはもろてある

英子
柳伸
凡九郎
湖風
萬的
水客
敏
重人
萬的
綾珠
和子
幸一
枯梢
メ女
信治
寿美
美幸
優
与呂志
英壬子
柳伸
鎮彦
文秋
潮花
翠光
醉々
智子

これしきの流転ひとに話せるか
ケロイドが語る流転の人生譜
人生の流転も妻と歩を揃え
流転する妬心に地獄絵巻えさかる
女ひとり流転だんだん厚化粧
糸ぐるま女の流転たぐり寄せ
一条の光と消えて星流転
天上界求め流転の仮住い
軍鶏抱いて男の流転限りなし
苦しみを抱いて流転の業に生き
塞翁が馬とくよくよせず生き
ああ流転女は髪を染めかえる
えんま帳の筋書どおり流転する
つきはぎの流転を男繕わず
振り出しに戻る養とは知らず振る
抹消をしたいページも持つ流転
人生の流転ヘスタート呶々の声
人生の流転始まる赤い爪
七転び八起き流転へ妥協する
騙されて騙しておんな流転する
風よりも虚しい流転暮洗う
六尺の棺に流転の身を休め
ふる里によく似た島で根をおろす
万物の流転を語る冬木立
流転輪廻今バチンコに凝っている
小賢しい嘘はつくまい有為流転
人間の流転の果ては核で死ぬ
七色の笛を器用に吹く流転

武太
三十四
柳宏子
景子
萬的
寿子
墮駄
はつ絵
薫風
冬葉
文秋
鎮彦
度
太茂津
一二三
恒明
柳宏子
英子
三十四
千代三
美智子
鬼遊
あいき
楓楽
太茂津
吐来
勝美
柳太

(清記・楓楽)

老地神壇

■原稿用紙を使用。締切毎月末着便まで。
十七字以内の句に、下三マスに雅号。

(整理・香川酔々)

勝山双葉川柳会

小出 智子報

ポストまで行く姉ちゃん髪をなでる 冬 葉
もついかい鬼がポストで目を伏せる 喜美子
ラブレターポストまで来て迷つて 藤子
久し振りがはすみ里の秋 千 梢
はずみから出た大風呂敷の後しまつ 洋子
手紙の私語夜中も聞いているポスト 妙子
真夜中のポストはきつとメルヘンだ 静子
母さんの弾む声にて花が咲く 芙佐女
年末のポストの赤がせきたてる 柳 伸
ポスト君は子供の声とお友達 あいき
軽はずみひとつ許した罪な風 千 里
弾んずる朝は鍋まで恋の唄 秋 子
恋灯す指ならポストはすぐ分る 節 子
ふらりとポストを探す旅の夜 智慧子
ポストまでの距離で想いを変えている 田鶴子
足音がはすみ嬉しいことがある 千壽子
始終ポストと仲好くしてる温い人 好子
喜びも怒りもポスト受けてくれ いくの
あてられたはずみで答こもり
赤いポストが一番あとで暮れてゆく

履歴書を送るポストに頭下げ
筆まめな人やポスト知っている
夫より抱擁力のあるポスト

川柳翠洋会

山根いつを報

姉の手に亡母のメニューが生きていた
ひっそりと二人で祝う老いの屠蘇
森の回りブルドーザーに喰いつかれ
とそ機嫌に合せて揚る奴だこ
屠蘇をつぐ三三九度の手付きして
床の間に飾る思い出ある絵皿
望郷の南極から屠蘇をつぐ
悠久の流れ一瞬の屠蘇を酌む
ハワイツアーワインではんり屠蘇機嫌
吉日の赤い絵皿は柿右衛門

川柳後楽

井上柳五郎報

嫁き遅れさりとて安売りとも行かず
倒産という安売り派手に売り
安売りへ背のびして見る年の暮
安売場きれいな瞳に妥協する
安売りへ一円玉が生きている
カラオケが家庭に染まる世の移り
やつと寝た子をカラオケでまた起し
カラオケの練習しているしまい風呂
年忘れ義理の酒席が腰据えり
忘年会派手に今年を締めくくり
雑魚なりにしめくりたい年忘れ
慈善鍋不況にさびしい鍋の中
助け合い慈善鍋にもおつき合い
社会鍋不況の波をものに受け
菜の花句会 高杉 鬼遊報
柳 伸

いく子
久子
智子

いつを
兼治郎
綾子
宏子
あき子
仙吉郎
風 童
みつ子
景子
酔々
秋 月
柳五郎
博友
健一
草 風
恒 洋
幽 路
幽 谷
青 銅
哲 郎
玉 水
隆
元 一
和 夫

思い出を連れれば淡い寺の松
左手の魅力おくれ毛かきあげる
妻の枕はいつも自信を持っている
残業の子を待つ夜の毛糸玉
札束の魅力へ南町奉行
妹にまだ庇われた事がない
胎内で育つ命にあるリズム
弥次喜多がやってくる松並木
マリオネットの糸が纏れて雪しきり
老婆の魅力漬物石がある
松植える場所を易者に聞いて見る
胎動に毛糸編む手をはしとめ
裸より思わぬ振りにある魅力
蛇口から朝のリズムがやってくる
絹糸になる夢を追う木綿糸
風見鶏の魅力は上手に鷹となる
スーパの横で自信の小商人
三の糸切れて今宵は雪催い
魅力ある友と一緒に並ばない
口上はうしろで糸を引く気配
底い合う天神さまの細道で
単調なリズムで機械もねむくなる
糸口をつかむでつかい声である
どうせこの世は金が魅力のネオン川

川柳塔からつ

浜本 義美報

クリスマス僧侶も交るイヴの街
全国を自然歩道で巡る夢
好きな酒とめない妻に恐怖感
正月が飛んでくる五十過ぎ
年の暮時計の針とマラソンし
花時計も衣替えて暮近し

悦郎
美乙女
幸 子
シマ子
幸 生
糸 葉
雀踊子
頂留子
枯 梢
冬 葉
みつる
綾 珠
勝 美
春 蘭

喜 風
蕉 路
昭 子
二 天
醉 々
射月芳
凡九郎
鬼 遊
虹 汀
素 石
広 幸
正 敏
フユ子
紫 泉

注連飾り消えて初出の大漁旗

夕焼小焼唄って帰る長い影

目出度さを守るしきたり多すぎる

盃を交わしながらの湯舟かな

灯を消せば古が甦える

川柳大阪

西岡

洛辭報

年の瀬へがくと胸を打つ悲報

再会の涙は温い彩で落ち

窓たたく木枯し友を誘つて

寒くても蓄付けてる春の花

また一つ歳を重ねる餅を搗き

銭持てぬ手相テレビに教えられ

愛冷えてことさら白い飯茶碗

雪霏霏ともし許す気の判を捺す

秋の夕旅の疲れを飲む地酒

兎小屋働き蜂も骨休め

制服を着て正月を忘れて

歳を知る男は素直な趣味を持つ

炎える葉に世を去る色が滲み出る

師走月も後のない気忙しさ

予備選とかかわりも無く枯葉舞う

風見鶏囲んで軍鶏の勢ぞろい

老兵は筋書なんか欲しがらず

ああ少女これが恋とはまだ知らず

暖冬に素足で通う塾の子等

齒の抜けた素朴な顔に嘘はない

出稼ぎの素朴さ都会が押し流す

乱世を素朴に生きるむつかしさ

先輩のレールきっちり踏んでいく

懸念に身の潔白を訴える

久仁於

一竿

ちよ

忠温

義美

洛辭報

雅果

司

勇

真佐志

笑風

六龍子

重人

三千雄

謙翠

比呂志

与呂志

みつる

キミ

君枝

敏

喜醉

本蔭棒

希久志

眉志

だるま

金太

道子

鉄心

天平

懸念に生きて夫婦は肩を寄せ

ハワイ川柳ウィロー社 市岡

世渡りの苦難叙歎で輝けり

世渡りの道は凹凸乗り越えて

二と二とは四だが世渡りそうでなし

貧の神世渡り下手につきまとい

世渡りにわがまま気まま許されず

世渡りは母の教えて父に似る

よい気前人の好かれて世を渡り

世渡りは父母と妻子と勢揃い

我を通し渡る世の中狭くなり

生活は筆一本で世を渡り

世渡りの上手な男早や課長

世渡りの上手下手は妻次第

人の世話できて楽しく世を渡る

先生と呼ばれ世渡り無頓着

そつのない人柄丸く世を渡り

世渡りに花あり風あり情けあり

逆境へ来て世渡りのこつを知り

渡る世を流れるままに身を委ね

何にもかもあなた任せで世を渡る

世渡りが上手で人気上の上

世渡りへ石橋叩く老いの足

世渡りの苦を乗り越えて楽隠居

共稼ぎ助けたり世を渡る

生涯に子供にかけて世を渡る

川柳わかやま

ライバルに新春の笑顔を惜しみなく

原点に立ちこれからの策を練る

尾を振らぬ男の意地は島育ち

伸子

秀山

公女

彩民

カロ女

拝山

雪女

妙子女

虹宵

美江女

天心

十吉

高原子

三石

晚舟

嗣榮

三十四

万里歩

歌子女

千代女

健

着生

風影

張賀

玉泉

三男報

公子

緑良

太茂津

稚代

玉碎の島を観光の靴が踏む

島国の起伏見つめる青い海

荒波を寄せては砕く夫婦島

啄木の涙を知ってる島の砂

島影にもう還らない人を見る

敗戦を知らぬ御魂の島を訪う

戸締りのいらぬ人情の温い島

追従の笑顔だ財産握りしめ

逆境を生きた笑顔に詩がある

商売用の笑顔が板についてくる

造られた笑顔が風が吹き抜ける

信じます笑顔の裏は覗かない

算盤が作る笑顔で障がない

最高の笑顔で借金返してくれ

この笑顔消せばわたしに負けそう

勝つ時に漏らす笑顔にある油断

終幕は笑顔がほしい人生譜

神ぞ知る笑顔の裏のこの痛手

貴方の笑顔にいつもあやされる

敗北を背にこれからへ立ち向う

これからの飛躍へ翼磨いて

これからの手順ぼそぼそ落す声

これからを語る社長の顔になる

これからをくり返しては見ぬ成功

これからというところにある落し穴

玉碎の哀史の島へハネムーン

おおらかに生きて笑顔が大好きで

攻めの手を封じ込めてる笑い顔

潮の香を乗せて興入れ島育ち

もう鏡あんたの笑顔忘れたで

武雄

三千代

信子

裕美

正子

豊太

武太

きみ

幸

紀久子

秀男

光代

英子

登志代

和子

勇太

三男

庄平

善太

寿子

桂子

克子

天彦

大黃

文蔵

柳宏子

正博

好夫

凡太

秀雄

棟上げの笑顔の裏にあるローン

山長川柳会

那須

鎮彦報

三枝子

肩ならべ仲睦まじき夫婦の絵

朝雄

鏡割り分けてあげたい夫婦の和

昇

いばら道夫婦であればなんのその

和子

十年目妻と言う字にあぐらかく

忠

要らぬ事言うなと女房目で合図

嘉道

荷車を押した夫婦の影長し

一美

米びつの重さでわかる夫婦仲

Aさん

人生の荒波に勝つ夫婦船

守

仲の良い夫婦だまって助け合い

恵子

病妻にわが手料理のますしきよ

安弘

あゝ夫婦最初の養生きている

鎮彦

うみなり川柳会

小林由多香報

里帰り三人嬉しい悲鳴出る

舟宏

テレビから悲鳴寝た子が目を覚まし

由多香

おばけ屋敷女上手に悲鳴あげ

盛桜

停電へ真っ先母がマツチすり

華子

ロボットは真っ暗い世とも知らず居る

富美子

飲める口お先真っ暗とも言えず

芳泉

停電の闇の孤独をいとおしむ

天涯

井戸端は話題豊かで抜けられず

比佐志

嘶家もときにつまずくこともあり

とみ枝

あまりにも計算された裏話

雄人

手話の娘の指か愛がこぼれ落ち

葉士々

師の逸話土鍋の湯気と更けてゆく

とし江

身に余る親切何だか怖くなり

静生

こまごまと教えてくれて過疎の駅

熊生

本当の親切嘘をつきとおし

天雀

親切を素直に受ける年となり

行子

即席のそばで不況の年を越し

還暦を越えて夫婦の歩が揃い

罰金も拿捕もおそれず越える海

南大阪川柳会

中川

滋雀報

射月芳

信治

醉々

冬葉

善信

綾珠

文秋

滋雀

度

勝美

雅風

春蘭

儀一

竟然坊

弘生

智子

美房

柳伸

節子

千代三

浩一郎

柳宏子

久子

蘭

礼装をしても蛙は蛙の子

礼装を脱いで自分を取り戻す

礼装をしても蛙は蛙の子

礼装を脱いで自分を取り戻す

礼装をしても蛙は蛙の子

礼装を脱いで自分を取り戻す

礼装をしても蛙は蛙の子

礼装を脱いで自分を取り戻す

礼装をしても蛙は蛙の子

礼装を脱いで自分を取り戻す

礼装をしても蛙は蛙の子

礼装を脱いで自分を取り戻す

礼装をしても蛙は蛙の子

礼装を脱いで自分を取り戻す

礼装をしても蛙は蛙の子

礼装を脱いで自分を取り戻す

礼装をしても蛙は蛙の子

礼装を脱いで自分を取り戻す

礼装をしても蛙は蛙の子

礼装を脱いで自分を取り戻す

礼装をしても蛙は蛙の子

礼装を脱いで自分を取り戻す

礼装をしても蛙は蛙の子

礼装を脱いで自分を取り戻す

礼装をしても蛙は蛙の子

礼装を脱いで自分を取り戻す

礼装をしても蛙は蛙の子

礼装を脱いで自分を取り戻す

礼装をしても蛙は蛙の子

礼装を脱いで自分を取り戻す

またロスがお前は人間やなとぬかす

ロス出さぬだけが利益の小企業

共稼ぎ家計もロスもない生活

川柳塔まつえ

恒松

町紅報

多賀子

秀子

正朗

鳳人

きみえ

三和

勇

芳子

寿美子

敏雄

ちかし

愚童

由郎

弘朗

鶴丸

雪美

舞吉

孤呂二

運児

町紅

白汀報

輝水

英子

恒星

酷税に自當大きくゆさぶられ

コスモスの風にみだれしはんにや寺

柿の種から童話の昔をなつかしみ

種のないものに実のなる筈がない

食べに来た小鳥が種をまいて去に

敏明

秀穂

恒星

英子

輝水

白汀報

町紅

運児

孤呂二

舞吉

雪美

鶴丸

弘朗

愚童

由郎

鶴丸

雪美

舞吉

孤呂二

運児

町紅

白汀報

輝水

英子

恒星

地球の風いつも東に吹いて欲しい
干柿によなべの祖母の手を想い
湯豆腐のゆげを狂わす隙間風
反転も許さぬまの風車
吹き荒れて野分は芒踊らせる
トンネルがわたしのボエムかき消した
格好の噂を風がまきちらし
こぼれ種根性据えて土を這う
乳呑児へ風がまわした風ぐるま
不景気ののれんは風と遊んでる
水面へ風が音譜を書きなぐり

川柳ささやま

河原みのる報

贈りもの受けてはまった蟻地獄
贈りもの大きな熨斗で睨まれる
贈られしネクタイ若さととりもどし
贈賄の罪に達磨が泣いている
亡母の帯結ぶと背が温くなる
結び目ははじけそうです里土産
結び目をほどこいて元の夫婦です
迷う道観音様の美しさ
易の灯に負けて迷った罪一つ
青春の大志大いに迷うべし
迷いから醒めて仏心覗かせる
これこそは満月という黄味の色
東大の卵へ目鼻付けて出し
十代の卵が作る人の波
エリート卵の卵過保護へ風化する
東大阪川柳同好会 齊藤三十四報

ヒデ子 保子 民子 清泉 鈴江 志保 美栄 美栄 芳枝 白汀 貞子 エキオ ユウ也 千代子 テル 百合子 越山 文平 和子 可住 米朝 法平 静子 宗珠 白屯 良京 滋啓

自信もつからだにそつと灸をすえ
うるさいと子を叱りつつ立話
泣き沈む遺族にマイクつきまとい
うるさがられていますと元氣な高笑い
義理頼る保険うるさいとも言えず
たとえは話とうるさくききたがり
口うるさい長屋の寡婦の厚化粧
うるさいから幹事役持ち込まれ
政治家もうるさい人がしゃしゃり出る
うるさいと言つてに勇氣いることも
うるささを買つて一番バツターにし
勉強部屋ママの小言で今日も暮れ
あとがあるからうるさい仕事とも言えず
自治会のどこにもうるさいのが一人
うるさい程おんなじ話を人がする
うるさいが来ぬと淋しい友を待ち
うるさい言葉は一直線に来る
うるさい程来た銀行が来ぬ落目
川柳たけはら 森井 薔居報

喜一郎 綾珠 右近 頂留子 喜風 弥山人 慶三 千代子 弘生 美子 文秋 孤舟 凡九郎 光水 鎮彦 柳宏子 シケヨ 小一方 昭 小三 亜貴子 小五 恵子 小五 仁昭 小五 千恵子 中一 紀 高一 愛 静水 房子 笑子 こうじ

トイレの中で考えること多かりき
秋雨へ春を夢見る種を蒔く
二人目へ三歳兄さんぶつてくる
雑兵の父子で人は裏切れぬ
倅の尺度小さいほうがいい
男坂力を抜いた日が虚し
見え透いた言い訳をした蟻地獄
梅干しの酸っぱさが好き凡夫婦
空っぽにした頭に渦が巻く
松茸の香り分け合う秋ゆたか
京都塔の会 松川 杜的報

蘭幸 純舟 比呂子 節夫 令子 菁居 秀水 淑子 一 路 貞子 美穂 紫香 芳子

佳句地10選 (前月号から)

野呂右近選

華かな舞台支えて黒衣生き 千寿子
妻や子が走る機打なら打つてやる 政敏
酔つて居ないので払われ送りされ 満津子
叱られて崩れた積木組み直す かず子
真髓を語るかけひき等要らぬ 代仕男
乱れ咲く野に猪も眠くなる 瑞枝
凡人のラストにどんでん返し無し 幸生
忙わしげに歩く猫背を風が押す 秀子
成る様になるさと成つて来た強み 真佐志
人間の弱さ護摩木の嵩に見る さよ子

よく切れる方の鉄は妻が持ち
十二月ひとみな恋し雲動く
旅もよし我が家も亦よしほろ酔えば
献血の刻青空を見つめてる
浮雲とひと時遊ぶ無策な日
里帰り娘が坐つてもとの位置
口の減らない人だとも種もて余す
窓越しの雪へ気分が良い朝湯
反省をして同じ本二度三度
逆境の頼りは同じカマのめし
空席の腰かけあわれ廃止線
腰かけてみている冬の花時計
腰かけた座席は夕刊広げない
面接をする腰かけて落ちつかず
ゆずりたい気持ちに腰かけ落着かず

川柳高知

川竹

松風報

花代子 潮花 杜的 和友 明代 水客 白溪子 笛珠 求芽 巨詩 紅陽 白李 飛鳥 如水 一三三 登舟 佳風 春枝 竹萌 広風 弘泉 岩男 節子 草子 菊野 松風

川柳たけはら

森井

善居報

新築の茶の間賑わう春や春
おかげさま今年も言えるおめでと
冬陽さすベビーベッドに夢があり
ははみのりんこのほつてわすれない
こうがいのせきにんだれにもとめるか
おり紙をしながら思う夢の国
宿題を全部終わらせるお年玉
お正月楽しみにしてるお年玉
ハンモック僕らをのせている地球
なんでんでとわが家のチビ助め
どう見ても惜しいと思う粗大ゴミ
母さんは一〇〇点ばかり期待する
弟の先生になるヒマがない
ひとりではない皆さんと親さまと
掌を見つめいのちを見つめおりひとり
同情を拒む少女の試歩の杖
病室は病室自分の家でない
故郷の林檎に義母の子守歌
ささくれた指へ光を増す小石
春風よ受験の子等へそよ吹け
冬の海ムチ打つ菊に波頭
出来てこないの菊を引き抜く菊日和
川柳しんぐう 川上 溪水報

秀水 シゲヨ 比呂子 小一方 昭 小三貴 保 小五恵子 小五千恵子 小五仁 昭 小六尚 美 中一希世子 中一紀 高一愛 静水 蘭幸 善居 一路 令子 淑子 節夫 笑舟 鈍舟 吉加 澄孝 八千代 まさ子 富子 博代 白光子

百万円の毛皮みつめてるさむざ
百万円だんだん小さくなるタイヤ
百万ドル田と言わぬ夜景の値
雑壇で居眠りしてる大臣たち
大臣を呼び捨てにする里の皺
大臣はママで我家はああ平和
大臣になれんよ君は嘘が下手
大臣の名前は知らぬそれで良し
年の暮こっそりそのぞく額の裏
こっそりと母が踏んでた百度石
この胸に抱いた夫の知らぬ人
こっそりとベルトゆるめる会費制
こっそりと柳をかぞえる音がする

倉吉川柳会

渡辺

善句報

幸 弘生 三男 勇太 民代 武雄 大輪 利凡 雀踊子 文水 里美 十郎 宗則 しづえ 秋人 とめ子 かつみ 弘朗 みなと 秋女 千秋 石花菜 満春 車楽 民子 秋草 布堂 夕路

手の内を子供に読まれたお年玉
お年玉貰えば用のないお客

お年玉やクルト買います初笑い
お年玉上下を問わぬこととする

年金のへそくり添えてお年玉
ボチ袋サラリーマンの顔で開け

また一枚すすめ上手に着てしま
丸い背が老いのかなしみ直訴する

川柳化粧檣
味増汁の湯気満ち足りた朝の膳

企みを察した女に酔わされる
話したくないので傘を深くさし

真先に家族に見せたいものができ
歩けるって俵せだナール車椅子

寒菊の霜除けをして気が和み
水遊び二人の末は水喧嘩

晩酌の相手は出来ぬ年の暮れ
夕食のビール始めを妻に注ぎ

出不精も今日は出て行く秋祭り
熟年へどこからとなく髪がぬけ

どこからと言えぬ便り待ち遠し
ザイル切れ消息わからぬままの冬

苔むして碑文も読めぬ供養塔
そう言えは正月らしい酒の酔い

西宮きたぐち句会
素うとんで別れ話にならず

まごころにふれて子の家の三々日
通じ合うまごころ心の奥に住み

この人のまごころ女賭けてみる
お茶会が始まってすぐシビレきれ

始球式ボールのとどくことは稀
墮駄

美香都

美香都

美香都

美香都

美香都

美香都

美香都

美香都

美香都

美香都

美香都

美香都

独歩

碧水

寿朗

観洋

御前

千枝子

柳風

植村客遊子報

岳詩

大鷹

実男

白李

葉香

紅月

秋月

礎石

ささる

伊江坊

奮水

秋信

悲子

永楽

客遊子

西宮きたぐち句会

朝山千世子報

水声

隆子

としのぶ

かすみ

美香都

始めてのデートに妹つれて来る
大吉を始めてひいた初詣り

年始めお金を出す人入れる人
半分ずつ半分に騙される人

嘘半分その半分に騙される
半分ずつやで今も亡母の声がする

米櫃の中は男に覗かせぬ
星空へ祈り初出の靴磨く

銀の匙磨き別れの刻がくる
磨く玉持つ俵せの余生の賦

何もかも磨いて明日の糧にする
ポーナスは餅代という年を越し

永年の女系を変えたる柏餅
暖冬でもつかびて来た鏡餅

南米も雑煮で祝う日本人
餅焼くや夫婦の月日遙かなり

餅を掲ぐ秋田おばこを夢で抱く
鏡餅はヒ割れ出来て初春が行く

お雑煮はやっぱり母の味を真似
百までも生きたつもりの方をすえ

百人の友刎頸の友ならず
百面相出店に並ぶ人生図

百姓を捨てて夜汽車に地図を持つ
煩悩を雪に清めた百八つ

百人一首めばえた恋が触れあって
百科辞典に私の過去が書いてない

結局は見るだけにした百貨店
百花繚乱どこかに白い馬がいる

走るほかなかった母のひとり言
別々の趣味もち両方始めている

福笹の大きい方を撰っている

女

きよ子

貞子

弘生

みつ子

喜代子

智子

幽香

伊升

春子

月子

千世子

右近

笑女

はつ絵

牧郎

伊三郎

美代子

光子

半歩

薫風

キミ

三笑子

ゆきお

宏子

紫香

いわゑ

水客

晴子

満津子

先輩の好きな匂いを覚えとく
人形で終った生にも自負がある

職安を出てまっ直に目刺し焼く
死なれたら困る女房に小言いう

ストレス解消に靴を光らせる
Y・F・C 川柳会

お芝居にしては役者はお粗末で
床山が遺児を育てて無台裏

匂い袋匂う棧敷の初芝居
猿芝居猿も見ている花吹雪

掛け声もない脇役に支えられ
お芝居の上手な女とのんでは

芝居がかりの苦労話にもらい泣き
にらまれて一声かかる大向こう

ドサ回り今夜の忠次街を行く
南座を出て相合傘の橋の雪

米子きやら木川柳会
泰然と怒濤にいとむ磯の島

離島でも海の青さと語る夢
子の船が着いて小島の灯が揺れる

橋がつき島で子を恋う距離が減り
母の島とつても遠い冬の梅

橋がついても島は島から抜けられぬ
島の春別れのドラマ見る波止場

觀光へ島のいくさは風化する
サイパン島戦後派どもは甘い夢

島紬織って本土をまた知らず
台風をもろ手を守る島の木々

離れ島それでも天をひとり占め
岸和田川柳会

植山
武助報

こう

道子

年代

潮花

天笑

翠記報

幸太郎

よし津

翠記

房子

忍

たず子

絹子

節子

たき子

某

千春

あい子

亜弥

瑞枝

日枝子

とも子

花子

伊都

なみ

田鶴

美也

千代

こう

ペン先が尖るとこわい事を書く
ラブレター書く日のペンを選っている

ペンダコもつすれ定年三月過ぎ

ペン先は魔法すてきな恋の詩

病んでからペンを味方にする女

清張のペンが彩るサスペンス

この味を舌に残して帰る旅

健康のパロメータ舌の色をみる

冷凍か活かを舌に聞いてみる

弁解が誤解を生んだ舌足らず

当り年一年の計立ててみる

使い捨てにされて家でも粗大ゴミ

許されぬまじで娘だから孫だから

城北川柳会

野呂

右近報

父と子の酌む盃も春のいろ

晦日そば食へて今年をたべおさめ

湯舟から妻のハミング洩れる宵

師の影は老後の今も忘れない

ビルの影農村迄も伸びて来る

月冴えて残菊庭に影散らし

縁切れは二年つづいて来ぬ賀状

一人居のことは上手なもらい風呂

ピツタリに寄り添って来る妻の影

風呂で歌う民謡自分で聞き惚れる

さて金となると兄弟他人なり

ロッキード影がだんだん濃くなり

迎春の賀状タブって御目出度い

儉約をさせて呉れないコマーシャル

サイレンが走る本当の恋ならば

嫉妬され女であったのに気付き

チラシ見て妻は日課を組み立てる

ひで

さよ子

武助

富志子

月子

月光子

浪速子

春栄

天笑

射月芳

照江

世界人

操子

静子

秀村

志保

炉齊

三和

晴子

松太朗

左春

忠夫

節子

正之

午郎

星斗

頼一

美恵

道郎

初風呂で今年の所感考える

仲間意識一人のユダが突き出せぬ

正月の葬式何だか目出たそう

生真面目が一人居たので座が白け

戦争の影が離れず義手うすく

赤ん坊器用なババが湯浴びさず

胎動の倅せ風呂でかみしめる

伸び縮みする人生の影法師

霧が来て妖性になる露天風呂

月影を千々に砕いて野天風呂

動乱のドラマ影絵に生きて居る

真ん中に小さな影がぶら下り

母ちゃんの日課が終る仕舞風呂

ロボットも組合造ると言うだろう

思考零そろそろ呆けて来そうです

お疲れさんの声が疲れを軽くする

いのししの顔も今年は見直され

酒飲みに帰っただけの帰省の子

争えぬ血のつながりを教えられ

オーエスケー川柳会 大坂

野次馬の横りが本気になつてくる

お祭の獅子はやさしい顔になり

獅子面をしてるがやさしい人となり

Uターンには遅かった回り道

換気扇ストレス吸って回り出し

遠回りしても決心つかぬまま

銀のスプーン回して女の軽い嘘

戦争を仕掛けた歯車回り出し

走馬灯くるくる回る負け戦

茂樹

弘生

新一郎

ふみ

利義

喜洸

テルミ

公一

満津子

右近

笑風

ただし

三十四

達一郎

静歩

千子

好恵

倫子

すみれ

形水報

亜成

てまり

秀泉

聖地

雄峰

博泉

雅洋

登度

一扇

横山一声氏(岡山県)より
句碑建立記念として

金一封 拝受いたしました。

川柳塔社

入仙

凡子

儀一

とし子

さゆり

さよ

すえお

花仔

勝美

百梅

悦郎

トルオ

山久

遊川

主水

春蘭

雅風

綾珠

東雲

白岩

大原川柳会

一枚の枯葉いたぶり雪となる

雪のけて迎えてくれる母がない

風となり雪となる夜の子守唄

文衛報

ひでの

朝代

ゆきお

つもの思慕この新雪に埋めておく
父の忌や雪より白き老母の髪
雪しんしん祠に捧ぐ燈も静か
この風は根雪になると山仕事
野仏にしゃれた姿の雪帽子
豪雪とたたかうチェーン開あけて
真直ぐに生きて茶の間の福笑い
難しいもの一つに忘る術
大黒様洗うて福を待つてみる
歩いても歩いて同じとこに着く
煩惱の一つに消せぬものを抱く
子の算数出来ぬを夫婦なすり合い
真実を知らぬうわさが風に乗る
七人の孫を七福神にする
両の手にこはれる初日抱きよせる
そこはかと生きて迎えし喜寿の酒
生命ある限り忘れぬ被爆の日
忘却を心に決めた冬の雨
初春へ猫もおしやれをしたつもり
母の忌を忘れさせない寒つばき
忘れぐせ自慢のように言う
耕していれば忘れる野良にいる
姑すぐに忘れる丸さ持ちあわせ
初もうでわかつておると福の神
来福という掛軸も押えられ
福引はマッパが当りつつがなし
雪降れば雪の童話で子は限り
むらくも句会

理恵 夢多き女 鈴振る初詣
はるみ おみくじの縁起ふくらむ初詣
直二 柏手がいきわびく初詣
たけよ お互いに盃重ね初詣
智泉 初詣絵馬へ二人の名を連ね
文衛 初詣破魔矢買ひ足す年おんな
辰江 その次の言葉がほしい差し向い
いさむ 初句会心の糸にふれる詩
耕花 挨拶も華やぐおしやれ初句会
玉恵 心境を洗い直して初句会
正巳 初句会一年分のネジを巻く
巴子 祝盃を受けて二十歳の門出する
元江 子育ての昔をしのぶ差し向い
みさえ 新春へもしやの夢をあたためる
敏子 古い二人言う事もなく差し向い
甲陽 祝盃に幸せうつつタイや婚
克巳 差し向い相手のマナーに助けられ
万里会 娘がみんな客で来る日の上機嫌
きよし 上きげん財布の紐をしめ忘れ
やよい 初句会詩の蕾をあたたためる
政勝 晩酌は今日一日の祝い酒
かすこ 差し向い別れをせかす雪が降る
ふじえ

駒つなぎ川柳会
王様の髭快速に酔っている
鯛の目に憎しみのないのが救い
快速をちよっぴり削りよる予算
快速な住居空気がうまいだけ
快速な街で集めるダンボール
暗がりて飯面もぬいで星あかり
いさかいのいつまで続く夜が明ける
溶けて行く打ち明け話にある妥協

はじめ はじめ
峰雪 障子明ければ山茶花の紅が生き
蚊声 生きて行く苦闘がつづいてる夜明け
清祥 日が昇り日が沈むだけ古傷よ
秀子 ダルマの目入れると鯛も桜色
孝華 しきたりも小さくなったにらみ鯛
文子 たい焼の歌ならうたう花子さん
みどり 嫁かぬ娘の胸に秘めているブラン
とみ子 ブラン通り進めば倉も立つた苦
福子 金持ちのブランやっぱり金がいり
一葉 二次会のはははははははははは
百代 吞み食いのブランは先に出来上り
富子 クラス会恩師をびくりさすブラン
小さえ 思案する度に小さくなるブラン
よし子 ブランには入れてなかった逆の月
ヤス子 エリートの子ブラン殺されそうな美女
喜代美 幸せなブランが妻の掌の中に
はる代 それからは貴方ませになるブラン
吉野 かぐや姫のブランになかったプロポーズ
三喜子 蘇える明日香のブランの時計計
林蔵 フロントで余暇のブランの智恵を借る
明朗 チッポケなブラン花壇は子にまかせ
小路報 愛染明王に誓う女とのブラン
小 昇給を妻は見越しているブラン
惠美子 美しいブランに香水かけておこう
白兎 転んでもタゲで起きないブラン練る
柳宏子 権兵衛さんに聞いたブランにしておこう
美房 つつましいブラン老後の花暦
春風 おお恐や不沈空母にするブラン
信義 あくまでもブランであつた母子手帳
柳右子 音立ててブラン崩れた水枕
神様のブランは低い鼻にする

障子明ければ山茶花の紅が生き
生きて行く苦闘がつづいてる夜明け
日が昇り日が沈むだけ古傷よ
ダルマの目入れると鯛も桜色
しきたりも小さくなったにらみ鯛
たい焼の歌ならうたう花子さん
嫁かぬ娘の胸に秘めているブラン
ブラン通り進めば倉も立つた苦
金持ちのブランやっぱり金がいり
二次会のはははははははははは
吞み食いのブランは先に出来上り
クラス会恩師をびくりさすブラン
思案する度に小さくなるブラン
ブランには入れてなかった逆の月
エリートの子ブラン殺されそうな美女
幸せなブランが妻の掌の中に
それからは貴方ませになるブラン
かぐや姫のブランになかったプロポーズ
蘇える明日香のブランの時計計
フロントで余暇のブランの智恵を借る
チッポケなブラン花壇は子にまかせ
愛染明王に誓う女とのブラン
昇給を妻は見越しているブラン
美しいブランに香水かけておこう
転んでもタゲで起きないブラン練る
権兵衛さんに聞いたブランにしておこう
つつましいブラン老後の花暦
おお恐や不沈空母にするブラン
あくまでもブランであつた母子手帳
音立ててブラン崩れた水枕
神様のブランは低い鼻にする

花仔 雀踊子
健司 重人
文秋 冬葉
悦郎 美乙女
眉水 一歩
寛然坊 信治
邦晴 律子
雄次郎 浩一郎
柳伸 弘生
善信 小路
萬の 規不風
頂留子 美代
恒明 智子
千代三 度
一二三 美幸
醉々

募集

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

五月号発表 (3月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栗選
水煙抄 (10句) 黒川 紫選
愛染帖 (3句) 橘高 薫風選
課題吟 (各題5句以内)

「星」 西山 幸選
「髭」 斉藤 三十四選
「島」 山内 静水選

★愛染帖、課題吟へは同人誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋を(使用)ください。

六月号発表 (4月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栗選
水煙抄 (10句) 黒川 紫選
愛染帖 (3句) 橘高 薫風選
課題吟 (各題5句以内)

「坂」 香川 酔々選
「化粧」 森田 カズエ選
「標的」 遠山 可住選

3月の常任理事会は1日(火)

定価 五百円 (送料50円)

半年分 三千二百円 (送料共)
一年分 六千三百円 (送料共)

昭和五十八年二月二十五日印刷
昭和五十八年三月一日発行

編集兼 発行人 中島 蓬太郎
印刷所 藤原 童心社

〒545 大阪府阿倍野区三好町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所 川柳塔社
電話 (06) 691-6914 番
振替口座 大阪・三三三八番

本社三月句会

日時 三月七日(月) 午後六時
会場 なにわ会館
天王寺区石ヶ辻町19-12
地下鉄谷町九丁目・近鉄上本町下車東南
電話 06・772・1441番

兼題 「桃」 「興奮」 「兆し」 「踏む」
野村 太茂 津守 柳伸 神谷 凡九郎 岩本 雀踊子 若柳 潮花

席題 二題 当日発表
会費 五百円 各題三句以内厳守

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川柳塔社

4月の兼題 「だんご」 「見込み」
鈍 嘘

本社4月句会は7日(木)

お願い

誌代その他本社へのご送金は必ず左記
会計室へお願い致します。

★郵便振替(大阪33368川柳塔社宛)を
ご利用下さるのが安くて便利です。用紙は
郵便局にあります。

〒581 八尾市中田二一三〇一 高杉鬼遊方
川柳塔社会計室

編集後記

☆「川柳太平記」は江戸の考証的興趣から身近かな人物往来へと移って来た。文字通り川柳界の群像である「群の群像」ならずとも群像という言葉に魅力を感じるのは、少年期に三国志演義や水滸伝の豪傑たちの群像に血を湧かせたことにもよる。大八氏の文章は、一度書いた原稿を二年分程も撤回し、新たに集められた資料を加え書き直しをするという意欲的な労作であるので期待をして頂きたい。☆旧臘二十九日「漢介さんですか」と電話がかかる。すぐ「ああ、私が漢介ですわ。漢介から漢介さんへ電話するなんて、これも腑ですなあ」と。年賀状では、ふあうすとの室田千尋さんからうっかり上下を間違えましたというのが来るし、岩井三窓さんは、番傘のおめでどう会で階段を踏み外し足の指を骨折されるしでわれらが太正も老いたりの感深く、私とて同断である。

☆川柳塔の発送、本社句会の清記など若い人達のご協力を仰いでいる。(薫)

■願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月のころ、と詠って、思い通りで没したのが、漂泊の歌人西行法師である。建久元年二月十六日から、現在の暦でいえば、三月二十日頃のことになる。行年七十三才。終えんの地は富田林近郊の弘川寺であった。この寺は、近鉄富田林駅からバスで約二十分の行程の所にあり、閑静な趣きをそなえている。かつて「菜の花句会」でこの寺に吟行を行なったこともある。西行の家集「山家集」には、「世をのがれて伊勢の方へまかりけるに鈴鹿山にて」と題した「鈴鹿山うき世をよそにふり捨てていかななりゆくわが身なるらむ」と漂泊の想いをのべた和歌がある。鈴鹿山と鈴の縁語を用いた歌であるが、西行自身鈴となつて鳴って居るのであろう。芭蕉も漂泊の俳諧師として西行に心酔して

いたのであろうか、猿蓑「梅若菜」の巻に、稲の葉延びの力なきかせ、弥碩の句に、発心のほじめにこゆる鈴鹿山、とつけている。ちなみに弘川寺には西行塚がある。河内国弘川寺の遅日かな(酔)

▼国鉄のことを書く。岡山県川柳大会に出席のために鶴橋から赤穂線の邑久までの乗車券を買った二二〇〇円である。途中三宮から乗った柳人に聞くと、一七〇〇円とのことであった。差額六〇〇円が鶴橋から三宮までの運賃になる。勿論在来線の話である。帰途は三宮までの切符を買い三宮から私鉄に乗った。梅田までが二一〇円で環状線で鶴橋までが一四〇円である。計二〇五〇円で帰ることができた。一回の乗り換え労力が二五〇円の計算になる。ケチで言うのではないが便利さとは金の掛るものである。しかし、角栄路線と言われる上越新幹線ができて新津の人は随分不便をして

いる。その様に客のことを考えない政治屋の利権に国鉄は食われていたのだ。(き)

☆日銀の卸売物価統計の対象からマツチがはずされた年間出荷額が国内総製品出荷額一万分の一を割込んだのが「落選」の理由。こんな記事が新聞の片隅に載った。商品の栄枯盛衰は世の習いとは申せ、ことマツチとなると私の心は痛む。☆私の父は終世マツチ業界に身を置いた。工場勤務が多く、転勤の度に一家は神戸、姫路、須磨、岩屋、明石と移った。小学校は三度変った。工場は私ら子供達の遊び場でもあり、軸木や薬品の匂いの中で育ったと云つてもよいだろう。☆父は旧制中学三年の時、郷里を出奔、この業界に身を投じたのであるが、明治後半から大正時代、マツチは生糸と共に日本の輸産業の花形であったのである。一代で財をなす人が続出し、町中がマツチ景気に沸いた時代もあったとか。

郷党の先輩Ⅰ氏もその一人で、父の出奔もⅠ氏の成功に刺激されたのではないかとと思われる。後に長年勤めた会社を辞め独立した父はⅠ氏の援助を得て事業を興すこととなるが、日を追うて戦時体制強まり志を伸ばすべくもなかった。昭和20年冬、父は不遇の中で死ぬ53才。☆私にはマツチと書くより「構寸」の方が父の匂いがして好きである。(史)

肉体疲労時のVB₁₂補給に

アリナミンA

アリナミンA25の効能・肉体疲労時・病中病後・妊娠・授乳期のビタミンB₁₂補給、神経痛・腰痛・筋肉痛・肩こりの緩和、脚気、☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆くわしくは医師、薬剤師、薬局、薬店にご相談ください。
武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町2-27



句集・自費出版・詩集・自叙伝
随筆集・論文集 “あらゆる印刷,,



大阪印刷工業株式会社 (営業部)

八尾市若林町2丁目114番地

☎0729-49 3777 (代)

姉妹品大和錦印



柔道衣
剣道具

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

早川繊維工業株式会社
大阪支店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電話 (779) 1690~2番